

布 天 下 武

図説 織田信長

◎特別寄稿
堺屋太一 信長の先見性と経済感
戸部新十郎 疾風怒涛"天下布武"への道

NHK新大河ドラマ
「信長 KING OF ZIPANGU」の世界

毎日グラフ別冊 定価1800円 毎日新聞社

毎日グラフ別冊 図説 織田信長……疾風怒涛"天下布武"への道…… 毎日新聞社

毎日グラフ別冊
一九九二年一月一〇日発行
図説 織田信長
編集長 田中 薫
発行所 毎日新聞社
東京本社 〒100-51 東京都千代田区一ツ橋一―一―一 電話(〇三)三二一二―〇三二一
大阪本社 〒530 大阪市北区堂島一―六―二〇 電話(〇六)三四五―一一一一
西部本社 〒802 北九州市小倉北区紺屋町一三―一 電話(〇九三)五四一―三一三一
中部本社 〒450 名古屋市中村区名駅四―七―一五 電話(〇五二)五六一―一二一一
定価一八〇〇円(本体一七四八円)



雑誌 68337−92 T1068337921800 Printed in Japan・図書印刷株式会社印刷



天下布武

図説 織田信長

NHK新大河ドラマ
「信長―KING OF ZIPANGU」の世界

◎特別寄稿
堺屋太一 信長の先見性と経済感
戸部新十郎 疾風怒涛"天下布武"への道

毎日グラフ別冊／定価1800円 毎日新聞社



織田信長

永楽銭の黄旗を翻し、斬新な着想と果敢な戦略で、〝天下布武〟への道を突き進む。

信長四十八年の下天の夢は、炎の如く燃え上がり、中世から近世へと時代を大きく回転させた。



毎日グラフ別冊

図説 織田信長

目次

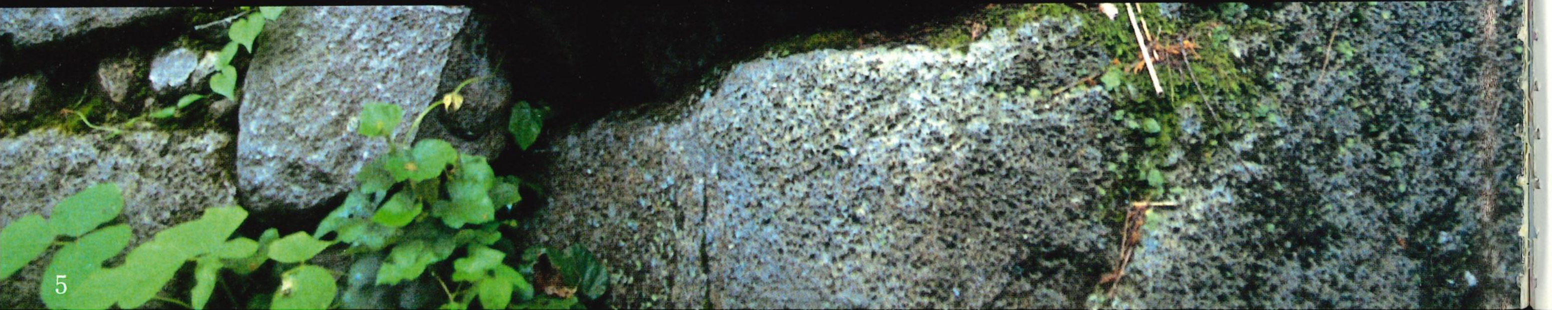
写真撮影――田原 豊

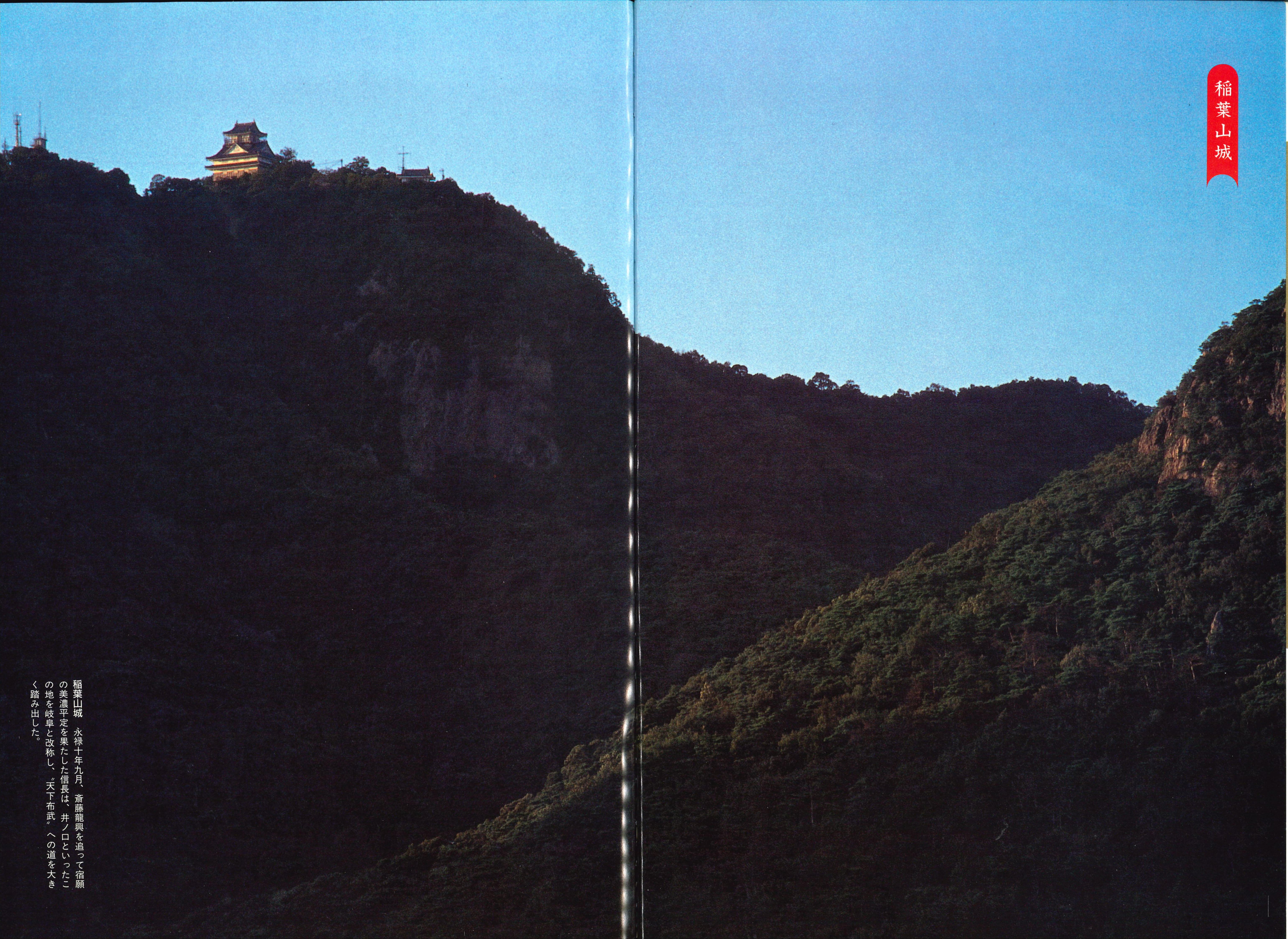
表紙デザイン／藤山 進

AD・エディトリアルデザイン／清水 潔

地図作成／布目久雄

企画・編集／今井敏夫





稲葉山城

稲葉山城　永禄十年九月、斎藤龍興を追って宿願の美濃平定を果たした信長は、井ノ口といったこの地を岐阜と改称し、〝天下布武〟への道を大きく踏み出した。

織田信長の先見性と経済観

市場経済を信じた革命児

堺屋太一

■信念の合理主義者

日本史上、織田信長ほどよく知られながら、多くの誤解を受けている人物は珍しい。

信長は「革命児」と呼ぶにふさわしい斬新な独創性と合理的な意識を持ち、大胆な決断と過激な行動でそれを実現したが、決して短気急性な人物ではなかった。彼の生涯を分析すれば、実現的で辛抱強く、むしろきわめてしつこい性格であり、徹底した懲り性でもあったことが分かる。

信長は、自分の目と耳と頭を信じ、自らの考察から発した信念を実現するためには、生命を賭けることも厭わなかったが、短気の故に理想の実現を危うくするような冒険に走ることはなかった。生涯ただ一度の失敗―本能寺における無用心―を除けば、信長の選択は、彼の理想実現には最良の道であったといえるだろう。

それにも拘らず、信長が苛烈な気迫にあふれた性急な人物と見られがちなのは、日本史上類例を見ないほどの先見性と確信性、そして妥協を許さぬ理想追究の姿勢の故であろう。

例えば、少年期の信長は、礼儀を守らず奔放な言動を行ったため、織田家中の評判が悪く、父・信秀の跡目相続でも不利な状況になったとされている。事実、弟の信行との家督争いでは織田家累代の支持を失い、劣勢に立たされている。信長が弟信行を抑えて、織田家中で優位に立つのは、弘治二年（一五五六年）の稲生の合戦で信行軍を撃破してからである。

この兄弟合戦の折にも、柴田勝家、林通勝ら、織田家の重臣の多くが信行方に加わったため、兵数でははるかに少なかった。この時は信長自身が林通勝の弟林美作守を槍で突き殺すほどの奮戦によって、ようやく勝利を得たのである。



楽市楽座の制札（岐阜市神田町６　円徳寺蔵）　市場の自由経済をめざす信長は、それまでの座の独占的な特権を撤廃、税や諸役を免除して庶民の活力を導きだすべく、新しい城下町づくりを始めた。



織田信長画像（重文・神戸市立博物館蔵）現存する信長像のうち最も古いもので、本能寺の変後、まもなく描かれた。天正十一年の古渓宗陳の賛があり、信長の実像をよく伝える。



織田信長の花押



天下布武の印章

しかし、これとて少年時代の信長が自由奔放が我儘の結果とはいえない。当時の織田家、尾張一帯の政治人脈と社会状況を考えれば、のちの信長の激烈な改革思想を実現する道はそれ以外になかったであろう。

信長の少年時代の尾張は、群小土豪（豪族）の支配する状況だった。信長の父親信秀は、尾張の守護斯波家の守護代・織田大和守の家老に過ぎなかったが、才知と武勇で尾張下四郡の旗頭になった男である。従って「織田家累代の重臣」といっても同等の豪族、たまたま信秀個人の才覚に服していただけである。従って、彼らの推挙支援によって家督を楽々と継いだとしても、生涯頭が上がらず、尾張の小天地で土豪たちの利益と調整に汲々とせざるを得ないだろう。天下を取ることは勿論、近代的な改革も合理的な政策もなし得なかったことは明らかだ。

このことは、信長より十三歳年長であった武田信玄を見てもよく分かる。信玄武田晴信は、甲斐の豪族に推されて父信虎を追放、二十一歳で家督を相続し甲斐の旗頭とはなるが、このため生涯を甲斐の豪族たちの利益を図る周辺の領土拡大に擦り減らしてしまう。信玄が信長よりもはるかに早く大名としての活動をはじめながら、結局は大きく立ち遅れ、天下の覇権にはるかに遠い状況のまま世を去ったのは、そのためである。

そのことを思えば、天下を取って世の中を合理的に改革するという究極の目的を実現するためには、早初から豪族たちの支援によってではなく、自前の兵と銭で尾張を抑えなければならないと考えた信長の発想は実に正確である。信長は、「現実的とは着手し易いという意味ではなく、究極の目的を達成し易いことだ」という事実を、正しく理解していた数少ない日本人の一人である。

■将よりも民に訴えた政治

いつの時代でも改革は、既得権益を犯すので、その社会の支配層や特権階級の反対を受ける。このことは、現在のソ連のペレストロイカでも、日本の行革でも当てはまる。勿論、信長の目指した合理的近代化改革も例外ではなかった。

信長の生きたのは戦国後半、十五世紀以来中国から流入した新しい技術や農作物が普及し、土地鉱山開発と経済生産が著しく発展した時期である。このため各地で適地適産が行われるようになり、余剰農産物の流通も飛躍的に拡大していた。この時期に地元の豪族たちが力を蓄え、中世的な足利体制から自立するようになったのは、こうした経済発展を基礎としてのことであった。

織田信長は、この事実も踏まえて、現実に則した政治行政体制を作り、より合理的でより拡大的な世の中を実現しようと考えた。この男は、物財が豊富なことこそ人間の幸せだという近代精神にあふれていたのである。

しかし、それには現状から利益を得ている特権階級の反対が起こる。織田家中の重臣である地方豪族もその中の一つだ。彼らはより古い足利体制には叛いたが、自分たちの得た小さな特権の擁護には必死だった。勿論、それ以上に古い体質を持つ京の公卿や伝統ある寺社も、失われつつある特権にしがみついていた。

こうした状況では、合理的政革を目指す信長が、寺社にも豪族たちにも頼れなかったのは当然だろう。このため信長は、織田家累代の重臣たちを差し置いて、一般民衆に働きかけた。兵農分離と楽市楽座がその象徴である。

信長の兵農分離が明確になるのは、永禄六年の小牧移城からだし、楽市楽座のはっきり記録されているのは永禄十年美濃加納市が最初だが、それよりもはるかに前から、その前兆はあったはずである。そしてそれが尾張の民衆の大きな支持を得ていたものと思われる。生産力の拡大によって成長希求と出世意欲が高まっていた農民層には、豪族たちの門地主義と商人座による流通統制は重い首枷となっていたからである。

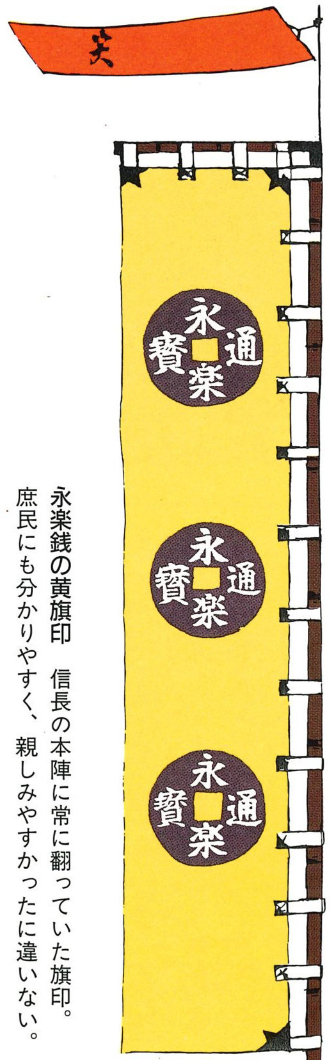
信長が早い時期から領民一般の人気を得ていたことは、有名な桶狭間の合戦の経緯からも推測される。通俗的な講談調歴史小説では、夜中に起き出した信長が、敦盛の仕舞を舞い



織田信秀像（名古屋市中区・萬松寺蔵）信長の父。尾張下四郡の守護代織田大和守の一族で三奉行の一人だったが、しだいに主家を圧倒して那古野城を奪い、西三河までも制圧した。



信長着用紺糸威胴丸具足（重文・京都市・建勲神社蔵）



永楽銭の黄旗印　信長の本陣に常に翻っていた旗印。庶民にも分かりやすく、親しみやすかったに違いない。

終えるや、一気呵勢に田楽狭間に突進、奇襲によって今川義元の首級を上げたように語られているが、事実は決してそうでない。

信長が清洲の城を出たのは永禄三年五月十八日の夜半、午前零時であり、田楽狭間の今川義元の陣を襲ったのは翌日の夕方、午後三時近くである。この間信長は熱田神宮に参拝したり、前線の砦に立ち寄ったりして時を過ごしている。少数とはいえ一五〇〇人以上の将兵が動き回っているのだから、周囲の住民が気付かぬはずがない。それにもかかわらず、信長軍の動きを今川方に通報した者はいなかった。そのことが今川義元の油断を誘ったのである。

逆に信長方には今川軍の配置が正確に入っていた。最終的には義元の本陣を伝えたのは、簗田政綱といわれているが、それまでの信長の進路もかなり正確だったから、何度も通報があったらしい。

人間誰しも勝ちそうな側に付きたい。当時の状況では今川必勝と見えたはずだ。普通ならほう美を目当てに今川方に通報する者が多いはずなのに、この場合は逆になっている。

それだけ尾張の住民の間では信長の勝利を期待する者が多かったのであろう。これは日本の戦乱においては珍しい現象である。

織田信長は、民衆を味方にすることで、豪族や寺社、各地の大名を制圧したのである。



信秀の墓所　小豆坂合戦で勇名を馳せた信秀は、天文二十年三月、四十二歳で末森城に病死した。萬松寺での葬儀のさい、信長が位牌に抹香を投げつけた話は有名である。



若き日の信長像（岐阜市金華山公園・北村西望作）「人目も憚らず、栗柿は申すに及ばず、瓜をかぶりぐいになされ、町中にて餅をほうばり、人により懸かり」（信長公記）て歩く信長は尾張の〝大うつけ〟と云われたが、弓鉄砲、兵法稽古には人一倍熱心であった。

■市場経済を目指した経済政策

合理的近代社会を目指した織田信長の経済政策の中で、特筆すべきものは、関所の廃止、楽市楽座、通貨統一、検地による租税統一であろう。これらはすべて中世的な閉鎖状況を破り市場経済と自由競争を目指したものといえる。

勿論、これほどの大改革が一挙にできたわけではない。信長が死去した天正十年の時点でも京七口の関所は活動していたし、かなりの座は存在した。楽市の方も実行されたのは限られた都市だけであったらしい。検地に至っては畿内の数カ所で差出し検地が行われた程度で、実測による検地が実施されたのはごく僅かだったとみられている。

これらの点を挙げて「織田信長の時代はまだ中世末期、本当の近世は豊臣秀吉の時代からはじまる」と指摘する学者もいる。

経済政策というものは、決定から実施までに時間がかかる。そしてその実施が現実となるにはさらに長い期間が必要だ。十数年間の信長の支配期間にその領国すべてを変えられなかったのは当然であり、全国的平均値でみれば信長時代がまだまだ中世的であったことは否定できない。しかし、政治家としての信長の評価は、近代的な市場経済と成長政策を決定し実行に移した意志と意欲によって判定されるべきであろう。そうだとすれば、織田信長は、まぎれもなく近代的な市場経済と自由戦争を目指した改革者であった。信長は、周囲に多くの強敵が存在する中で、敢えて旧勢力を敵に回すような大改革を決定し、その一部を実行した。いくつかの点では、現実的な妥協を交えながらも、全体として見れば、



古渡城趾（名古屋市中区・東本願寺別院）　信秀が天文四年に築城。童名吉法師といった信長は十三歳でこの城において元服した。天文十七年信秀が末森城に移ったので、廃城となった。



津島神社（愛知県津島市）　伊勢湾の交通路として古くから繁栄した港湾商工都市で、織田家の経済力を支えた。信長が流通経済を重視したのも、この土地の経済効果が大きかったからである。



勝幡城址（愛知県平和町）　天文三年五月、信長はこの地に誕生した。母は信秀の正室土田氏。

実に整合性のとれた政策体系によって、貨幣経済化による自由競争経済を作り出そうとしたのである。

織田信長の生きたのが十六世紀後半、ヨーロッパでもカトリックによる反宗教革命運動が盛り上がり、王侯と都市大商人による商業独占が厳しかった時代であることを考えれば、その進歩性は際立ったものになるだろう。

プロ集団による分業組織の形成

織田信長の近代的先行性を示す第二の点は、人事と組織の大改革、つまり兵農分離と軍事行政組織の新編成である。

兵農分離は、信長より先に畿内の大名や越前朝倉家で行われていたとされている。確かに朝倉家の一乗谷居館の周辺には、農地を離れた専業武士がかなりの数居住していたらしい。しかし、それは農村の生産力の拡大によって農耕に従事しなくとも年貢で喰えるようになった豪族とその郎党が集まったに過ぎず、積極的な政策的意図によって推進されたことではない。これでは意思決定が集議化し、ますます政策の革新性と行動の迅速さが失われる。事実朝倉家は、このために適時有効な軍事行動が行えず、信長に滅ぼされるのである。



生駒氏の墓（愛知県江南市・久昌寺）　信長の継室。生駒家宗の女で吉乃といい、信忠、信雄、五徳（女）を生んだ。信忠の誕生した時、よろこんだ信長は生駒屋敷で夜を徹して踊り明かしたという。

織田信長の凄まじさは、意図的に「銭で雇う兵士」を作り、それによる雇兵専業軍団を作り出したことだ。永禄頃の日本社会では、まともな人間はすべて何らかの組織（集団）に属していた。農民は村落共同体に、商人は座に、僧侶は寺院に、聖は高野山といった具合である。各地の大名の軍隊は、それぞれの領地の主が、その支配する村落共同体から壮丁を動員して連れて来る集合体だった。ここでは何らかの組織にも属さない人間は、野盗乱輩、闇商人、乞食浮浪の類、つまりこの世の中に入れられないアウトローであった。信長はそうした連中を敢えて雇い、専業兵士にしたのである。

勿論、兵士の質は悪く戦には弱かった。信長が七年をかけて美濃攻めをしていた頃には、農民集団からなる美濃斎藤家の軍によく負けた。時には数倍の兵数がありながら敵を見た

熱田神宮



熱田神宮（名古屋市熱田区）桶狭間の今川義元をめがけて、深夜清洲城を出撃した信長は、永禄三年五月十九日の早朝、熱田神宮に到着。ここで必勝の願文を捧げた。



信長塀（熱田神宮内）　桶狭間合戦に大勝した信長が、お礼として奉納した築地塀。土と石灰を油で練り固め瓦を厚く積みかさねたもので、兵庫西宮神社の大練塀、京都三十三間堂の太閤塀とともに日本三大土塀の一つ。

だけで大逃走、慌てて長良川で溺れる者が続出する有様だった。当時の兵が戦場で勇戦するのは、帰郷のあとで周囲から臆病を笑われたくなかったからだ。帰るべき共同体を持たないアウトロー集団は、いざ戦となれば我先に逃げ走ったのである。

そんなことを何度も経験しながら、信長は、この弱い雇兵軍団を拡大して行く。織田家の重臣の中にも、そんな信長を阿呆とも狂人とも見る者がいた。ところが長期的にはこの弱い雇兵専業軍団が信長の覇権を築くことになる。農耕にたずさわることのない彼らは、いつでもいつまでも戦場に出られたからである。

美濃における斎藤勢は強かった。しかし、彼らは農繁期には帰郷しなければならない。その隙を狙って信長は攻め込み、僅かな留守部隊だけの砦を数十倍もの兵で陥す。斎藤側がようやく動員を終えて出動すると信長は負けて逃げ帰った。だがすぐまた攻め込んだ。このしつこさに、美濃の農民兵は疲れ果て、遂には織田家に帰属する方が楽だと考える者が続出した。そうなるまでの間、信長は約七年二十回ほども美濃に攻め込んでいるのである。

信長の敵はみな、美濃斎藤家と同じ誤りを犯した。近江の浅井長政は、堅固な小谷城に立て籠れば、織田の兵は遠からず引き上げると思っていた。ところが信長は、羽柴秀吉に雇兵軍団を付けて付城に籠らせた。このため浅井は年貢徴収ができなくなり、三年間で瓦解してしまった。石山本願寺も武田勝頼も毛利の諸将も、この信長と雇兵専業軍団のしつこさに破れたのである。

さらに信長は、この軍団の特色を十分に活用するため、黒鍬者と呼ばれる工兵軍団や荷駄者という輜重兵団を作った。これによって戦闘部隊の戦力と滞陣期間を大幅に引き上げたのである。工兵と輜重兵を重視した点では信長は昭和の帝国陸海軍よりもはるかに進歩的であったといえるだろう。組織的に見れば、織田信長は中世的属人組織から近代的な機能別組織への転換期に立っていたのである。

人材登用と技術改新も組織から

この組織改革は、さらに二つの利点を織田家に加えた。その一つは人材の登用を可能にしたことだ。

戦国時代は下克上といわれるので、どこの大名家にも一介の素浪人から一軍の将になった人物がいるように思われがちだが、実はそうではない。前述のような豪族連合軍では、支配する土地住民を持たない者は指揮官になれない。浪人が陣借りをして奮闘しても個人芸、それで手柄を立ててもせいぜい十人程度の家来を養えるほどの身分にしかなれない。

とても豊臣秀吉のような小柄非力な男が大将にまでは出世できないのである。

ところが、織田家に限って、秀吉や明智光秀、滝川一益など、出身前歴不明の大将軍が何人もいる。織田家には銭で雇った専業兵士がいたから、才覚のあるものをすぐ小隊長、連隊長に就けられるのだ。彼らはそれを率いて指揮官、情報官、技術将校として活躍、どんどん出世した。そしてそれがまた織田信長の強力な軍事力と行政力を形成したのである。

もう一つは新技術の導入である。信長が鉄砲三千挺を駆使して武田軍を破ったことや、鉄貼の巨船で毛利水軍を撃破したのは有名だが、それができたのは鉄砲を扱う足軽を主役とする部隊編成のできる雇兵集団を作っていたからである。

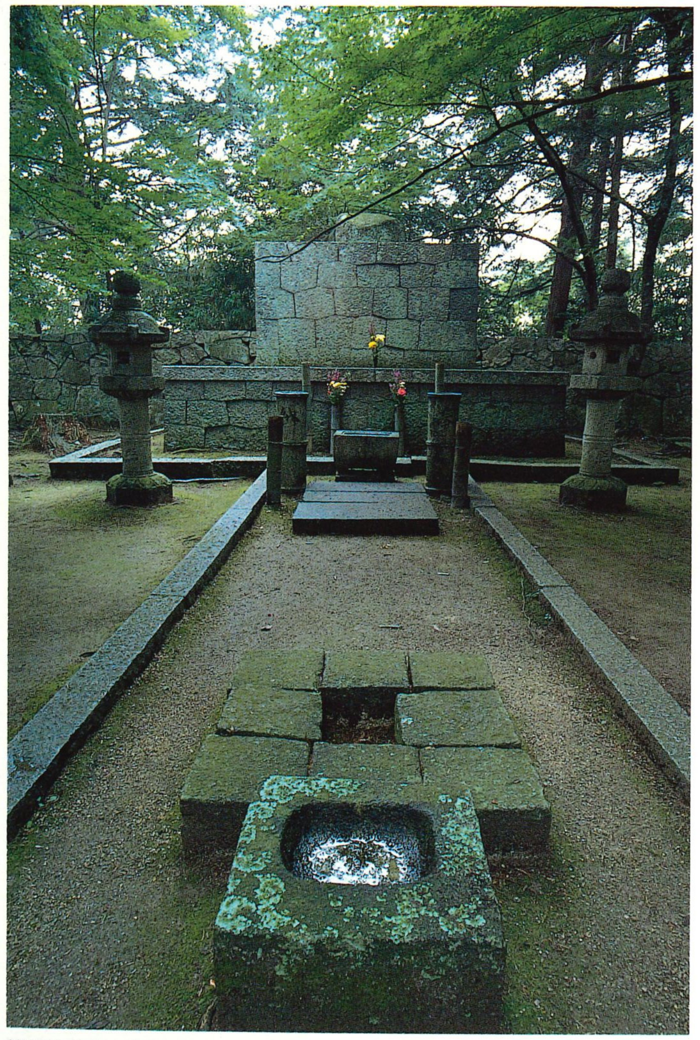
武田も毛利も上杉も、鉄砲が兵器であることは百も承知していた。しかし、それを大量に集めて前面に出すためには、馬上槍一筋の重臣たちを背後に下げなければならない。彼らが連れて来た農民兵に鉄砲を組織的に扱わせることなど不可能だった。せいぜい裕福な自作農が鉄砲を買い求めて持参する程度では、組織的な軍事力とはならなかったのである。

人材の登用と新技術の導入のためは、まずその基盤としての組織改革の必要のことを忘れてはならない。織田信長は、早い時期にそれを発見していたのである。

織田信長の時代は、軍事生産技術でも飛躍的な進歩の時期だった。信長はそれをいち早く感じ取り、現実とさせたのである。



安土城遠望　信長は安土山に壮大な城を計画し、天正四年正月、丹羽長秀を総奉行に着工。同時に城下町建設も行い、町民は自由と安全が保障され、市場はすべて楽市とした。



織田信長の廟所（安土城二の丸跡）　中世から近世へ日本の歴史を大きく転換させた革命児・信長は、麾下の部将・光秀の反乱にあって、あっけなくその四十九歳の生涯を閉じた。

疾風怒涛
天下布武への道

戸部新十郎



吉良大浜の景観 天文十六年、今川方の吉良大浜城攻略に初陣した信長は、各地に放火して那古野に凱旋した。信長十四歳であった。

織田信長の魂は焔につつまれていた。燃え立てばわれわれもひとも焼き尽さずにはおかず、終生消えることのない焔だった。

父信秀は、早くもただならぬさまを見抜いたに違いなく、生まれたばかりの信長に宿老平手政秀をつけ、那古野城（現名古屋城二の丸辺）を修築して居城させた、庶兄二人をさしおき、相続させるつもりだったのである。

ときに尾張は守護斯波氏が衰え、守護代織田氏が実権を握り、織田氏もまた二家に分れ、岩倉城の伊勢守系が上四郡を、清州城の大和守系が下四郡を支配していた。信秀の家は、その清州織田氏の三奉行の一つだった。

実情はしかし、そう簡単に図式化されていたわけではない。支配している範囲も、勢力の消長につれて移動した。要するに、力が力を示す世だった。

そんななかで、信秀は着々と頭角をあらわしてきた。本拠も勝幡（しょはた）から古渡、末盛と変えていくが、富有の港町津島を領内にもっていたのが大きい。

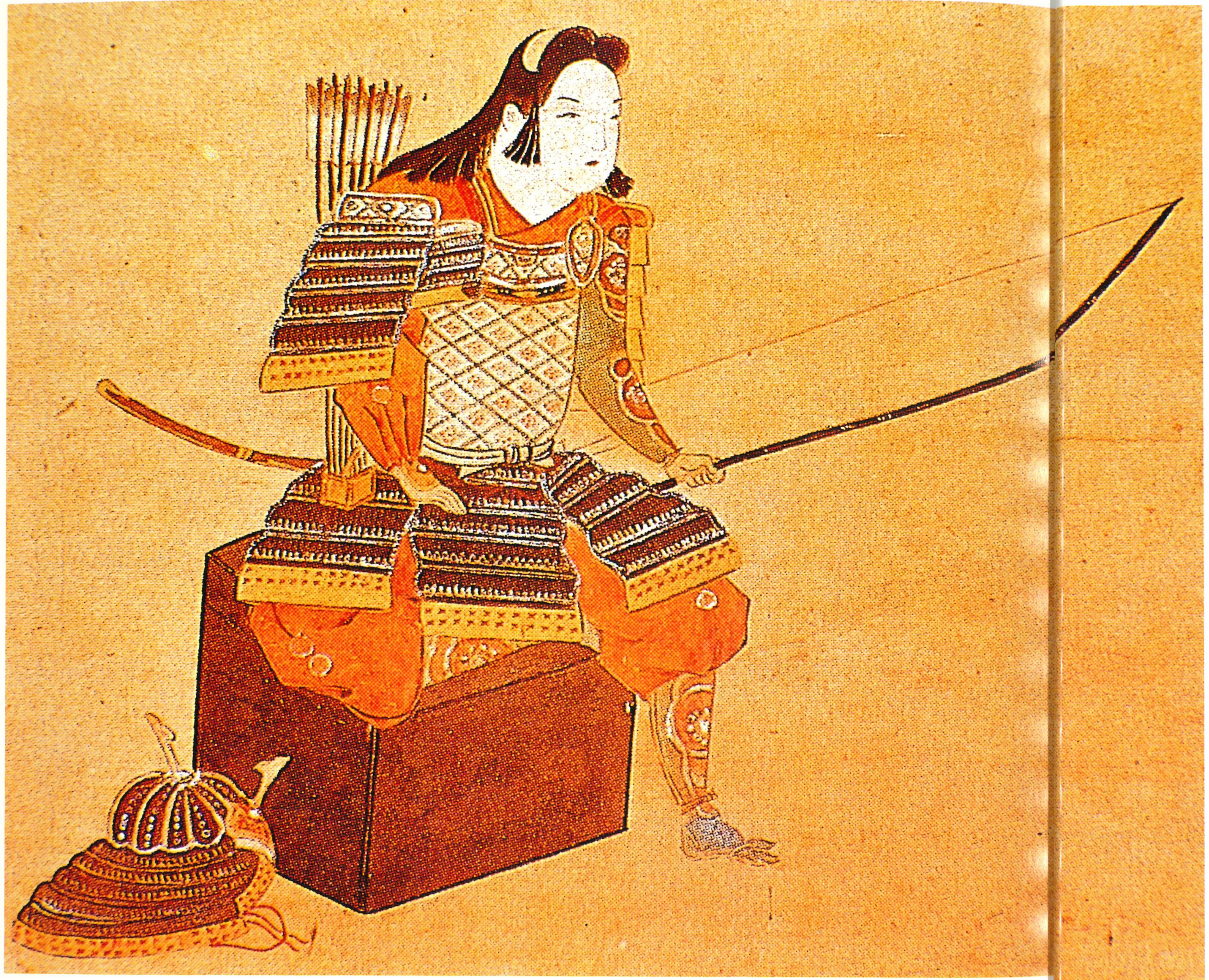
かれは近隣への侵攻を試みた。それは表裏常ない一族や有力国人層の統一を図り、緊張を保つうえでも必要なことだった。三河松平氏と戦い、進出してきた駿河今川氏と戦い、西の美濃斎藤氏と戦った。

信長の元服は天文十五年（一五四六）、十三歳のときだが、翌年、今川方の吉良大浜攻めに初陣した。元服した武将の子が行う〝武者始め〟だが、紅（くれない）筋の頭巾をかむり、鎧をまとった馬にまたがり、敵陣一帯に放火しながら駈けめぐった。後見した政秀は、

「なかなかの若武者ぶりである」

と感嘆した。





信長公初陣の図（柘植修氏蔵）

この年九月、信秀は斉藤道三の加納口（岐阜）まで攻め込みながら、道三の策略にあって大敗した。ついで十月、岡崎の松平広忠を攻めようとして失敗した。

東西両国に敵をもつことの不利はいうまでもない。信秀は道三と和睦を図った。おりから道三方でも美濃三人衆らの謀反があったりして、和睦を得策と考えたのだろう、翌十七年に和が結ばれた。

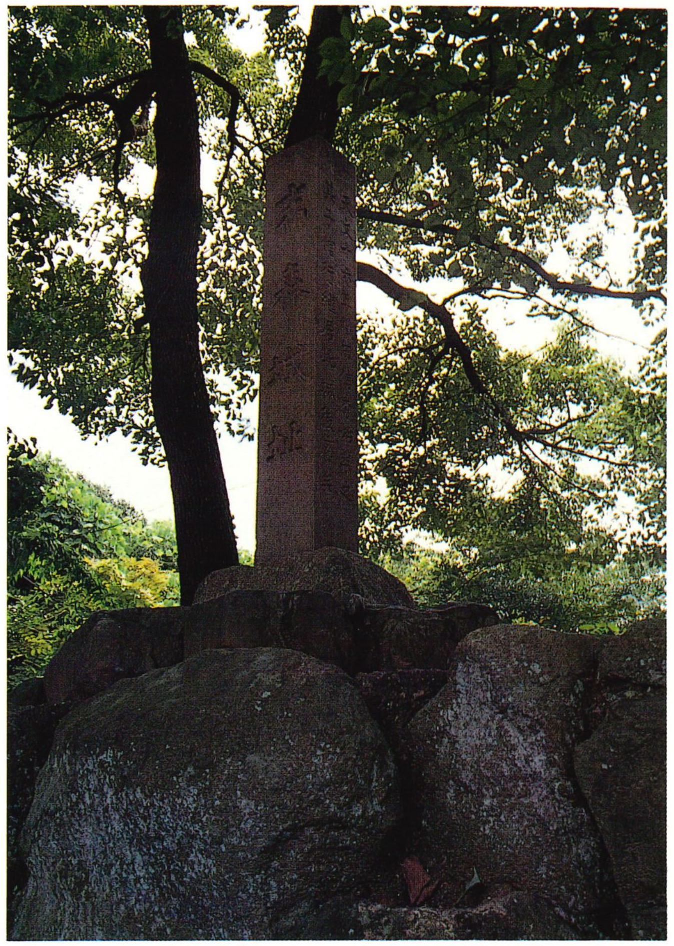
そのさい、信長と道三の娘、濃姫との婚約が整った。和睦にも婚約にも、仲立ちしたのが政秀である、被官とはいえ、独立した一勢力であり、一筋縄ではいかない政情がうかがわれる、

輿入れは翌十八年二月である。信長十六歳、濃姫僅か十歳という。以後、濃姫の消息は不明になるのをみても、典型的な政略結婚だったことがわかる。

この前後、二年間にわたり、松平氏の御曹司、竹千代（家康）が人質として名古屋万松寺の塔頭、天王坊にいた。本来、今川家に行くべきところ、奪われて送り込まれていたものだが、のち強力な信長の同盟者となる人物である。

〝大うつけ〟の青春

「袖をはずした湯帷子（ゆかたびら）を着、半袴をはき、火打袋などさまざまな袋を吊り下げ、髪を茶筅（ちゃせん）



末森城址（名古屋市千種区城山町） 信秀の死後、信長の弟勘十郎信行が城主となったが、信長と対立、弘治二年稲生原に戦い大敗。一旦は降伏したが、翌年清洲城に呼び出されて謀殺された。

に結い、赤糸、萌黄糸で巻き立て、人目もはばからず、栗、柿、瓜をかぶり食いに食い、人の肩につらさがりて歩く」（『信長公記』）

というのが〝かぶき者〟信長の姿である。正常ならざる異風、珍奇好みというほどの意味だが、内に横溢する覇気が、反俗的性向や異装となってあらわれて、なんの不思議もなかった。

やることといえば、朝夕の乗馬、弓、槍、鉄砲といった軍事的調練である。自ら先頭に立ってやったが、ここでもかれは因習に捉われなかった。

槍は長柄がよく、集団がさらによいと知ると、長柄の槍隊を設けた。鉄砲など、足軽風情の持物とされていたが、かれは平気で扱い、機能や効果を知った。役に立つものなら、役に立たせればよいのである。

鷹狩りもした。従者はそれぞれ獲物を探す者、見張りする者、信長へ注進する者など、分担、部署が分けられていたが、面白いのはみな百姓のいでたちをし、鋤鍬をもって田畠を耕す恰好をしていることだった。

鳥、獣を相手に用意あくまでも周到である。あるいは子供騙しといってもいい。目的物を獲るためには、衣装やしきたりなど構わない。必要とあれば、児戯に類することでも、大真面目に実行する。

ときには幸若舞いを舞い、小歌も歌った。ただし、幸若舞いは、

「人間五十年、下天のうちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり」

という〝小敦盛〟の一曲だけであり、小歌

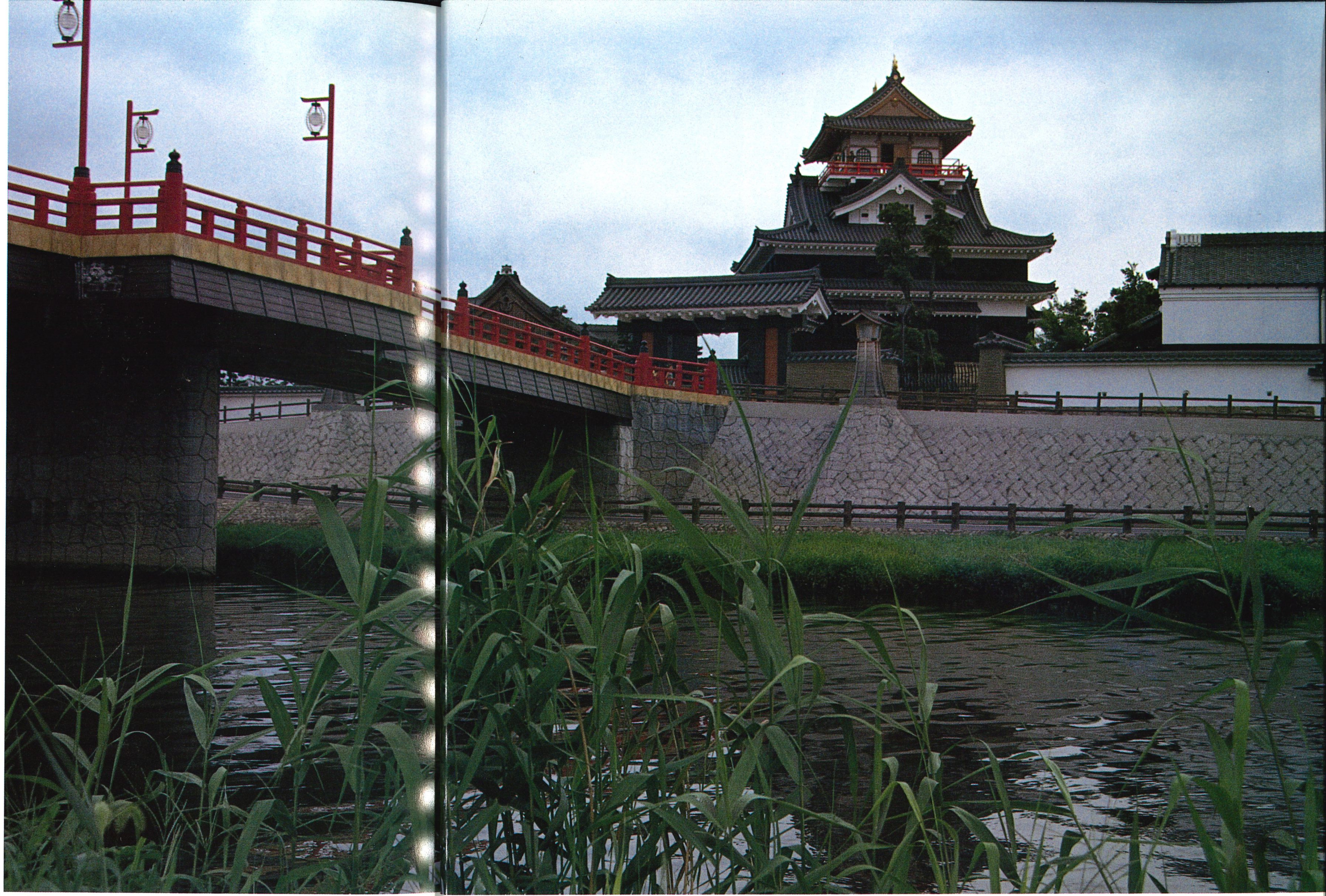


平手政秀の墓（名古屋市千種区・平和公園） 信長の誕生から付けられた傅役。大うつけの信長の前途を憂いて諫死したというが、信長と政秀父子との確執もあって、その真相は明確でない。



岩倉城址（愛知県岩倉市） 尾張上四郡を治める織田信安の居城。信行と同盟していたので信長の攻撃をうけた。永禄元年の浮野合戦に敗れ、翌二年に落城し、ここに信長の尾張統一がなる。

は、
「死のうは一定、しのび草には何しようぞ」の一節だけである。人生無情といった気取ったものではない。どこか投げ捨てたような不気味さがあった。
甲州の武田信玄は、来訪した旅の僧から、尾張のこうした奇態な若者の様子を聞き、考え込んでしまったという。なんでもなさそうだが、それらは信長の軌跡を形づくる要因である。
天文二十年三月、信秀が流行病にかかって死ぬ。信長が家督を継ぐが、葬式のさい、太刀、脇差を三五縄に巻き、袴もはかず、仏前へ抹香をくわッと投げかけた、という奇行を見せる。対して弟信行は容儀を正し、進退整々としていった。
この一事だけでなく、かねて信行を立てようとする動きがあった。よくあることで温和な弟にひいきする母親がおり、信行づきの柴田勝家、林通勝らの宿老がいる。じじつ、何度か信長に背く。
そうでなくても、尾張の〝大うつけ者〟といわれる信長の登場で、一族が隙を狙う。清州の織田信友（守護代）がその家老坂井大膳らと勢力挽回に動き出し、犬山の織田信清が領内に侵入する、といった有様である。
すでにして、血縁や一族との争いがはじまっていた。伸展しかけた信秀のあとを継ぎ、尾張を平定するには、どうしても通らなけれ



清洲城　再建された清洲城。信長は清洲城に移った頃から、「上総介」と名乗るが、これは朝廷から正式に任官されたものではなく、自称していたにすぎない。



清洲古城趾　天文二十三年五月、尾張下四郡の守護代織田信友を殺害して清洲城を奪った信長は、那古野城を叔父の織田信光にゆずり、居城を清洲に移した。



聖徳寺会見跡（愛知県尾西市）　美濃の斎藤道三が信長と会見の後、「わが子供らは、あのたわけが門外に馬を繋ぐべきこと、案の内にて候」と嘆かせた逸話はよく知られている。

ばならない道があった。

信長はしかし、ひとつひとつの事象には素早く出陣して始末したものの、平生のうつけた振舞いはなにも変わらなかった。ことにこのごろは、丹波郡宮後（江南市）の生駒八右衛門という土豪のもとへ足しげく出かけていた。

八右衛門は油商を営み、裕福で侠気があり、いつも武辺者がごろごろしていた。蜂須賀小六、前野長康といった尾張土豪たちだが、木下藤吉郎も出入りし、梁山泊の感があった。

信長はのち家来になるかれら土豪たちとの交遊を楽しんだが、ありようは八右衛門の妹吉乃に惚れ込んで通った。吉乃は土田(どた)弥兵衛という者に嫁ぎ、死後実家へ戻っていたものである。

かれはこの吉乃とのあいだに、嫡男信忠、二男信雄、家康の嫡男信康に嫁いだ徳姫をもうけている。かれらの母親を生駒氏、ないし土田御前とよぶが、とりもなおさず吉乃のことである。

その間、後見役平手政秀が諫死した。諫めた素行のなかには、吉乃との関係があったかもしれない。



尾張平定

尾張の動揺は、織田一族にとどまらない。在地領主層にまで及び、鳴海の山口左馬之助、笠寺の戸部政直らが反旗をひるがえした。近

長福寺（名古屋市緑区有松町桶狭間）義元の茶坊主林阿弥は織田方に捕われ、首実験を命じられて助命された。のち阿弥陀仏を奉持し、この寺の本尊とした。





桶狭間古戦場田楽坪碑　今川軍の先鋒松井宗信（二俣城主）の後裔、陸軍大将松井石根の書。



義元公軍議の跡　義元は諸将を集め、尾張攻略の作戦をここで開いたという。



今川義元公本陣跡（愛知県豊明市・高徳院）圧倒的な大軍を率いる義元は信長の奇襲をうけるまで、悠々と昼食をとっていた。



義元公首実験の跡　前線から送られてきた織田方の武将の首を改めた所。







鳴海城址　今川軍総崩れの中にあって、ただ一人鳴海城将の岡部元信は「主君義元公の首を返すならば城を明け渡すべし」と抵抗し、信長を感心させた。

鷲津砦跡　今川軍の朝比奈泰能の攻撃をうけ、守将織田信平は将兵の大半を失って落城した。





大高城址　義元の戦死を松平元康（家康）は信じられず、何度も部下に調べさせて、やっと納得した。

丸根砦跡　松平元康が強攻し、織田方の守将佐久間盛重以下、多数の将兵を討ち取ってこれを落とした。



小牧城（愛知県小牧市）　美濃攻略の本拠地として築城、永禄六年清洲城からここに移った。尾張平野を一望できる要害の地でもあった。



桶狭間供養塔（長福寺境内）　長福寺の善空上人は今川軍が到着すると、村人の先頭に立って酒肴を供したほどの今川びいきであった。今も義元の木像を安置する。

隣諸国も不審の眼をもって眺めた。

舅である斎藤道三が、信長に会見を申し込んできた。自分の眼で信長を確かめようというにあったが、道中ではかぶき、会見の場ではすらりと正装して出た信長に気おくれして、

「残念だが、うつけの信長に、わが子らは馬をつなぐことになろう」

と嘆息した。

客儀だけではあるまい。引き連れた長柄の朱槍五百本、鉄砲五百挺という新兵器に圧倒されたのである。さきの信秀もそうだが、乱世を踏み分けてきた練達者が見れば、信長の異能ぶりがわかったはずである。



稲葉山城　永禄十年九月、美濃三人衆の内応によって稲葉山城を急襲し、これを落とした。斎藤龍興は伊勢長島に逃げ、信長はついに宿願の美濃平定をはたした。



戦人塚（愛知県豊明市）　曹源寺の快翁和尚が今川軍の戦死者二千五百余人をここに葬り、塚を築いて供養したという。一説に、信長が大勝利を得た記念に築いたものという。

当の信長に、どれほどの計算があったかわからない。が、うつけた行状は、結果として敵味方をあぶり出し、それぞれの野心を露呈させることになった。

天文二十三年七月、守護代織田信友は坂井大膳らとともに、守護斯波義統に反逆し、殺害した。名分を得た信長は、翌弘治元年（一五五五）四月、清州を攻め、信友を討ち、坂井を逐い、清州城に入った。

これは大きい。名目だけの存在だったとはいえ、守護ならびに守護代にかわり、尾張の中枢清州城の主になったのである。

以後、信長は積極的に出て、反信長一族の始末、あるいは整理にかかる。そのための策略、権謀があったとしてもやむを得ない。

翌弘治二年四月、斎藤道三が長子義龍に討たれた。信長は舅の救援に向うが、討死を聞いて帰国する。この義龍ならびに子の龍興が、信長の長年にわたる敵となるのである。

八月にいたり、弟信行が柴田、林らに擁せられて謀反を起こす。信長は稲生の戦いで破るが、母親の懇願で赦免する。翌弘治三年、信行はこんど岩倉織田氏の援助を得て、ふたたび反旗をひるがえす。

このさい、内応して注進してきたのが柴田勝家である。かれは信行から遠ざけられていたというが、信長の姿がしだいにわかりかけてきたのだろう。信長は信行を清州城に招き、誅殺した。





墨俣一夜城碑（岐阜県安八郡墨俣町）長良川の渡河点で、伊勢・美濃攻略の交通軍事上の重要地点であった。佐久間信盛、柴田勝家の失敗のあと、木下藤吉郎の卓抜なアイデアで築城に成功する。

洲俣築城犠牲者の墓　美濃の斎藤龍興は織田軍の侵略に対し実によく防戦した。そのため築城には犠牲者も多かった。

永禄元年（一五五八）五月には、岩倉織田氏の当主信賢が美濃の斎藤義龍と気脈を通じ、攻撃をしかけてきた。岩倉織田氏は織田氏の嫡統であり、清州織田が滅びたいま、残存する一族中の大物である。

信長はすかさず反撃し、浮野で破った。さらに進んで岩倉城を攻め、ひとまず押し込めて兵を返した。

その理由が二つある。一つはそれ以上攻め立てれば、美濃勢が出てくること、いま一つは、岩倉織田の討滅をもって、尾張平定を内外に示したかったこと、である。

信長は翌二年二月、上洛して将軍足利義輝に謁した。趣旨は尾張の統一を報告し、さらに実質支配を承認させることにあった。そして、帰国すると直ちに岩倉攻めを開始した。

実力をともなわない将軍とはいえ、上洛する前とあとでは、信長の評価が違った。いわば公認の攻撃といってよく、信賢は退散し、城は破却された。

そこでようやく尾張平定が成った。守護、あるいは守護代ではなく、〝織田信長〟という一個の男が支配する尾張である。ときに二十六歳だった。





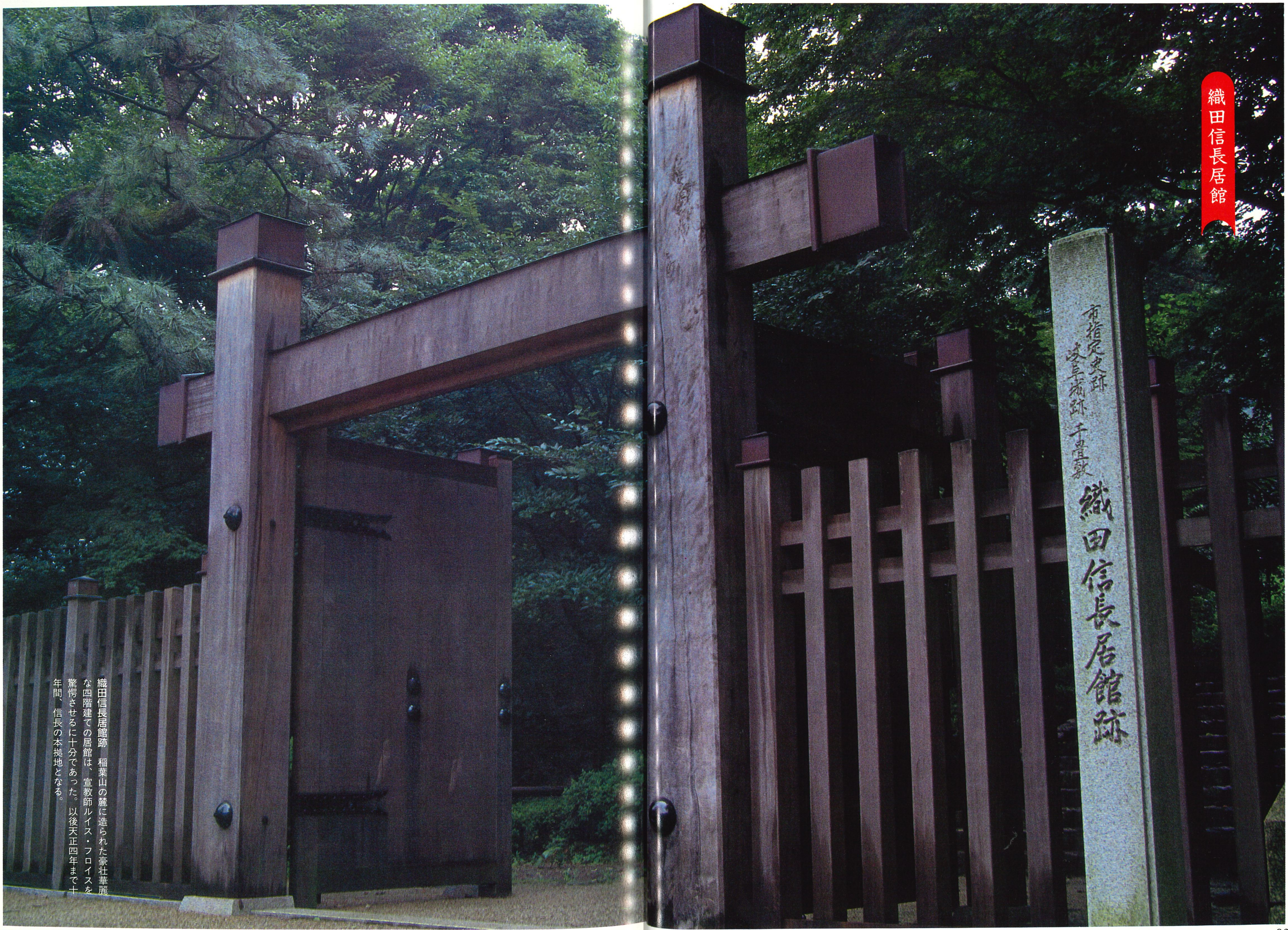
猿啄城趾（岐阜県加茂郡坂祝町）　東美濃攻略を謀った信長は、犬山城、鵜沼城を落とし、永禄八年多治見修理の猿啄城を奪って、河尻鎮吉を入れた。城の南側は断崖であり、その下を木曽川が流れる。

道三塚（岐阜市鷺山町）　一介の油売りから美濃の国主まで成り上がり、〝梟雄〟とうたわれた斎藤道三もその子義龍と後継者問題で争い、長良川畔に戦って敗死した。

決戦桶狭間

駿河の大守今川義元が上洛の軍勢を催おし

織田信長居館



織田信長居館跡　稲葉山の麓に造られた豪壮華麗な四階建ての居館は、宣教師ルイス・フロイスを驚愕させるに十分であった。以後天正四年まで十年間、信長の本拠地となる。



観音寺城　永禄十一年、足利義昭を奉じて上洛を目指した信長の行く手に、観音寺城の六角承禎が立ちはだかったが、三万の軍勢でこれを撃破。承禎は甲賀の山中に逃れた。



六角承禎一族の墓（京都府田辺町・一休寺）長い逃亡生活を送った承禎は、本能寺の変の後、宇治に一庵を設けて隠棲。慶長三年、七十七歳で歿した。近江源氏の佐々木氏の墓地にしては侘しい。

たのは、永禄三年五月である。上洛の意味は天皇と将軍を擁し、天下に号令することにある。

義元は足利一門という家柄といい、地理的条件といい、実力といい、もっともふさわしい人物であると、ひともわれも認めていた。

先年来、三河を収め、甲州武田、相模北条との三国同盟を結び、準備を怠らなかった。妨げになるとすれば信長だが、すでに尾張内に築いた砦があり、寝返って味方する有力者がいる。

だいいち、動員能力が違う。一万石につき二百五十人として、駿・遠・参三国で百万石を越えるから、二万五千人になる。対して、信長方は確定領十五万石として、六分の一の四千人前後にしかならない。

義元は率いる軍勢を四万と豪語し、自ら駿府を出たのが十二日。十八日には沓掛に達し、鷲津、丸根など信長方諸砦を攻めさせ、十九日には桶狭間に進み、本陣は田楽狭間に休止した。

六角承禎画像（石川県鳳至郡穴水町・裏本友之氏蔵）観音寺城を追われた承禎は、伊賀甲賀の地侍や一向一揆を煽動して各地に反信長のゲリラ戦を展開、再三にわたって信長を危地におとし入れた。画像、文字とも承禎の自筆。





北畠具教の墓（三重県飯高町）　信長の謀略にあって暗殺された具教の首を、家臣の芝山秀時がひそかに持ち去り、山深いこの地に葬った。天正四年十一月、具教四十九歳であった。



北畠氏居館庭園　伊勢国司北畠氏の栄華の跡がしのばれる庭園。



北畠氏居館跡（三重県美杉村）　南北朝時代、北畠親房の三男顕能が伊勢国司に任じられてより、八代にわたって居館とした所で、今は北畠神社が建っている。



大河内城址（三重県松阪市）　美濃平定を終えた信長が伊勢に侵攻作戦を開始すると、伊勢国司北畠具教は本拠地をここに移し、織田軍の来攻に備えた。

昼過ぎ、突然の激しい雷雨が襲った。晴れ上ったと思ったとたん、どこから湧いたか、本陣を見下す太子ヶ嶺から、織田勢は一挙に攻め込んできた。混乱いうまでもない。

戦いはほぼ一刻、義元は服部小平太に長柄の朱槍で突かれ、毛利新介の刃によって首を打ち落された。戦死者は織田方五百にも満たず、対して今川方は三千を越え、ちりぢりになって潰滅した。

これが伝えられる桶狭間の奇襲戦である。が、奇襲戦は突発的にことを起して、成功するものではない。

じつのところ、信長は六年前の天文二十三年正月、奇襲戦を経験している。義元が自身、



甲津畑（滋賀県永源寺町） 六角承禎の放った刺客・杉谷善住房が二連発銃で信長を狙撃したが、運よく弾は小袖をかすっただけで信長は難を逃れた。



鯰江城址（滋賀県愛知郡愛東町） 愛知川右岸の段丘崖上に築かれた城。六角承禎父子が信長に抵抗して籠城したが、天正元年、佐久間、丹羽、蒲生、柴田の織田軍に攻撃されて落城した。

岡崎まで出陣し、村木というところに城砦を築いて、織田方の小川城を攻撃しようとしていた。信長は暴風雨のなか、熱田から船を発し、一気に村木砦を攻め潰し、素早く那古野へ帰還したのである。

かれはまた、義元の西上を安閑と眺めていたわけではない。何ヶ月も前から人を派し、駿府の内情を探り、国境の地勢を研究していた。人とはほかでもなく、蜂須賀、前野といった尾張土豪たちだった。

今川勢が迫るなか、清洲城の信長は、籠城するとも打って出るとも決しかね、家臣たちは、運の末には智恵の鏡もくもるものだ、と嘆息したそうだ。が、かれは奇襲戦を決意していたに違いない。余人には逡巡したかに見えた。それは、義元勢の陣列や方向を見定める時間であっただろう。

十九日未明、信長は俄かに手勢を率いて出陣した。熱田神宮に着いたころ、軍勢がおい追いついてきた。神宮に戦勝を祈願して進むうち、織田方の鷲津・丸根砦に黒煙のあがるのが見えた。そこで鳴海方面に転進、相原方面に進出した。

そこへ沓掛の土豪、梁田政綱から義元本陣が田楽狭間で休止していると伝えられた。信長は直ちに襲撃に移る。

そこで義元はなにをしていたかにつき、『前野文書』によれば、蜂須賀党は村長の藤



霧山城址 多気城ともいい、北畠館の詰の城。永禄十二年、織田軍によって焼討ちされた。その際、竹葉を集めて火をかけたので、今でも地元の人々は竹葉を不吉と嫌っている。

姉川の合戦



姉川合戦場（滋賀県長浜市）元亀元年六月二十八日早朝、織田・徳川軍の三万と浅井・朝倉軍の一万八千が激突、壮烈な死闘を繰り広げた。死者の数は浅井・朝倉軍千七百余、織田・徳川軍八百余。



小谷城から横山城方面を望む　信長が横山城の攻略にかかったとみるや、長政は小谷城を出て大寄山に布陣、朝倉景建の一万の援軍も到着して、いよいよ戦機は熟した。



血原の姉川合戦碑　朝倉方の豪傑真柄十郎左衛門は七尺の大太刀をふるって力戦奮闘したが、力つきて、遠江高天神の侍・匂坂式部とその郎党に討ち取られた。

左衛門と昵懇だったので、近在の神主、僧侶、百姓とかたらい、西上する義元の機嫌を損なわぬよう酒肴をもって接待したという。

その献立もしるされている。酒十樽、勝栗一斗、唐芋煮付十櫃（ひつ）、天干大根煮〆（しめ）五櫃、ほか米餅、粟餅などである。義元以下、ゆるゆるとこんな歓待を受けていたのだった。

謀事とすれば、こんな素朴で滑稽なものはない。が、あって不思議ではない。なにせ児戯に類することでも、大真面目にやるのが信長なのだから。

岐阜城頭〝天下の夢〟

桶狭間の一戦は、天下を驚倒させた。

「尾張に織田上総介あり」

と、信長の武威は喧伝された。

そうかといって、即座に信長の地位がどうなるものではなかった。一面から見れば、桶狭間などよくある局地戦の一結末にすぎない。じじつ、今川氏が滅んだわけでもなく、後継の氏真があり、領国は健在だった。

が、氏真には弔い合戦の気はなかったし、今川氏に長年こき使われてきた家康（当時松平元康）が、岡崎へ帰って自立した。信長は一両年後、早くもこの家康と同盟を結んだが、これは両家にとってよいことだった。

要するに、信長は東方を気にせず、西方の進出が可能になったわけで、そこはほかでもなく美濃だった。

美濃斎藤龍興の本拠、稲葉山城下は、北陸・東山・東海三道の要の位置にある。信長が大をなそうと思えば、どうしても占めねばならぬ具体的要求に迫られていた。

かれは永禄六年（一五六三）に小牧山に要塞を築き、清洲から移った。木曽川をはさんで美濃に対する犬山城には丹羽長秀を入れた。いずれも美濃攻略のためである。

さらに近江の浅井氏と結び、妹お市の方を長政に嫁し、甲斐の信玄とも結んで、養女をその子勝頼に妻合（めあわ）せた。このような外交的伸展も、桶狭間戦の効果だった。

信長はそうして周辺を固め、連年のように



小谷城　標高四百九十五米の山頂に築かれた城郭。背後に深山幽谷を控え、前方に虎御前山などの小丘をもつ天然の要害で、信長もこの城の攻略には三年の歳月をかけている。



小谷城碑　小谷城は足下に越前と美濃を結ぶ北国脇街道が走り、南には中仙道、西には北国街道があって、交通の面においても重要な位置にあった。

小谷城京極丸



京極丸　長政の祖父亮政は京極氏の内紛に乗じて、対立する家臣を次々と打ち倒し、主家である京極高清を小谷城に迎えて、その勢力を拡大した。

美濃へ攻め込んだ。が、そのたびに敗退するのが常だった。美濃勢が頑強なのは、稲葉山城が固いばかりでなく、斎藤家に従属する東濃諸豪の勢力が強いからである。

ことに鵜沼（うぬま）の大沢基康、猿啄の多治見修理が難物である。信長はこのころめきめき出頭してきた秀吉（当時は木下藤吉郎）にこれらの調略を命じた。秀吉には蜂須賀小六ら土豪がついている。かれらはそして二城を支える東濃川並衆と昵懇だった。

秀吉は危難を排して調落に成功した。ついで、加治田、堂洞（どうぼら）、大ぼこ山というふうに、順々に東濃経略がすすんだ。動揺した龍興は黙視できず、自ら兵を率いて出てきた。それは望むところだったが、攻め込んでもうまくいかないのは、濃尾を流れる木曽、長良、揖斐の三川を中心とする湿地帯に妨げられるからだった。

その要の地点を、

〈墨股〉

という。

信長はその地に砦を築こうと考えた。それも秀吉に命じた。秀吉はまた、蜂須賀小六ら土豪たちに協力を頼んだ。かれらの協力なしには、木一本、石一個も動かせぬ理屈である。

秀吉と小六の立てた方針は簡単である。敵が出てきても戦わぬこと、とにかく砦を築くことに専念することだった。



長島一向一揆殉教の碑（三重県桑名郡長島町）　二度の長島攻めに失敗した信長は、七万の大軍を率いて長島を取り囲んだ。三ケ月の籠城戦の末、門徒二万人を鉄砲や焼打ちで皆殺しにした。



願証寺　長島一向一揆の拠点となった願証寺には、各地から落武者などが集まり、益々その勢力を強大にしていった。

人数の割りふりもそれに応じ、用材を運ぶ者、普請にたずさわる者、敵の攻撃を防ぐ者に分けた。こうして切込みを入れた用材が、川上から流され、あっというまに骨格を組み上げた。

俗に〝一夜城〟というが、立案から材料集め、輸送を考えれば、かなり時間がかかっている。が、敵前での難工事の完成は、その名がふさわしい。

信長はこの築城に力を入れていた。しきりに伊勢出陣を噂させたし、自ら小牧城衆を率いて墨股近くまで進出してみせた。

美濃の他にくさびを打ち込んだ墨股築城の効果は大きい。じつは、築城そのものより、以後一年余り、敵前で橋頭堡を維持したことに、その意義があった。

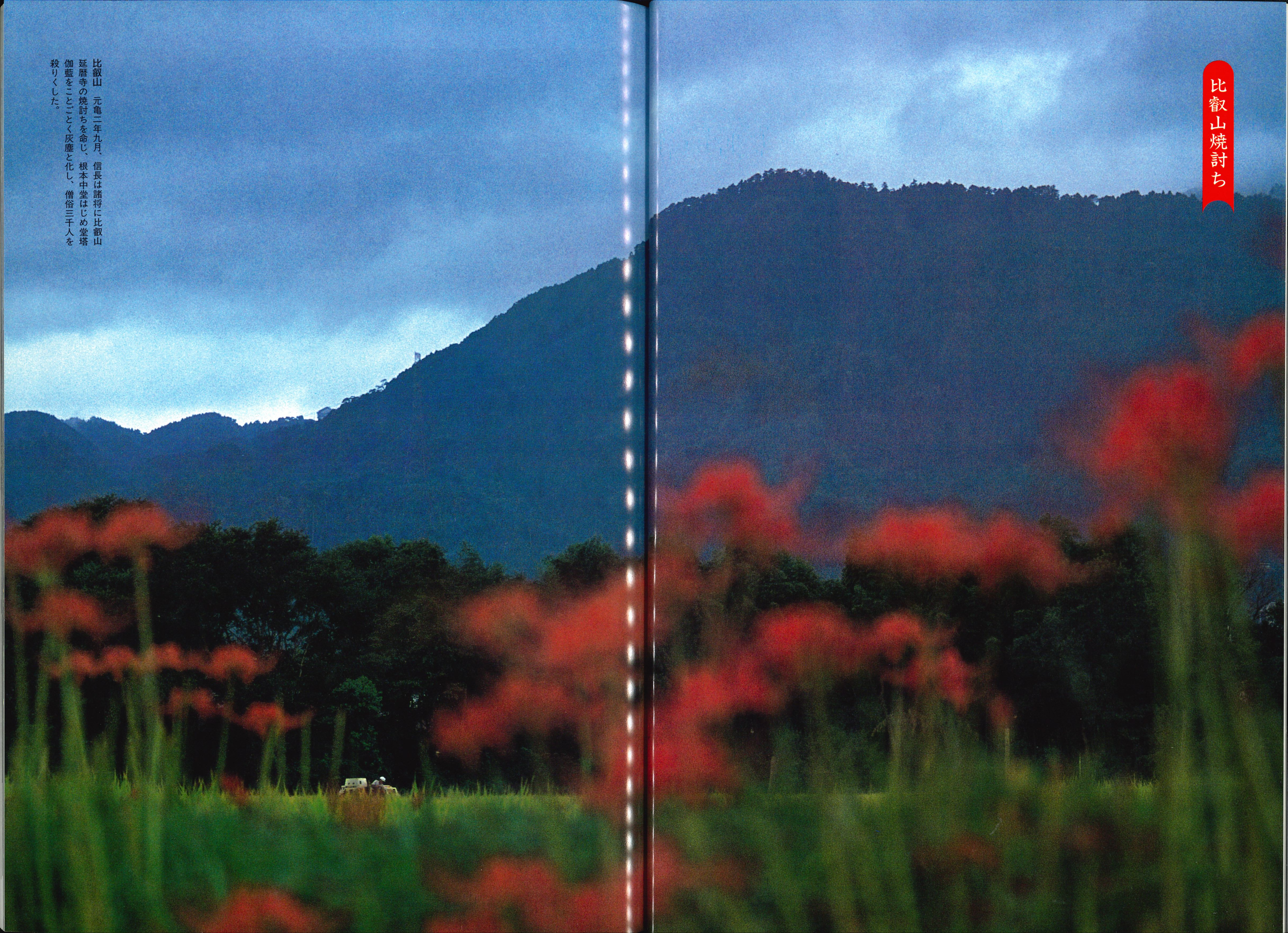
はじめて城将になった秀吉はよく敵の反撃を防いだ。しだいに美濃衆の士気が衰えた。その間に美濃三人衆の織田家帰服があり、永禄十年八月、一挙に押し出した織田軍は稲葉



若江城址（東大阪市若江北町）　信長は河内の諸城をことごとく破却したが、この若江城だけは石山本願寺攻めの戦略拠点として残した。



石山本願寺跡（大阪市東区・大阪城公園）「進むは往生極楽、退くは無間地獄」を旗印に門徒勢は頑強に抵抗、信長の三回にわたる攻撃も退けた。しかし、天正八年に和議が成立、顕如が雑賀に退去したので、ここに十二年間におよぶ抵抗は終結した。



比叡山焼討ち

比叡山　元亀二年九月、信長は諸将に比叡山延暦寺の焼討ちを命じ、根本中堂はじめ堂塔伽藍をことごとく灰塵と化し、僧俗三千人を殺りくした。



坂本城址　比叡山焼討ちの後、明智光秀が築城。琵琶湖の制海権をにぎる軍事上の重要な基地であり、長浜城、安土城と水上交通で結んでいた。

山城を攻略した。

本格的に美濃攻めをめざしてから、八年もかかっている。果断、実行、即決、というふうに形容される桶狭間戦に較べ、その執念と忍耐は驚くべきだが、信長の本性はそして、ここにあると思わねばならない。

信長は稲葉山城に入り、岐阜と名を改めた。天下に夢をつなぐものであり、それにふさわしい施策が進められた。関所の禁止、〝楽市楽座〟制などがそうだが、このころから、

〈天下布武〉

の四文字を印文とする印判状が発給されている。ときに信長、三十四歳である。

上洛の旗印

足利義昭が登場する。

永禄八年、将軍義輝が松永弾正に討たれたとき、弟のかれは興福寺一条院門跡だったが、脱出して将軍位に就くべく、諸地を転々としたあと、越前一乗谷の朝倉氏のもとにいた。

が、朝倉義景に積極的意思はなく、義昭は永禄十一年（一五六八）にいたり、信長を頼ることにした。奔走し、推進したのは細川藤孝、明智光秀といったそれぞれのち信長の家臣になる人物である。

信長は義昭を奉じて上洛するのに先立ち、南近江の名門六角承禎に呼びかけた。が、承禎は成り上がり者の下知は受けぬと反発した。こんな承禎は討たねばならない。が、信長が出兵したのは、北伊勢だった。

北伊勢には六角氏の勢力が延びている。周囲から平定する作戦だが、ひいては伊勢湾を制することであり、伊勢湾貿易を一手に握ることでもあった。むろん、八風峠ほか京近江への交通路を確保できる。



琵琶湖　湖族と呼ばれた堅田衆を支配下に治めた信長は、安土城、長浜城、坂本城、大溝城をつなぐ水上交通網を作り上げた。



疋壇城戦歿者墓地　近江柳ケ瀬に出陣した朝倉軍が破れ、刀根越えで疋壇城に戻ろうとしたが、織田軍の猛追撃をうけて多数の戦死者を出した。



疋壇城址（敦賀市疋田）　京と越前を結ぶ街道の要衝に築かれた朝倉方の城。天正元年信長の朝倉攻めの際、城は取り壊された。



一乗谷下の城戸跡（福井市安波賀町） 朝倉氏は足羽川の支流の一乗谷川に沿って城下町を築き、その入り口には巨石と土塁による堅固な城戸を設けた。



疋壇城から刀根峠をみる 刀根峠から疋壇城までの間で、朝倉軍の諸将のほとんどが討死したという。

北伊勢諸豪は、戦うことなく帰服した。信長は神戸氏へ三男信孝を、長野氏に弟信包（のぶかね）を養子に入れ、他の諸氏は滝川一益が支配することで、平定が成った。

同年九月、信長は大義名分をかかげて六角氏攻めをはじめた。自ら尾張、美濃、ならびに平定したばかりの伊勢の兵を率いての出陣である。北近江の浅井長政が待ち受けていたし、同盟者家康からも援軍がきた。

大軍である。ばかりでなく、勢力の伸展を如実に示すものだった。箕作城が陥ち、観音寺城が陥ち、承禎親子は逐電した。

まもなく義昭は入洛し、将軍に任命された。義昭の喜びは無上のもので、信長に副将軍の職を与えようとした。が、信長は断り、そのかわり、堺、大津、草津に代官を置くことを承認させた。

義昭は、信長のことを、

「無欲の仁である」

といったが、じつは大欲というべきだった。堺は海外貿易の中枢で、日本一富裕な町であり、大津や草津は経済、交通の要地である。

もともと、信長にとって義昭は〝奇貨〟にすぎない。義昭のほうは、信長をこれまでの有力大名と同じく、幕府体制内での実力者と見ていたかもしれないが、信長はそんな体制そのものを破棄すべきだと考えていた。

義昭は当初、気づかなかった。信長もまた、義昭に敵対する三好党を討伐し、二条に将軍新邸を造営するなど、淡々と尽していた。

が、永禄十二年正月早々、信長は〝殿中掟〟を定めた。これは将軍を制約するものだったが、信長は反応を見つつ、南伊勢の北畠氏の内紛に乗じて出兵、北畠具教を降し、二男信雄を家督に入れたりし、着々と力を貯えていった。

翌元亀元年（一五七〇）正月、さらに将軍を制約する具体的五ケ条が示された。しょせん、信長の意見を聞かずに、何事もできないものだった。俄然、緊張の度を加えた。

こんななか、信長は諸大名に対し、皇居修理ならびに天下静謐のため、上洛すべしとの招集状を発した。これは反信長勢力を知る一種の踏絵を課したようなものだった。

おいおい反応が伝わった。なかでも越前の朝倉義景は強く反発した。そのいい分も六角氏と同じく、

「成り上がり者の下知は受けず」

というものだった。

無理もなかった。朝倉氏も織田氏も、元来越前守護斯波氏の守護代だった。織田氏は尾張に移ったが、信長の家はその一家の奉行にすぎず、対して朝倉氏は守護になっていた。

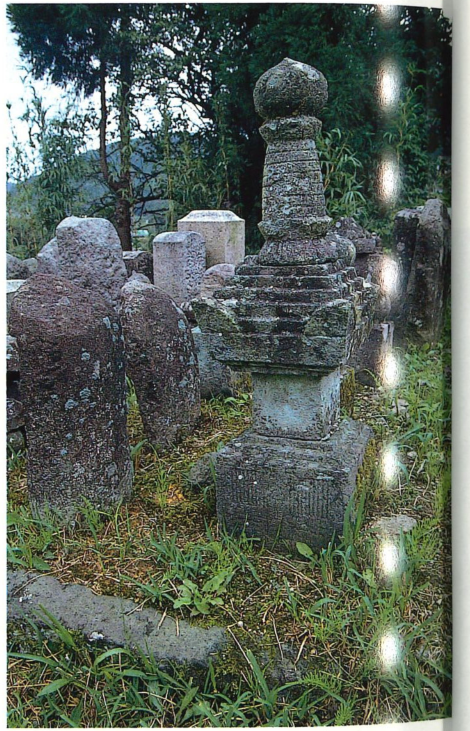
なによりも、いま信長の掌中にある義昭は、はじめ義景を頼ってきたのである。〝玉〟を逃した無念さはいわんかたない。

信長の目標は決った。四月二十日は、参加した家康軍を含め、何万という大軍が越前攻



朝倉氏居館跡 孝景から義景にいたる五代、百年間の朝倉氏の隆盛が偲ばれる居館跡。京や奈良から貴族、僧侶などの文化人も訪れ、一乗谷に京文化の華が咲いたという。

斎藤龍興の墓 信長に追われた美濃国主の斎藤龍興は朝倉義景の所に身を寄せていたが、この刀根峠の合戦で戦死している。享年二十六歳であった。





越前一乗谷

一乗谷　平泉寺衆徒は信長の来攻を知り、朝倉氏を見限って一乗谷に火をかけた。火は三日三晩燃え続け、館はもとより城下の建物すべてが灰燼に帰した。



朝倉義景の墓（福井県大野市泉町）　一乗谷を捨てて越前大野の六坊賢松寺に退去した義景は、家臣の朝倉景鏡の裏切りにあい、この地に自刃した。義景四十一歳であった。



浅井氏三代の墓（滋賀県長浜市・徳勝寺）　一土豪から江北の戦国大名にまでのし上がった浅井氏も、わずか三代にして滅亡した。亮政、久政、長政の墓がならぶ。

めに京都を進発した。多数の市民が見送った。だれもが越前征伐の成功を疑わなかった。

姉川の血戦

織田軍は二十五日、早くも天筒山を、ついで金ケ崎を陥すという破竹の進撃ぶりだった。が、異変が起る。北近江浅井長政の離反である。

信長はこのとき、義弟の離反が信じられなかった。長政は義理固い男だった。が、その義理は朝倉氏に対し果たされた。

浅井氏は朝倉氏と攻守同盟を結んでおり、しばしば援助を受けている。信長と同盟を結ぶときも、万一、朝倉氏とことを構えるような場合、事前に連絡するという一条があった。信長はそれを無視したのである。

勢いづいた朝倉軍が反撃しかけてきた。退路は絶たれそうである。信長は秀吉に殿軍をまかせ、ほとんど一騎駈けのようにして、朽



浅井長政公自刃之地（滋賀県湖北町）　長政は妻お市の方と三人の娘を城外に送り出すと、本丸下の赤尾屋敷に入って自刃をとげた。長政二十九歳。



火縄銃（愛知県鳳来町・長篠城址史跡保存館蔵）　鉄砲の出現はそれまでの戦闘形態を変えたのみならず、戦国武将たちに新しい時代の息吹を自覚させた。まさに戦国乱世の終止符を打つにふさわしい新兵器であった。



火薬袋



鉛弾と火縄

木谷を経て京に帰った。従う者、僅か十人という有様である。

ぼつぼつ、敗北必至でも、敵にうしろを見せずに戦う、といった武家の美学が生れつつあったが、信長は平気で黙殺できた。

〈死んでたまるか〉

という思いでいっぱいだっただろうが、これは、反面で報復の念を燃え立たせることでもあった。

信長は岐阜に帰り、しきりに鉄砲を調達するとともに、国境を守る浅井方の堀、樋口といった者たちを誘降した。それらを案内役にして、改めて近江に出陣したのが六月十九日。

本城小谷を無理攻めせず、村々を焼き払いながら、支城横山城を囲んだ。つられて長政は越前の援軍朝倉景健隊とともに出てきた。約一万八千余である。

信長のほうは、駆けつけた家康軍を合わせて三万四千。これら両軍が姉川をはさんで対峙した。いわゆる〝姉川の合戦〟である。

同二十八日は早朝より戦闘が開始され、午過ぎまで続いた。織田・徳川連合軍が大勝し、信長は細川藤孝を通じ、義昭に、

「野も田畠も死骸ばかりに候。誠に天下のため、大慶これに過ぎず候……」

と書き送った。織田軍の威勢を示し、軽挙妄動に傾きつつある義昭を脅したのである。

信長はしかし、深追いせず帰軍した。小谷は堅城であるうえ、六角承禎が蠢動し、一揆が動きはじめていたからである。

三好党がまた出てきた。かれらは信長が浅井方に対し、決戦を挑まず、岐阜に引揚げたのを、敗退とみたらしく、七月末、摂津中島に入り、野田、福島に砦を築いた。

信長は八月になって出陣し、井楼を築き、大鉄砲を撃ち込んだ。三好党は萎縮し、和を乞うたが信長は許さなかった。

なんでもない戦闘経緯のようだが、それぞれ思惑があった。それはほかでもなく、すぐ近くの石山本願寺の存在である。本願寺と通ずる三好党は、本願寺の旗揚げを期待して近辺に砦を構築したのだし、信長はわかっていて、どんどん大鉄砲を撃った。本願寺に対する威力偵察といっていい。

果して、本願寺が参戦を決意した。本願寺顕如は、

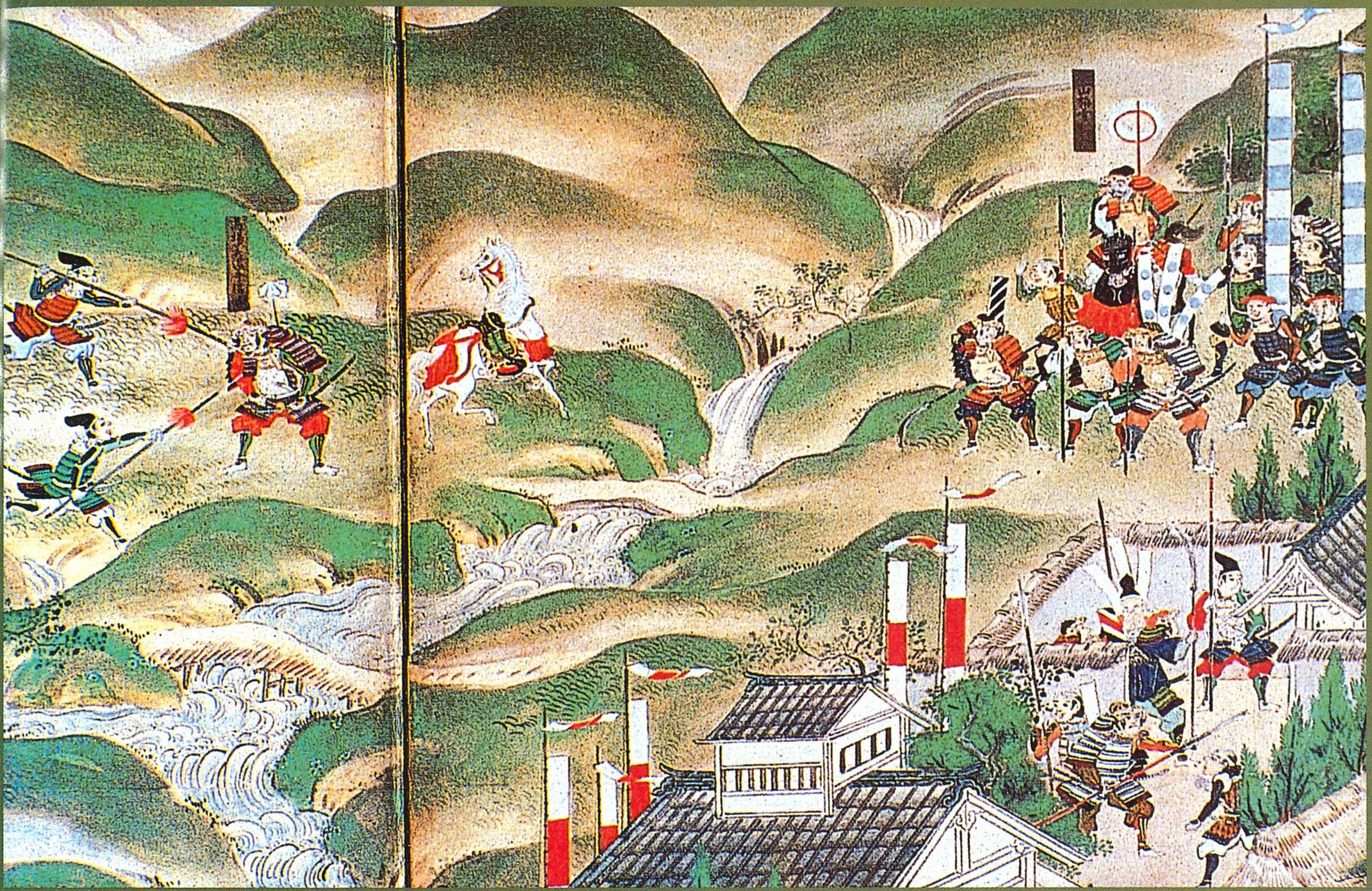
「信長が破却を要求したので挙兵する。各自身命を捨てて忠節を尽すべし。従わない者は破門にする」

と全国門徒に檄を飛ばした。一向門徒にとって破門は耐えられない罰である。かれらは立ち上がった。雑賀の鉄砲衆も織田軍めがけて撃ちはじめた。

九月になると、浅井・朝倉軍が本願寺と連絡をとりながら、南下してきた。近江から山城へ攻め込み、山科、醍醐に放火した。信長は慌てて摂津の陣を引き揚げ、下坂本に出陣した。



長篠合戦屏風図（長篠城址史跡保存館蔵）


武田軍（長篠合戦屏風図・長篠城址史跡保存館蔵）

浅井・朝倉勢は比叡山にのぼった。信長は自分に味方すれば、分国中の山門領を還付するが、さもなければ焼き払う、と申し入れたが、叡山延暦寺はこれを拒否した。

その間、伊勢長島の一向一揆が蜂起した。信長の弟で小木江城を守っていた信興が攻められたが、見殺しにするほかなかった。

いっぽうで三好党が勢いを盛り返し、六角承禎が動き、さきに降った松永弾正が離反し、いたるところで一揆が起きた。それらの要に、足利義昭がいるのはわかっていたし、遠く武田信玄も動き出す気配がある。信玄と顕如は相聟の関係である。

要するに信長包囲網ができあがりつつある。危機だった。

元亀の危難

将軍義昭と青蓮院門跡が講和をすすめた。信長のほうからもち込んだことだが、天皇の命令でしぶしぶ和睦に従うという体裁をとった。それでも、屈辱は身にしみただろう。

翌二年から信長は各個撃破の反撃を開始する。浅井・朝倉と本願寺の連絡を絶つべく、近江の交通路を封鎖し、長島一向一揆攻めに兵を出す。これは二度とも失敗したが、八月


織田信長本陣跡　決戦間近しと見た信長は極楽寺山から前線の茶臼山に本陣を移動し、ここで戦況をうかがった。


織田信長陣地


馬防柵　三千挺の鉄砲の前に、海内無双といわれた武田騎馬軍団は果敢な突撃を繰り返したが、敵陣に突入できず、壊滅的な損害を出して敗退した。

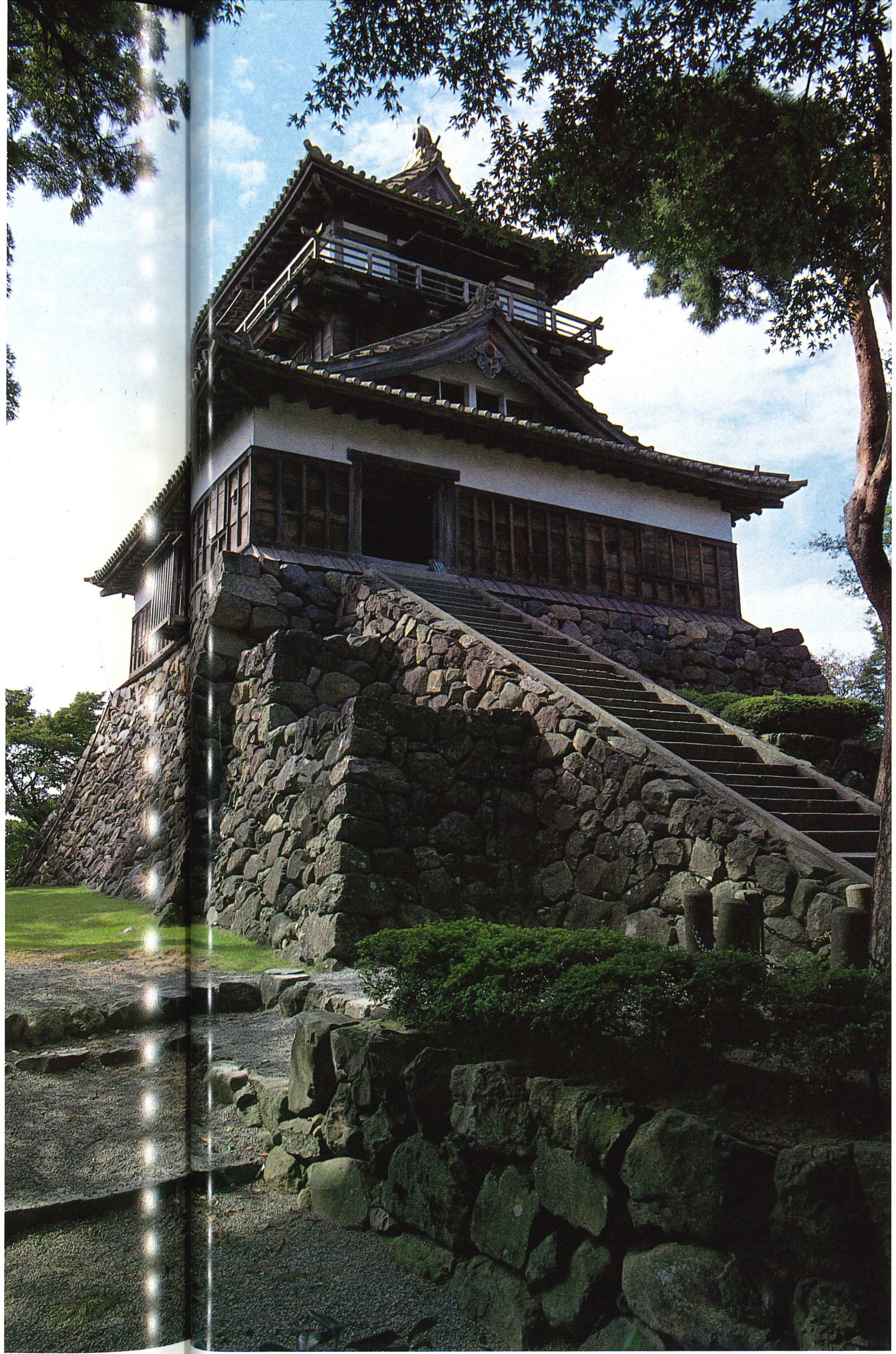
丸岡城（福井県坂井郡丸岡町）北庄城の支城として、天正四年に柴田勝家の甥である柴田勝豊によって築かれた。一名を霞ケ城という。現存する最も古い天守閣である。

にいたり、突如自ら近江に出撃した。が、小谷城を攻めるわけではなく、周辺を放火して廻った。こんどの出撃の意味をみな図りかねたが、狙いは比叡山の焼打ちにあった。前年の脅しの実行である。

九月十二日、織田軍は坂本から攻めのぼった。根本中堂はじめ社・寺、堂宇五百余棟が、一宇も残さず灰になり、僧俗男女三千人が首を斬られた。

翌元亀三年、いよいよ信玄の動きが活発になってきた。本願寺や浅井、朝倉と謀し合わしているのは眼に見えている。松永弾正など信貴山に楯篭り、明らかに反旗をひるがえした。

十一月、信玄は甲府を出陣し、遠江に入り、家康の拠る浜松城に迫ったのが下旬である。信長は三千の援勢を送り、しかし戦ってはならぬと伝えた。が、家康は突出し、三方ヶ原





柴田勝家像（福井市左内町・西光寺蔵）勝家は家中随一の猛将として知られ、常に織田軍の先鋒となって活躍した。越前平定の後、北庄を居城として北陸道を総轄した。



鳥越城址（石川県鳥越村）加賀一向一揆の拠点であったが、天正八年柴田勝家軍の攻撃によって落城した。以後、加賀能登の一向一揆討伐の基地となった。

百済寺から安土方面を見る　百済寺は湖東三山の一つ。六角氏と深い関係にあった百済寺が、鯰江城の六角承禎に兵糧を送ったことに信長は怒り、全山を焼き払った。





安土城天守台入口　十余ケ国の人夫と四年の歳月をかけて築かれた安土城も、天正十年六月十五日、信長の二男信雄の放った火によって悉く消滅した。天守落成からわずか三年であった。



安土城碑　「安土」という呼称は天正四年以前にはなく、この山にあった安土寺から採って、信長が名づけたという。

で大敗を喫した。

翌四年、義昭が公然と信長に敵対しはじめた。一向一揆と結び、三好党、松永弾正とも結んだ。浅井、朝倉軍の動きも活発になった。みなみな信玄の西上と連動していた。

が、信玄は四月十二日、伊那の駒場で病没した。いち早く知ったのは信長であり、義昭は知らなかった。宇治槙島に籠って挙兵した。信長はすかさず攻め、これを追放した。足利幕府の滅亡である。

信長がまずやったのは、年号〝元亀〟を改元して〝天正〟にしたことだった。もともと〝永禄〟を改元するにあたり、信長が〝天正〟を推し、義昭が〝元亀〟を推し、これが通っ



織田信長像（安土駅前広場）



安土城天守台跡（滋賀県安土町）　五層七重の華麗壮大な天守閣が建っていた所。五層の屋根には金箔押しの瓦がふかれ、その金色の輝きに湖の魚がおびえて逃げたという。



織田信忠邸祉　幼名を奇妙丸、信長の長男。武田勝頼討伐の大将として活躍したが、本能寺の変の際、宿所の妙覚寺から二条御所に入って明智軍と戦い、自刃した。二十六歳。



浄厳院本堂　宗論は日蓮宗が返答に詰まって敗れた。信長は急ぎ浄厳院に駆け付けるや、騒動の原因となった大脇伝介の首を刎ね、日蓮宗が他宗を誹謗することを禁じた。



百々橋　天正十年元旦、参賀の群衆で混雑し、百々橋から総見寺へ上る石垣がくずれ、死人、けが人がでた。

たものである。三年間はそして、信長にとって半生最大の危難だった。

かれはなにも不吉な年号を改めようとしたばかりではない。年号を改め得る立場に立ったことの表明なのだった。

こうして八月八日、夜中俄かに兵を出し、小谷城へ向って進撃した。調略がすすみ、城主級の有力家臣がつぎつぎ降服しており、最後の大物阿閉淡路等も寝返ったという情報が入ったからである。

朝倉義景が二万を率いて救援に駈けつけてきた。信長はこれを打ち破り、逃げる朝倉勢を追って越前に乱入した。義景は本拠一乗谷を支え切れず、山田荘の寺坊で自害した。

信長は兵を返し、小谷城に攻めかかった。城が陥ち、落城寸前に、長政は妻お市の方と女子三人を信長のもとへ届けた。長政と父久政の果てたのは、八月二十八日のことだった。

こうして、年来の敵、浅井・朝倉をようやく滅ぼすことができたが、翌二年の正月、参賀にあがった重臣たちに、

〈古今承り及ばざる珍奇な御肴〉

が出され、一同肝を冷やした。それは、朝倉義景、浅井長政・同久政の〝薄濃(はくだみ)〟（髑髏を漆塗にして金粉をかけたもの）だった。

さらに果さねばならないのは、伊勢長島一揆の討伐である。七月、信長は伜信忠とともに大軍を率いて包囲し、海上からも水軍が出動して封鎖した。打って出た者は、千人ばか



浄厳院山門（滋賀県安土町）　日本仏教史に有名な「安土宗論」が行われた寺。関東の浄土宗の貞安と日蓮宗の日珖・日諦は、天正七年五月二十七日、浄厳院本堂において対決した。



根来寺山門（和歌山県那賀郡岩出町）　根来寺の僧兵は弓矢・鉄砲に長じており、各地の大名に雇われて活躍した。津田流鉄砲術の津田堅物をはじめ根来の精鋭部隊は一大脅威であった。



顕如上人碑（和歌山市秋葉山）　弥勒寺山城跡に立っている。天正五年大軍で攻め寄せた織田軍を撃退した雑賀衆の男女は、矢の宮神社に集まって踊り狂って喜んだという。

り直ちに斬り捨てられた。

食糧も尽きた一揆側は九月末にいたり降服した。が、助からなかった。男女二万ばかりが柵内に閉じ込められ、四方から火をかけられ、焼き殺された。

冷酷、残忍といってもなお足りない。が、自らもその返り血を浴びるべく、歩き出したのは確かである。

布武、中原を制す

明けて天正三年春、信長は相国寺で今川氏真の演ずる蹴鞠を見た。義元の子だが、父を討った仇敵信長の意趣はさらになく、蹴鞠に没入しているのだった。

いま一人、名将の子がいた。甲州の武田勝頼である。かれは士気旺盛であり、強力武田軍団も健在だった。

五月、勝頼は三河長篠城に攻めかかった。城将奥平貞昌は主人家康に報告し、家康はまた信長に連絡した。信長は鉄砲隊を中核にした軍団を率いてやってきた。

武田軍と織田・徳川連合軍は、連子川（れんごがわ）をはさんで設楽原（しだらがはら）で衝突した。武田軍が誇る騎馬軍団が突進してきた。が、信長方の鉄砲隊は馬防柵を築き、いわゆる〝三段装塡法〟で撃ちまくった。

名のない射手に、名だたる武田方の剛将が、つぎつぎ倒された。死者一万といわれ、勝頼は、僅か六騎で甲府へ逃げ帰った。



雑賀岬　雑賀衆は海上で石山本願寺や毛利の水軍と連携しており、また射撃にすぐれた鉄砲部隊もあって、信長にとってはじつに厄介な存在であった。



雑賀孫市の墓（和歌山市楠見区平井・蓮乗寺）「鉄砲を満足に撃てない者は成人とは認めない」という雑賀衆の中にあって、孫市はまさしくスーパースターであった。

鉄砲という武器の勝利というより、鉄砲を巧妙に使った信長の勝利である。かれは鉄砲の射手に名人・達人を望まなかった。百発一中の命中度なら、十中するには千挺集めればよく、百中するには一万挺集めればよい、という考えだった。

ついで、越前一向一揆を平定した。朝倉氏滅亡のあと、一揆もちの国になり、本願寺から坊官下間頼照(しもつま)が下されてきた。つまり守護というわけであり、武家支配が本願寺支配にかわったにすぎず、信長はこの不逞、傲慢な徒を討ち平らげたのである。

四年、信長は安土に築城しはじめた。領国が拡大し、岐阜では東に寄りすぎていること、京により近い城が望まれること、などだが、それはさておき、本拠を移すことそれ自体、重大である。

思えば、かれは居城を那古野―清洲―小牧山―岐阜と移してきた。それぞれ理由があり、そのたびに伸展した。それは信長だけができ、信長以外のだれもができなかった。いまその仕上げが安土山上に築かれようとしていた。

この年、石山本願寺が中国の毛利輝元と結び、積極的に敵対した。その背後に備後鞆ノ津に居住する義昭がいる。越後の上杉謙信も動きはじめた。松永弾正がまたしても叛旗をひるがえした。どうやら、元亀の危難のような信長包囲網を作るつもりらしい。

五月から本願寺との本格的戦争がはじまった。なかなか敵は強悍で、ときに反撃を受けた。そこで付城を設け、包囲した。すると、兵糧のなくなってきた本願寺に、糧食を送り込もうとする毛利軍との戦いになった。

これは海戦である。織田水軍は毛利水軍に翻弄され、大敗北を喫した。信長は直ちに鉄張りの大戦艦建造を思い立ち、伊勢大湊で造らせることにした。操船術で劣るなら、その術をもってしても負けない船があればいい、という考えである。

翌五年早々、信長は紀州へ攻め入り、雑賀衆を討った。雑賀衆は石山本願寺を支える鉄砲集団であり、水軍ももつが、鈴木孫市ら主だった者七人が降った。

八月、上杉謙信が南下を開始した。加賀一向一揆と和を結んだ謙信は、前年も出陣したが、畠山氏の能登七尾城を攻めて手こずり、改めての出陣である。

信長はおそろしく緊張し、織田軍団の主力を北国に向けた。謙信はしかし、ふたたび七尾城攻めに手間どり、こんどは陥落させたものの、越後へいったん帰らねばならなかった。そして翌六年死ぬ。重ねての信長の幸運だった。哀れなのは松永弾正である。さきに信玄の西上に呼応して失敗したが、こんども謙信に呼応したものの、期待した上杉勢はこず、よく見なれた織田勢が現われた。

弾正は信長の望む名釜〝土蜘蛛〟とともに自爆して果てた。じつは、信長は戦いに明け



柏原城（三重県名張市）　伊賀の土豪衆が立て籠もった最後の拠点。信雄の率いる織田軍が攻略し、伊賀平定戦は終了した。上忍百地丹波は落城寸前、紀州に亡命した。



百地丹波守砦跡（三重県伊賀上野市喰代）　伊賀の忍者組織の上忍百地丹波守が多くの下忍と共に住んでいた砦である。



百地砦の土塁跡　この砦には祟りがあると云われ、村人は昔から砦の樹木にはいっさい手を付けなかったという。今日でも一沫の妖気がただよう。

暮れてばかりいたのでなく、茶道風流に凝っており、名器を集める趣味もあったのである。

灼熱、下天の夢

勢力が伸展するごとに、当然ながら戦線が拡大した。主目標が二つあり、一つは秀吉が大将の山陽道軍で、毛利軍を相手にする。播州から備前、備中、さらに因幡、鳥取まで追出している。連動して石山本願寺が降参した。

いま一つは、柴田勝家を大将とする北国軍で、北陸の一向一揆を征討しつつ北上している。天正八年には、金沢御坊以下、鳥越などの拠点を陥し、一向一揆は平定された。信長のもとへ、勝家から十九人の一揆首領の首が送られてきた。みなみな順調のようだった。

信長はこのころキリシタンに好意をもっていた。かれには神を信ずる心はなかったが、仏教に対する反感と、キリシタンの合理的、科学的な考え、そしてはるばるやってきた勇気を評価した。

信長は安土城下の布教を許し、セミナリヨ建設には土地や費用を提供した。自分でもふらりと立寄り、パアドレの話を聞き、学生の奏でる音楽に耳を傾けた。

天正九年九月、思い出したように伊賀へ攻め込んだ。伊賀は共和自治制といっていい〝惣国一揆〟の国である。また妖しの術者がいて、かれも何度か狙われた。天下一統の前には、許すべからざる存在だった。



敢国神社（三重県伊賀上野市一の宮）　敢国神社の祟りを恐れた信長は、神殿を白布で巻き締め、封印をしてから伊賀に攻め入ったという。神社は伊賀平定の後、織田軍に焼き払われている。

四万の大軍が攻め入り、一国を焼亡させた。男女も数え切れないほど死んだ。たぶん、延暦寺の焼打ち、長島一揆の虐殺以上の惨状だったはずである。

天正十年（一五八二）の正月、安土城への参賀の衆がひきも切らず、百々橋から総見寺へ上る石垣が、人の重みで崩れ、死傷者が出る始末である。が、その盛儀はこの年が最後になることを、だれも知らなかった。

三月、信長は甲州へ出陣し、武田勝頼を攻め滅した。武田討伐の理由があるとしたら、長年かれのために骨を折ってくれた家康に対するはなむけだっただろう。

その家康がお礼言上に安土へやってくることになった。それが五月十五日のことで、信長は光秀に供応役を命じた。

たまたま秀吉から、水攻めに包囲している備中高松城の背後に、毛利全軍がひかえていることを告らせてきた。信長は〝天下布武〟の成否をかける一戦とみた。自ら出て総指揮にあたるべく、まず明智光秀に出動を命じ、五月二十九日、僅かばかりの手勢を率いて入京、本能寺に宿をとった。

六月一日、信長は本能寺に於いて、茶会を催している。博多の豪商島井宗室を招き、秘蔵の名器三十八種が披露された。夜も更け近衛前久ら招待された客が、宴果てて帰途についた。

ときに光秀率いる一万三千の軍勢は、夜、丹波亀山の居城を出て、条野というところに差しかかっていた。京都盆地との境になっている老ノ坂を越え、沓掛に到着した。

そこは京に至る。中国路へ向う道ではないが、信長に軍装を見せるというふうに伝わっていた。が、桂川の手前で、新しい足半にはきかえ、火縄に火を点じ、さかさまに持つよう命令が出た。

桂川を渡ったところで、はじめて京進撃の目的が明らかにされた。

「本日よりわが殿が天下さまになる。下々まで勇み喜ぶべし。身を立つべき機会である」

すなわち、

〈ワガ敵ハ本能寺ニアリ、汝ヨク力メヨ〉

である。一万三千の軍勢は即座に覚悟を定め、市中へ乱入した。まもなく、本能寺に火焰があがった。

光秀の信長弑逆の理由はわからない。戦国の武将の業をおもえば、詮索してもあまり意味がない。信長をよく知るルイス・フロイスは、こう述べた。

「世界には、かれ（信長）のほかに万物の創造主なしといい、デウスのみに帰すべきものを奪わんとしたため、肉体は灰となり、その霊魂は地獄に落ちたり」

信長にはたぶん、天国も地獄もなく、神も魔もない。やるべきことをやり、嵐を吹かせ、わが焰に燃え尽きて去ったのである。

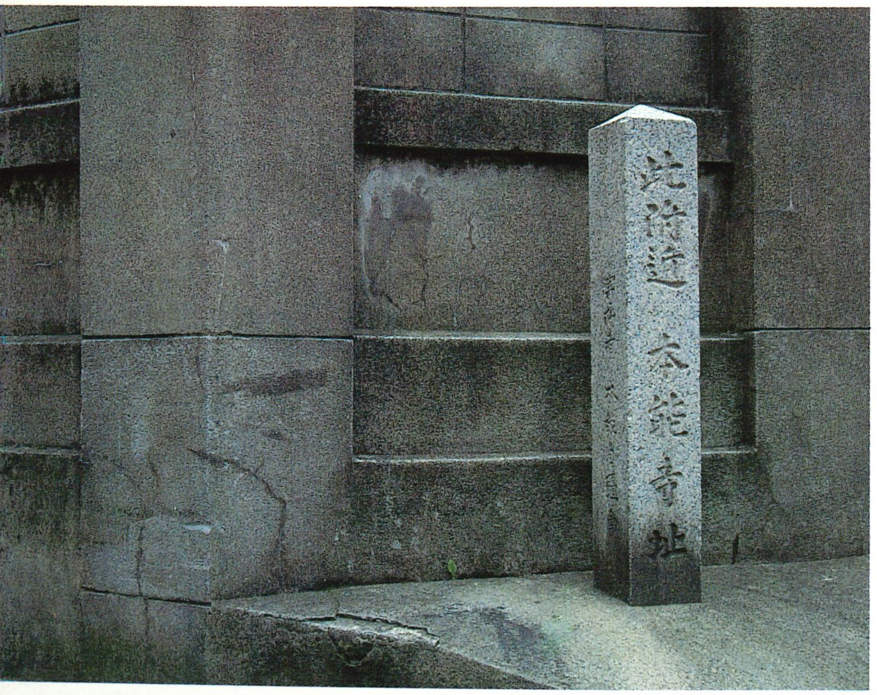


愛宕山（京都府亀岡市） 愛宕山に参籠した光秀は連歌の席で、「ときは今あめが下知る五月かな」と詠み、信長を討って天下の覇権を握ろうと決意した。



老の坂 六月二日の晩闇、老の坂を越えた明智軍は一路東に進み、桂川を押し渡って信長の宿所である本能寺へ殺到した。

本能寺跡（京都市中京区小川通） 光秀の謀叛を聞いた信長は「是非に及ばず」と云ったという。館に火がまわると殿中奥深くに入り、内から錠をかけて自刃した。



信長公墓所



信長・信忠の墓所（京都市上京区寺町通・阿弥陀寺） 阿弥陀寺の清玉上人が本能寺から信長の白骨を法衣につつんで持ち出し、これを土中に隠し置いたという。背後の墓群は討死した家臣たちである。

織田信長と宗教観

百瀬明治

無神論者信長の宗教対策

イエズス会の宣教師で、信長とたびたび会ったことのあるルイス＝フロイスは、その著『日本史』において信長の人柄を次のように述べている。

「彼は善き理性と明晰な判断力を有し、神および仏の一切の礼拝、尊崇、ならびにあらゆる異教的占卜（せんぼく）や迷信的慣習の軽蔑者であった。形だけは当御法華宗に属しているような態度を示したが、顕位に就いて後は尊大にすべての偶像を見下げ、若干の点、禅宗の見解に従い、霊魂の不滅、来世の賞罰などはないと見做した」

要するに、信長は信仰心というものをほとんど持ち合わせていなかった、というのである。

事実、信長が無神論者であったらしい形跡は、彼の生涯の随所にみかけられる。

たとえば信長は、日本仏教界の総本山ともいうべき比叡山延暦寺に冷然と焼打ちを加えた。またたとえば、そのころ一揆を組んで戦国大名並みの強盛を誇った一向宗（浄土真宗）に対しても、容赦することなく、長島一向一揆や越前一向一揆を殲滅するとともに、石山本願寺をも全面降伏に追いこんだ。

しかし、ここで誤解してならないのは、信仰心こそなかったにせよ、信長が宗教そのも



桑実寺（滋賀県蒲生郡安土町）　白鳳年間に天智天皇の勅願で建立されたという古刹。室町・戦国時代には観音寺城の西の搦手口の役目を担っていた。

のの存在まで否定するつもりはなかったということである。

現に、若いころの信長は、妙心寺派の禅僧沢彦宗恩（たくげんそうおん）に師事し、人格の練磨につとめている。

当時の一流の僧は、宗教者であると同時にすぐれた文化人、教育者であり、科学的な知識もあわせ持っていた。信長は、宗教の内包するそのような特性はそれなりに評価していたし、活用することも忘れなかった。

信長が宗教に刃を向けたのは、その宗教勢力が信仰の聖域から逸脱し、政治に介入したり武力を行使したりというふうに、俗権と変わりないあり方をとった場合に限られていた。信長に弾圧された宗教勢力は、朝廷と結びついて国政に関与し、僧兵という武力集団を擁した比叡山延暦寺をはじめとし、みなその種の宗教勢力であった。

天正七年（一五七九）五月、安土城下を舞台とした浄土宗と法華宗の宗教論争、いわゆる「安土宗論」が生じている。この宗論はもともと偶発的なできごとだったとみられるが、それを知った信長は宗論の場に家臣を送りこみ、軍配を浄土宗側にあげさせるとともに、法華宗側の出席者に厳しい処分を課した。

この顛末も、右にみた信長の宗教対策の一環をなすものだった。つまり、浄土宗は穏健な宗派だったのに対し、法華宗は日蓮以来の戦闘的な宗風を誇り、町衆と結びついてしばしば過激な法華一揆をおこすという歴史を刻んでいた。法華一揆がいかに精強であったかは、時として一向一揆を敗北に追いこむという一幕さえあったことが雄弁に立証している。

信長からすれば、今は牙をひそめているにせよ、そのような法華宗を野放しにしておくのは、好ましいことではない。だからこそ、信長は宗論に名をかりて、強烈な先制パンチを法華宗に浴びせたのであった。



浄厳院北門　佐々木氏の菩提寺であった慈恩寺を信長が兵火をかけたので、その焼いた信長が自らの手で明感上人を招き、慈恩寺の地を与えて再建した。

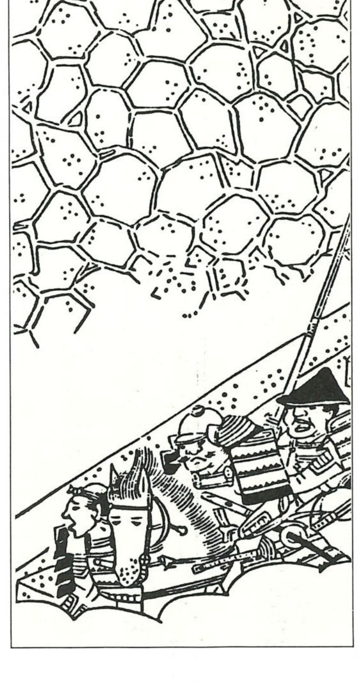
「南蛮の本質」を理解

信長は、周知のように天下布武を標榜して



浄厳院　安土宗論の行われた本堂（国重文）や楼門は、信長時代のものである。





顕如上人碑（和歌山市秋葉山公園）天正八年、和議により石山本願寺を退去した顕如上人は、紀伊の鷺の森、和泉の貝塚、摂津の天満などを転々とした。

以来、その前途に立ちはだかるライバルを次々と排除してきた。宗教勢力もまた、いったん俗権の世界に足を踏み入れると、信長のそんな方針の例外とはなりえなかったのである。「邪魔者は消せ」が、聖と俗にかかわりなく、信長が終始一貫して堅持した根本原則であった。

しかし、信長は宗教勢力のある一派に対しては、世人が不思議に思うほど厚遇をもってのぞみ、数々の便宜をとりはからってやった。その宗派とはいうまでもなく、万里の波涛をこえて紅毛碧眼の南蛮人が日本に伝えたキリスト教である。ルイス＝フロイスも信長の厚遇ぶりにすっかり感激し、「デウスがその聖なる教えの道を日本に開くため、思慮深く選びたもうたのが信長ではなかったか」といった感想を『日本史』に洩らしている。

では、信長はどうしてキリシタン一派に対してのみ、そのように寛大であったのか。

その理由は宣教師の来日とほぼ同時期、やはり日本に伝えられた南蛮製の鉄砲と重ねあわせて考えるとわかりやすいであろう。

南蛮製の鉄砲は、それ以前から日本にある旧来の武器と比較すると、その威力は比較にならないほど大きかった。射程五十メートル以内なら鉄砲の弾丸は鎧でも簡単に貫通するし、鉄砲の発する轟音や火光だけでも、敵騎馬隊の馬を怯ませるのに十分な威力があった。のちに信長が三段構えの鉄砲隊を組織し、そのころ天下無敵と謳われた武田騎馬軍団をいとも容易に撃破したことは、よく知られている。



百済寺の庭園

信長は、そのような恐るべき破壊力をもつ鉄砲のなかに〝南蛮〟の本質を読み取ったのである。鉄砲を生み出した先進的な文化、技術が、信長にとっての南蛮であった。他の人々が南蛮を趣味的な風物として、あるいは魅惑的な信仰の一種として受身に接していたとき、信長一人はきわめて能動的に変革のパワーとして〝南蛮〟を理解したのである。

そして、キリシタン宣教師たちは、そのような南蛮の本質の、当時におけるまたとない伝達者であり、解説者であった。となれば、そこにおのずから、信長がキリシタンを厚遇せざるをえなかったという文脈が導き出されてくる。

だが、その信長の発想はその地点にとどまらず、さらに飛躍する。

信長はいわば、戦国の後発ランナーであった。信長がスタートラインについたとき、武田信玄、毛利元就らはすでに第三コーナーに差しかかっていた。

信長がそれらの先行走者を追いぬき、自身の手で天下布武を達成するには、鉄砲を新しい武器として活用したように、これまでにない新たな必勝の戦略を案出しなくてはならなかった。

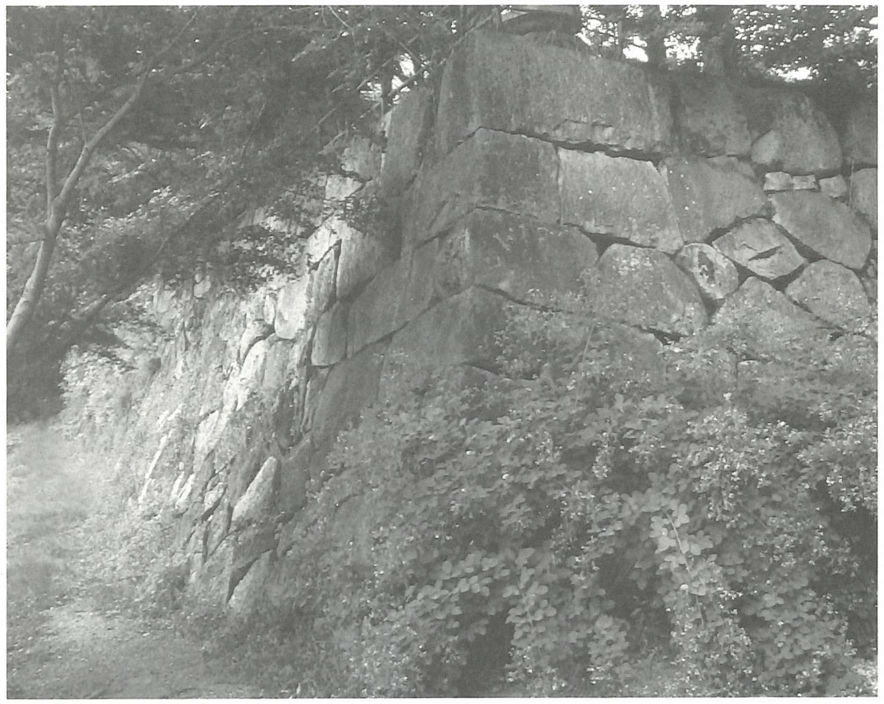
そこで、信長の脳裏に閃いたのが、やはり南蛮であった。

南蛮つまりヨーロッパ諸国は、いかにして宣教師のような宗教者まで地球の裏側の島国に送り出せるほどの国力を築くことができたのか。その秘密を探り出し、それをもとに必勝の戦略を組み立てる上でも、キリシタンを厚遇するのは、信長にとって必要不可欠な手続きだったのである。



敢国神社　天正伊賀の乱で焼失した敢国神社の荒廃を嘆き復旧したのは、伊勢・伊賀の領主となった藤堂高虎であった。

亀岡城の石垣（京都府亀岡市）　丹波を平定した明智光秀が居城した。光秀はこの亀岡城と坂本城という京都東西の要衝を掌握したわけである。



現代の私たちは、その秘密を知っている。ヨーロッパ諸国がこの時期、急激に海外に進出する力を養うことができたのは、絶対主義体制を確立したからだった。

信長は驚くべきことに、宣教師たちとの対話を通し、絶対主義のおおよその概念まで看取したようである。

信長は周知のように、官僚制の育成をはかり、兵農分離と常備軍の創出に成功し、農本主義ではなく重商主義社会の建設をめざした。諸大名に先がけて信長の手がけたこれら一連の施策は、ヨーロッパ絶対主義国家のあり方と多分に共通しているからだ。

以上を総括すれば、信長は宗教としてのキリシタンを保護したのではなく、文化・技術の伝達者としての宣教師を厚遇したにすぎない、ということになるであろう。

自らが「神」となる

しかし信長は、打つ手が次々と成功するにつれて「善き理性と明晰な判断力」を次第にくもらせ、自身のうちに神を幻視するという、異常な信仰にとらわれていった。フロイス『日本史』は、そのありさまをこう証言する。

「彼（信長）を支配していた傲慢さと尊大さは非常なもので、そのため、この不幸にして哀れな人物は、途方もない狂気と盲目に陥り、自らに優る宇宙の主なり造物主は存在しないと述べ、彼の家臣らが明言していたように、彼自身が地上で礼拝されることを望み、彼、すなわち信長以外に礼拝に値する者はだれもいないと言うに至った」

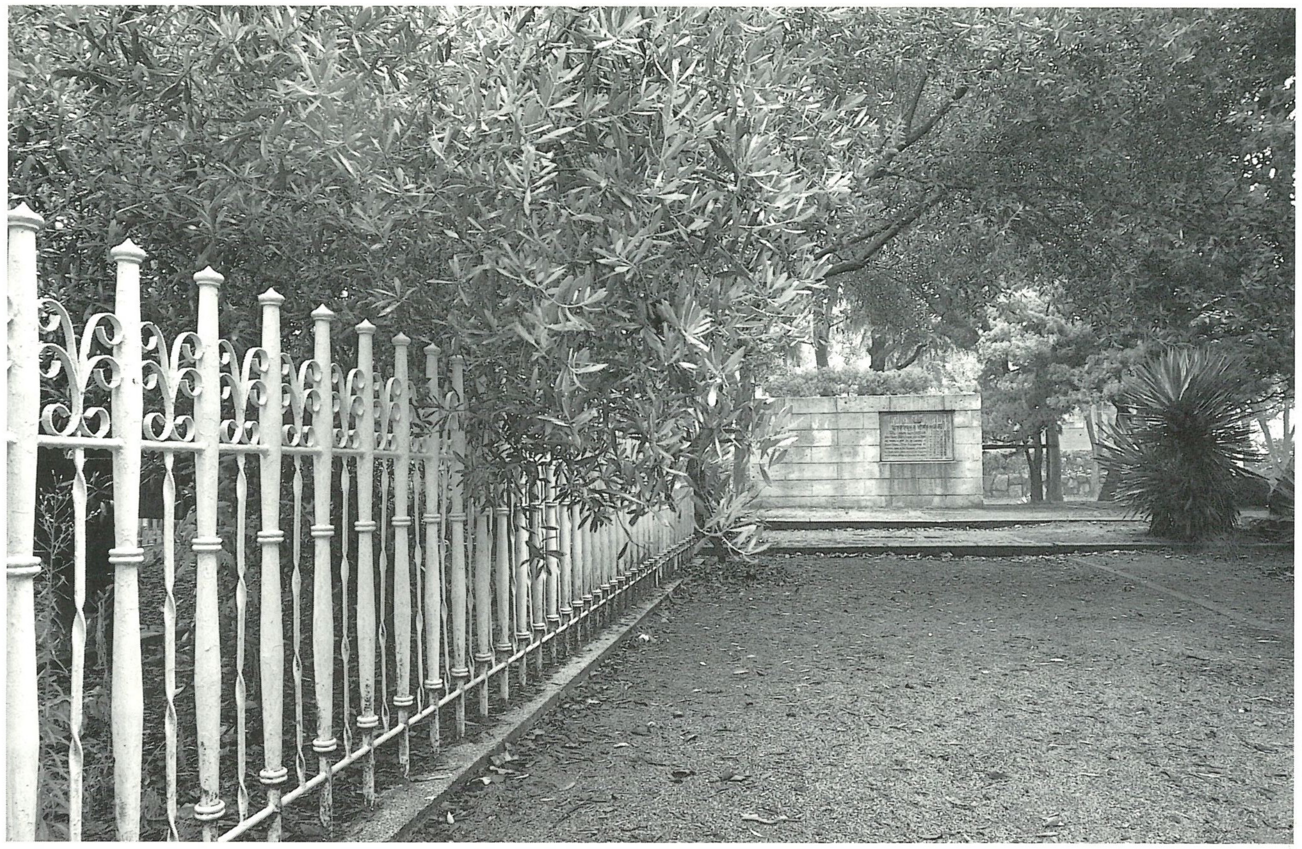
「彼はもはや、自らを日本の絶対君主と称し、諸国でそのように処遇されることだけでは満足せず、全身に燃えあがったこの悪魔的傲慢さから、〈略〉自らが単に地上の死すべき人間としてではなく、あたかも神的生命を有し、不滅の主であるかのように万人から礼拝されることを希望した」

「信長は、予自らが神体である、と言っていた」

無神論者が自身を神に仕立てるという逆立ちもはなはだしい矛盾を、信長は平然とおかしたのである。

だが、それも理由のないことではなかった。

信長が天下統一を望むにあたり、最大の強敵とみなしていたのは、甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信であった。ところが、武田信玄は長征上洛の軍をおこし、信長と直接対決しようとした矢先、病魔に斃れた。それから五年後、上杉謙信もまた反信長の旗幟を鮮明にして上洛しようとした寸前、ポックリと病死した。すなわち、二大強敵は、信長を敵にま



ザビエル上陸の地（大阪府堺市・ザビエル公園）　天文十八年八月、鹿児島に上陸したザビエルは平戸、山口をへて、翌年十二月京都での布教を志して堺に上陸した。

わした途端、信長が戦うまでもなく、相ついで死んでしまったのである。

　おのれに敵対する者は死ぬ――幸運といってよいこの連続した異変を前に、信長がそう考えたとしても別段不思議ではない。そこから、「これこそ、天の計らい。いや、自分が神であることの明白の証左だ」という思いあがりが導き出されてくるのは、時間の問題であったといえよう。

　しかし、この思いあがりは、当然のことながら、信長の思考経路に変調をもたらさずにおかなかった。

　その最終的なツケがまわってきたのが、いうところの本能寺の変であった。

　信長はつねづね用心深いことで知られていたが、本能寺へはわずか七十余人の小姓衆を引き連れていったにすぎない。京都はたしかに信長の勢力圏だったにせよ、これでは叛心を抱く者にわざわざ決起の機会を与えたようなものである。

　信長はおそらく、明智光秀の軍が本能寺に攻めこむ瞬間まで、「自分に敵対する者は死ぬ」という、心地よい神意識に酔っていたのであろう。



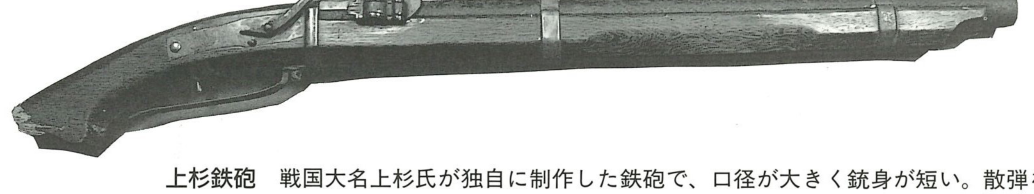
セミナリヨ跡　洋風三階建の安土セミナリヨの図があるが、実際は和風の三階建であり、茶室や客用の座敷まであったという。



安土城の信長廟　二の丸跡に豊臣秀吉が建立した。正方形に石を積み上げて墓所とし、周囲を石塀で囲んである。

信長と鉄砲

新井英生



上杉鉄砲　戦国大名上杉氏が独自に制作した鉄砲で、口径が大きく銃身が短い。散弾を詰めて至近距離から発射したので、上杉軍の鉄砲隊には突撃を仕掛ける者がなかったという。

大うつけの活眼

鉄砲の日本への伝来については六種ほどの異説があるのだが、ここでは天文十二年（一五四三）、ポルトガル船によって種子島へ二挺の鉄砲（火縄銃）がもたらされたという通説に従っておく。

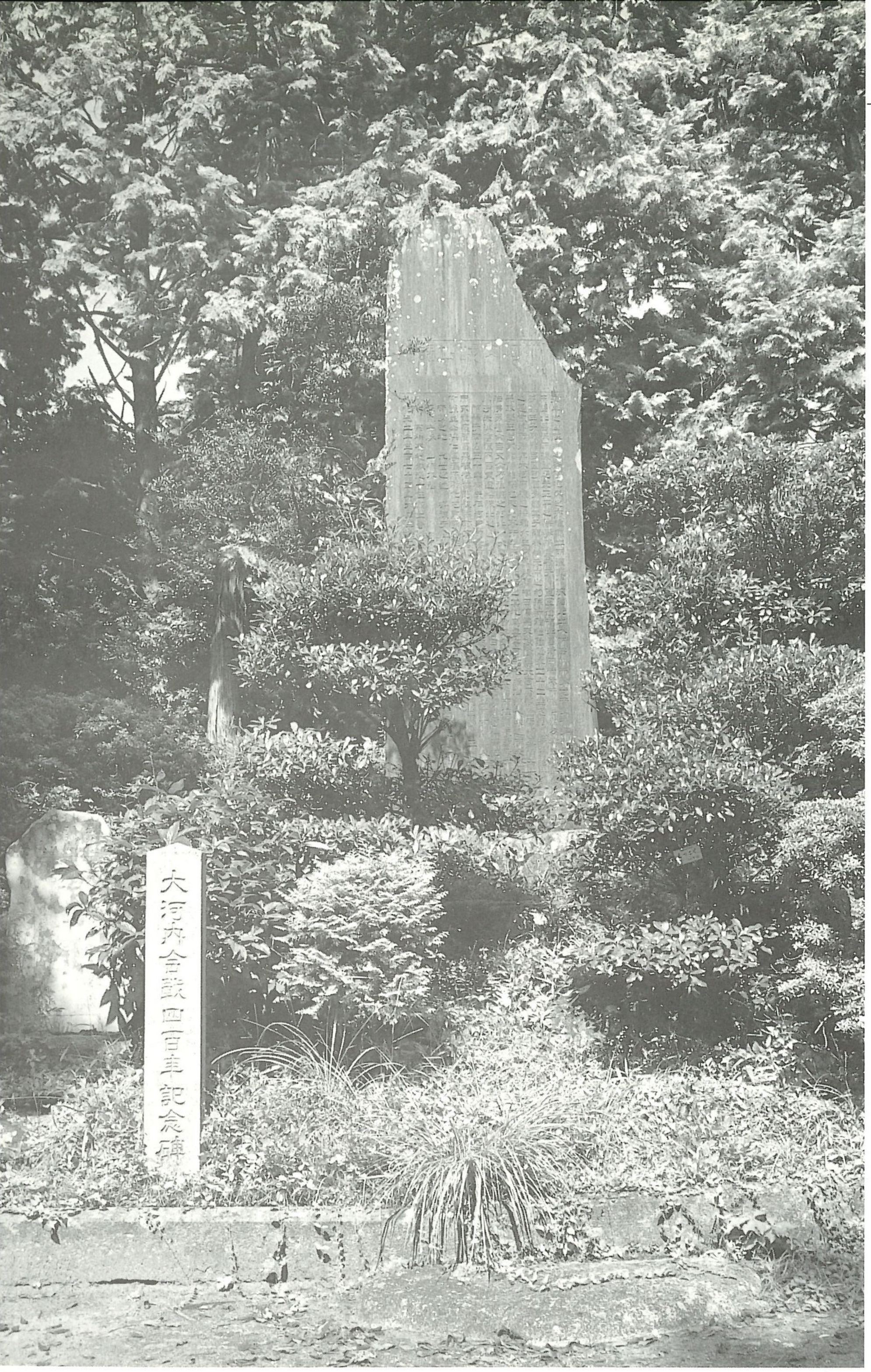
このとき織田信長はまだ子供だったが、異装の風体で奇行を演じ、人々から大うつけとよばれていた。しかし、このうつけ者はただの悪ガキではなかった。『信長公記』に、十六、七歳ごろまでの信長は、朝夕に馬術、さらには弓、鉄砲の稽古から水練まで兵法の修練をおこたらなかったとある。筆者の太田牛一は信長の家臣だったから、いくらかお世辞がまじっているかもしれないが、信長がいつも火うち袋をぶらさげていたというのは、あるいは太田牛一の記述どうり、すでに鉄砲の稽古をしていたからではなかったろうか。というのも、浅井長政が、家臣が撃った鴨が献上されたことへの礼状が残っていたりするからだ。



鉄砲の実射（戸川幸夫氏提供）

この同じ条りに、信長は竹槍合戦ごっこの経験から短かい槍は不利だからといって、三間（五・五メートル）ないしは三間半の長槍を、のち用いたという。そのころの合戦では、騎馬武者を突くのに短槍は不利だとして長槍がはやってはいたのだが、それでもせいぜい十尺（三・七メートル）よりやや長いくらいのものだった。信長がその倍近い長槍にしたのは、古典的な個人対個人の戦法から集団戦法へと合戦の様相が移りつつあるのを見取っての着想だった。つまり、槍術を心得ない足軽でも、多人数で長い槍先をそろえて突き出せば、それだけで攻撃にも防衛にもなる〝槍ぶすま〟が出来るわけであった。蝮と敬遠されていたあの斎藤道三も、信長のこの長槍隊には脅威し、柴田勝家に清洲の坂井大膳を攻めさせたときも、短槍の敵を圧倒した実績を上げている。

このようにうつけと言われながらも、たえず時代の流れを慧敏に見取っていた信長だったから、鉄砲が種子島へ伝来して六年目の天文十八年に、砲術の師匠橋本一巴を通じて近江の国友村（長浜市）に、五百挺もの鉄砲の製造を命じている（「国友鉄砲記」）。ところがこの橋本一巴という人物の素姓がよく分らない上に、砲術の師匠が輩出するのは文禄以降（一五九二―）のことだから、この話はそのまま受取れないふしもある。そのへんのことを点検するまえに、ごく簡単でも、鉄砲伝来後の日本国内への伝播のあらましを、知っておいてもらわなければならない。



大河内城碑　北畠具教は信長の二男信雄に家督を譲ることを条件に和睦したが、これが結果的には伊勢国司家・北畠氏の滅亡を招いた。

薩摩国大竜寺の文元和尚という人が、慶長十一年（一六〇六）に書いたという『鉄砲記』によれば、種子島へ漂着したポルトガル人から、二千金を投じて二挺の火縄銃を買入れた島主の種子島時堯は、家臣に鉄砲と火薬の製法を習わせた。このとき鉄砲伝来の情報をえた紀州根来寺の杉坊（あるいは津田監物）という者が、その年のうちに来島して熱心に教えを乞うたので、時堯は火薬の製法とともに貴重な二挺の銃の一つを与えた。つづいてまた、泉州堺の橘屋又三郎という商人が種子島へきて、鉄砲の製法と薬法を学んで帰り、間もなく根来と堺で鉄砲の生産が始まった。一方、薩摩の島津貴久や足利将軍義晴に献上した火縄銃をモデルに、近江の国友村へ試作を命じたのが、堺、根来と並び日本の三大鉄砲生産地となったゆえんだという。この他にも、南蛮人と往来のあった豊後の大友氏や、出雲に良質の鉄鉱脈をもつ安芸の毛利氏などにも、早くから鉄砲の伝わっていた記録がある。

こんなにも早く鉄砲の国産化が可能となったのは、古来より日本には刀鍛冶の秀れた技術があり、それが練鉄を鍛冶して造る銃身の製法に適し、小口径なら鍬や鋤を造っていた野鍛冶にも出来たと技術史はいう。しかも日本の産鉄は、十七世紀に来日した英国商人が認めたほど品質は優秀で、しかも刀鍛冶の発



駿河公の塚 駿河・遠江の大守今川義元を討ち取った桶狭間合戦の大勝利は、戦国大名としての信長の存在を大いに天下に知らしめた。

桶狭間古戦場碑 「織田軍記」や「信長公記」によれば、桶狭間合戦には織田・今川両軍とも鉄砲を用意していたとある。



達で製鉄技術もすでにヨーロッパの域に達していたというから、信長が注文した五百挺の鉄砲の製造くらいさほど困難ではなかったはずである。ところが国友村は、天正元年（一五七三）に浅井長政が滅亡するまでこの領有であったため、天文十八年の時点で、国友村から調達するのは不可能だとする否定説が強い。

しかし信長の伝記上でも有名な話だが、天文二十三年（一五五三）四月、尾張富田の聖徳寺で、信長が舅の斎藤道三と初めて対面し、大たわけという噂を信じていた道三に、「わしの子供たちは、そのたわけの門外に馬をつなぐこと（臣従する意）になろう」と、嘆かしめた時のことだが、信長の行列の中に〝弓・鉄砲五百挺〟という記述がある（『信長公記』）。もちろんそれは弓と鉄砲を合わせての数だから、かりに鉄砲をその半分以下だったとしても、二百挺の鉄砲が織田軍に装備されていたことになる。もし国友村での調達がむりだったとしたならば、はたしてこれほど多数の鉄砲を信長はどこから仕込んだのであろう。それとも太田牛一の作り話だったのだろうか。

天下布武へのヒント

近江の国友村よりもひと足早く、紀州の根来と堺に鉄砲の製法が伝えられて、大製産地となっていたことは前にも略述した。国友村のような大名領の場合は、鉄砲という新兵器の領外への搬出や密造には厳しく、天正八年（一五八〇）というだいぶのちの記録だが、四国の長宗我部元親が、違反者は斬首という誓書を発行しているのが現存しているほどであった。

ところが天文年間の堺は、どの大名の掣肘もうけない、市民の自治による日本一の国際貿易港であり、全国商業の中心地であったから、鉄砲も需要に応じてさかんに製造販売していた。

また根来というのは、紀ノ川中流にある新義真言宗の総本山として隆盛した根来寺に属する衆徒のことで、宗教組織というよりは紀伊、和泉、河内三ケ国に勢力を張る土豪的な存在であった。寺領五十万石とも七十万石ともいわれた根来寺内のいくつもの谷に沿って、それぞれ独立性をおびた僧坊がいくつもあり、種子島時堯から鉄砲をゆずり受けた杉坊というのも、この代表的な僧坊であった。（実は杉坊という僧坊と、同地那賀郡の土豪である津田監物とを同一人物視しているという説もあり、判然としていない）。ともあれ、根来衆と総称される衆徒の数は一万人前後といわれ、南北朝時代から傭兵として畿内の兵乱に介入し、のち守護畠山氏や足利義昭に加勢したことから、おおむね信長陣営に属していた。したがい、同じ紀ノ川河口の雑賀荘を中心に浄土真宗を信奉する土豪の連合組織の雑賀衆とは対立的であった。この雑賀衆については、のちほど詳述しなければならないが、諸国へ



桶狭間古戦場公園



鉄砲鍛冶屋敷　当時、火薬の主成分である硝石はすべて輸入に頼っていた。つまり、堺を押さえることは各地の大名の鉄砲の動向を知ることができたのである。



鉄砲鍛冶屋敷碑（大阪府堺市北旅籠町）　自由貿易都市の堺は、また鉄砲の量産地であった。信長が将軍義昭から堺や大津の支配権を認めさせたのも、堺のもつ財力と鉄砲が目当てだったからである。

戦闘要員として傭われていく根来衆は、鉄砲の製法や射撃術を秘密にはしていられなかったし、特にまた秘しておく必要もなかった。『北条五代記』にも「根来寺師に杉房、二王房……などいふ小者下りて、関東をかけまはって、鉄炮ををしへしが」とあるように、堺の鉄砲商人と同様その売買や伝授に開放的であったことがわかる。信長の鉄砲の師橋本一巴というのも、あるいはこの類ではなかったろうか。

横道へそれたようだが、要するに信長が国友村へ発注した五百挺の鉄砲の調達がかりに不可能だったとしても、それを購うだけの財力さえあれば、堺でも根来からでも仕入れることができたわけである。天文十八年といえば、信長はまだ弱冠十六歳で、織田家の当主でもなかったから、そんな莫大な金のかかる鉄砲を注文したりするのは不自然だという向きもある。だがこれとて、乱麻の如き戦国のまっ只中にあって、短時日に天下人へと頭角をあらわした信長と、尾張半国の守護代の被官から、小なりとはいえ大名へせり上ったかれの父信秀の人物と手腕を、並みの武将と見損った考えといわなければならない。

しかし当時の織田家に、一挺二十余両（今日の約二百万円）といわれた高価な鉄砲を、何百挺も買入れる資力があったのかといえば、答えは然りである。信秀のころすでに支配の実権を握っていた尾張下四郡には、熱田

（宮）、津島という尾張国内でも最大の港町があった。津島は伊勢湾沿岸の諸港を経て畿内の商業圏と通じ、熱田は東海道と伊勢湾を結ぶ交通の要衝である。しかも、熱田神宮と津島大社というきわめて神格の高い門前町として、古くから栄えていたこの二つの町は、莫大な現金収入をもたらす織田家のドル箱であった。だから信秀は、天文十二年（一五四三）、内裏修理費として銭四千貫を献上しているほか、外宮仮殿の造営費なども寄進しているほど財政は豊かで、軍事費に事欠くことなどはなかった。ちなみに、信長が長篠合戦のときにも旗印として見せびらかした永楽銭は、現在の金に換算すれば一貫文が十五、六万円になる。

さて、新兵器鉄砲の伝播の早かった西国の有力大名はもちろんのことだが、東国の代表的な戦国大名であった武田信玄も、弘治三年（一五五七）の川中島戦には三百挺の鉄砲を用意した記録があり、越後の上杉謙信や小田原北条氏などにも、少なくとも二、三百挺はすでに装備されていた。ところが、永禄六年（一五六三）までの中国地方における合戦での鉄砲による死傷者はゼロにひとしかったのが、それ以降になると、戦傷者の七、八割が鉄砲によるものと急速に増加している統計が、諸大名の合戦における鉄砲の使い方をよく示しているだろう。

当時の火縄銃は、厚さ六・五センチの板を



観音寺城本丸の石垣　鉄砲の出現は、それまでの土塁による築城から、鉄砲玉を貫通させない石垣へと移行する。さらに城壁には矢狭間と共に銃眼が作られるようになる。

約三十米の距離から撃ち抜く威力はあったが、有効射程距離は二百米で、命中精度となれば五十米、しかも二発目の弾丸を装填するのに熟練者でも十五、六秒はかかった。これでは百米を十秒前後で駆け抜ける騎馬隊相手に効果はなかったので、長篠における信長の新戦法が出現するまでは、威嚇か弓矢の補助、もしくは野武士や一揆などのゲリラ戦の狙撃に使われていたていどであった。

この新兵器の利用がこんなにおくれていた理由のもう一つには、一挺の値段の高値もさることながら、弾丸の原料の鉛、それに火薬の主成分である硝石を全く輸入品に頼らなければならない、という大きな制約があったからでもある。鉛のほうはそれでも、生野、花岡といったほんの数ヶ所ながら国内の鉱山から採取できたが、もちろん諸大名の需要に応じられるだけの量はなかった。だから武田の部将小山田信茂が鉄砲玉を造るために、神社から悪銭を徴集したなどという説もある。黒色火薬の混合成分の硫黄と木炭は国内に良質の物が十二分にあったが、混合比率の七割をしめる硝石（塩硝）は皆無であった。硝石が国産化したという記録は、慶長年間（一五九六～）の中期以降にようやく見えている。

桶狭間前年の永禄二年（一五五九）、信長は八十人の供をつれて上洛し、将軍義輝に拝謁する前に奈良と堺を見物しているが、鋭敏な信長はこのとき、天下を掌握する一つのヒントを得ていたようであった。当時、堺が日本最大の国際貿易港であったことは何度も言ってきたが、外国産の硝石は当然この堺へ集中するのだから、もしこれを独占したならば、全国の大名がたとえ何千何万挺の鉄砲を装備していたにしても、それはみな弾丸の発射できないただの鉄の棒になってしまうということである。もちろん信長が具体的に天下を意識するのは、今川義元を屠ってからのことだし、それを公言（天下布武）するのも、永禄十年（一五六七）、美濃斎藤氏の稲葉山（岐阜）城を掌中にしてからことだ。

それゆえに信長は、足利義昭を奉じて入京した永禄十一年、その恩賞として副将軍となるか、畿内五ケ国のうち望みの国を知行するかという優遇な沙汰を辞退して、ただ堺と大津、草津に代官をおくことを願った。義昭とその側近は、信長の欲のなさにあきれたというが、官位や地位をありがたがる中世的な古い価値観しかもち合わせないかれらに、信長の進歩的な野心などのわかるわけがなかった。信長が堺を欲した理由はもはや説明することもないが、大津、草津というのは、日本海と瀬戸内海の水運を中継する琵琶湖をようした交通の要衝で、諸国からの物産が集散する商品経済のメッカであった。

『信長公記』の記録をたどると、はたせるかな永禄十一年以降になると、他の大名と同様、それまで弓衆と混成だった織田の鉄砲衆が、独立して編成されたと受取れる記述に変っているし、佐々成政など奉行の姓名まで明記され、鉄砲の合戦における使用が活潑化しているのがはっきりとわかる。

信長最大の難敵

火薬を一手におさえ、新兵器の鉄砲を駆使して天下を掌握せんとする信長にとって、課題がまだ一つのこっていた。

まだこの時点では、武田信玄の率いる騎馬軍団が日本で最強と信じられていたように、騎馬の突進より弾丸の装塡のほうが時間がかかるというデメリットを、どう克服するかということであった。

いみじくもそのヒントを与えてくれたのが、信長にとって最大の難敵となった石山本願寺の主力戦闘隊である雑賀衆であった。鎌倉期に親鸞に創められた浄土真宗（一向宗）は平民的な宗教ということで、畿内をはじめ北陸、東海、紀伊などの広い地域に信者をふやし、信長のころには、蓮如上人の熱心な布教で諸宗派の中でも最大勢力となっていた。加賀国では、門徒の地侍と百姓が一揆をおこして領主の富樫氏と戦い、これを追い出して一国の支配権を握り、信長の領国尾張とは川ひとつへだてた伊勢長島にも、二万以上の門徒が勢力を保持しているといった盛大さだった。かれらは領主である大名たちへの租税は拒んでも、本山への献金はおこたらなかったので、石山本願寺は武力、財力的にも一大王国を成していた。

紀ノ川河口の雑賀荘を中心とする五荘郷の土豪の連合組織を雑賀衆といったのだが、もちろんかれらは熱烈な門徒で、総数は七千人前後ながらほとんどが射撃術に秀れ、最低でも三千挺の鉄砲を所有していたという。この



観音寺城の石段　石塁を全山にわたって使用する観音寺城の偉容は、中世の城郭としては例がなく、六角佐々木氏の栄華の跡を物語る。

雑賀への鉄砲伝来の経路は不詳なのだが、隣接の根来寺へ疾くに鉄砲が入っていることや、雑賀衆が古くから対明貿易の拠点だった薩摩の坊ノ津へ出かけて、交易にたずさわる海運業をしていたことなどから、雑賀に鉄砲の生産や射撃術が発達したことには、およその想像はつく。かれらはこの特殊技術を売り物に、傭兵として諸方の合戦に参加していたが、元亀二年（一五七〇）、本願寺が阿波の三好党や越前の朝倉、北近江の浅井らと呼応して信長と対するに至り、その主戦力となった。

この石山合戦は天正八年（一五八〇）まで、一時的な小康状態は中間にあったものの、十一年間の長期にわたり、結局、信長は武力では陥せず、朝廷内に工作して勅諚による和睦という形で終結した。だから、信仰による本願寺方の団結力もさることながら、やはり雑賀衆の鉄砲の量と技がいかに秀れ、火薬が豊富だったかということである。このころすでに雑賀衆には、「鉄砲はいわゆる大軍剛敵を防ぐに第一の兵器也」と書き起こした『雑賀流火術極意巻』という砲術書があったし、佐武伊賀なる人物によって〝鉄砲構え〟という、鉄砲衆は戦場では必ず簡単な障害物を設けてそのかげへ配置せよとか、射手を装塡する者が役割分担して、何挺かの銃で切れ目なく発砲する法、あるいは五十人の鉄砲衆を二組に分け、それぞれに小頭を配しての号令で二十五人が交互に発砲する、といったいくつかの戦術が確立されていた。

はるかに鉄砲戦術や操作技術の面でおくれていた織田軍団からは、部将格の村越越中守が戦死、鉄砲奉行佐々成政は重傷といった負傷者が続出し、信長までが足に鉄砲傷を受けるといった苦戦の連続だった。しかし創造力に富んだ信長は、三好一党の立篭る野田、福島の砦を攻略するため、国友村で造られた大鉄砲を櫓の上から撃ちおろすという工夫をみせたりしたが、やはり雑賀の鉄砲戦術にはかなわなかった。しかし信長はこのにがい経験から、雑賀流極意書にもいう、鉄砲は城や砦の中から防御力として使えば威力は倍加するということに気づいていた。

この発見が、天正三年（一五七五）の長篠設楽ケ原における武田勝頼の騎馬軍団との一戦に、信長流に具現されたのであった。勇猛な武田騎馬隊の突進を阻むため、信長が考案した馬防柵の内から三千挺（実は千挺という）の鉄砲隊を三組交代で切れ目なく発砲させることで武田軍を敗退させた戦法は、一大戦術革命と語り伝えられることとなった。たしかに長篠戦以後、各大名が急速に鉄砲隊を重視しだし、合戦の様相が一変したのは事実だが、信長の戦法そのものは雑賀衆のそれの応用であり、馬防柵を障害物として鉄砲の防備力をいかんなく発揮させたのにすぎなかった。

日本最強の騎馬軍団による誇り、関東管領という名に陶酔して、戦事形態とその観念を一変させるべき新兵器鉄砲の開発、利用に積極的でなかった武田信玄や上杉謙信などは、いかに名将といわれていようとも、所詮それは過去のことで、時代を先取りしていた信長にとってはもはや強敵でも脅威でもなかったし、ましてや鉄砲のすべてを悟ったいま、勝頼ごときは目ではなかった。これよりもむしろ、領主支配に反抗して兵農分離の根幹をもおびやかしかねない一向一揆と、それを支える雑賀衆の私貿易による鉛や硝石の供給が切れないことのほうが、信長にとってははるかに恐怖であった。

鉄砲は神の贈り物

元亀二年（一五七一）、信長は新しく近江長浜城主に取立てた木下藤吉郎（秀吉）を通じて、国友村へ二百匁玉の大砲二門の製造を命じた。その下知の中で、信長はこんなふうなことを言っている。「鉄砲という妙器を日本へ伝えたのは、八幡大菩薩が国家安穏なら



姉川合戦碑　初戦においては朝倉・浅井軍が優勢で、織田軍の四陣まで打ち破った。しかし、徳川軍の奮戦で朝倉軍が崩れたのを機に形勢は逆転した。

しめんと与えられた神の授かり物である。従ってこの妙器の用法に心を砕いてこそ真に将といえる」（国友鉄砲記）

鉄砲という新兵器による天下平定を目ざしていた信長の理想というかビジョンが明瞭に表現されているが、これは一面、信長の最大の難敵だった一向勢力を〝根切り〟、つまり根だやしにせんとする意志表示ともいえた。つまり、大砲は城砦や櫓、軍船など構造物の破壊を目的としたものであるから、石山合戦における攻守所を変えるということであった。

当時の鉄砲と大砲のちがいは明確ではないが、鉄砲足軽が携帯した火縄銃よりやや大きいのを大鉄砲といい、今日の観念でいうところの大砲は石火矢とよんでいた。江戸時代には玉の重さで区別し、三十匁以下を小筒、百匁までが中筒で、それ以上を大筒といい、一貫目玉からは石火矢といっている。しかし戦国のころ、豊後の大友宗麟が、天正四年、インド総督から贈られた〝国崩し〟と名づけた大砲を、毛利や島津との交戦に使用している記録があるくらいで、他の大名は重くて運搬に不便な上、貴重な火薬を大量（国崩しでは一貫匁）に消費する大砲など、全くといってよいほど実戦には用いていなかった。

ところが信長は、天正六年（一五七八）、配下の九鬼嘉隆に造らせた鉄甲の大戦艦（長さ22米、幅12米）七隻に、国友製の大砲三門を搭載し、海上より石山本願寺へ物資補給を続けていた毛利水軍を木津川河口で撃破した。実はこの二年前に、信長は本願寺と毛利水軍の補給路を遮断せんとして海戦を挑んだのだが、逆に毛利方の火矢やほうろくで織田の軍船はことごとく焼き崩されてしまった。そこで信長は、火矢など受けつけない鉄張りの船を思いつき、しかも、日本海戦史上はじめて軍船に装備した大砲を放って大勝利をはくしたのである。いかにも信長らしい斬新な戦法であったが、この毛利水軍の敗北を機に、さしもの本願寺も窮地に落ち入り、天正八年四月、朝廷の和睦案を容れ、宗主の顕如は石山を明け渡して紀州へ退去した。

信長にとって最大の強敵であると同時に、えがたい反面教師でもあった雑賀衆は、天正五年の二月に、根拠地の雑賀荘へ十万の大軍を率いた信長に攻め込まれ、三千に減少していたとはいえ得意の鉄砲戦で対抗したが、織田軍は竹を束ねた弾丸よけの新兵器を用いてきたために銃撃も成果が上がらず、ついに降



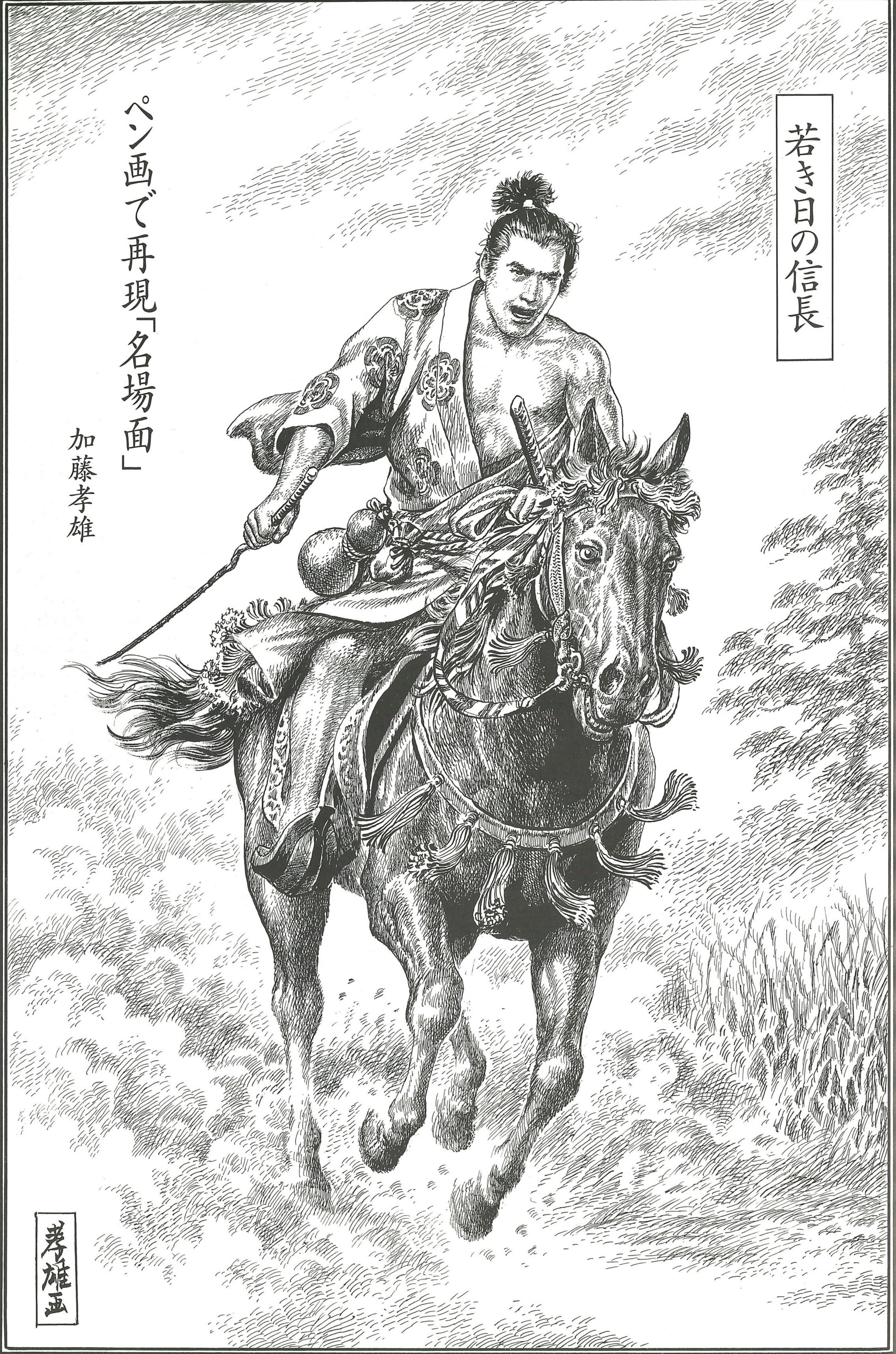
信長本陣の跡　武田騎馬軍団に対して、信長は鉄砲三千挺を三段に構えて射撃するといった画期的な戦術を用いた。この合戦以後、各地の戦国大名は鉄砲隊の組織化を急ぐ。

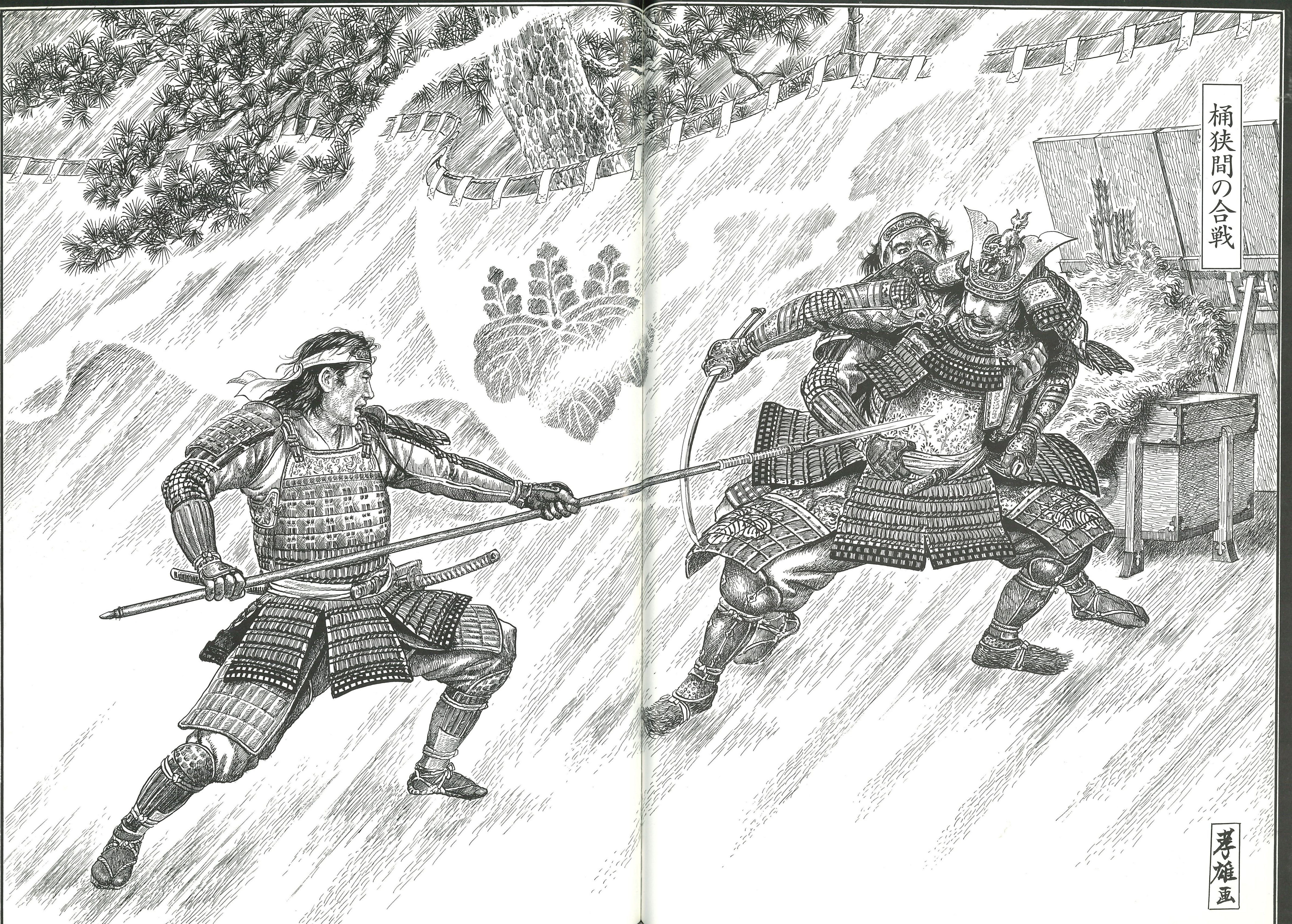


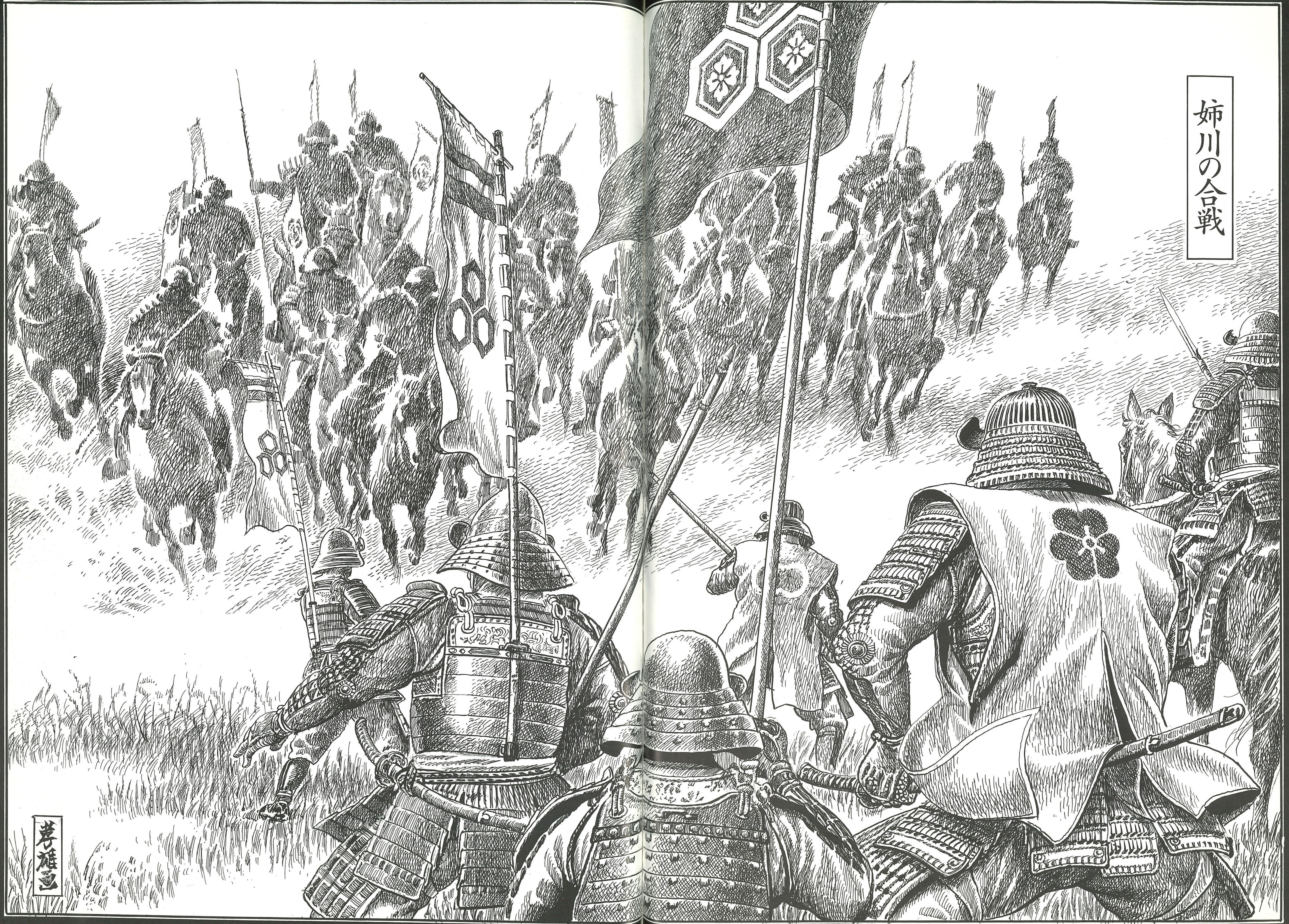
伏してしまった。

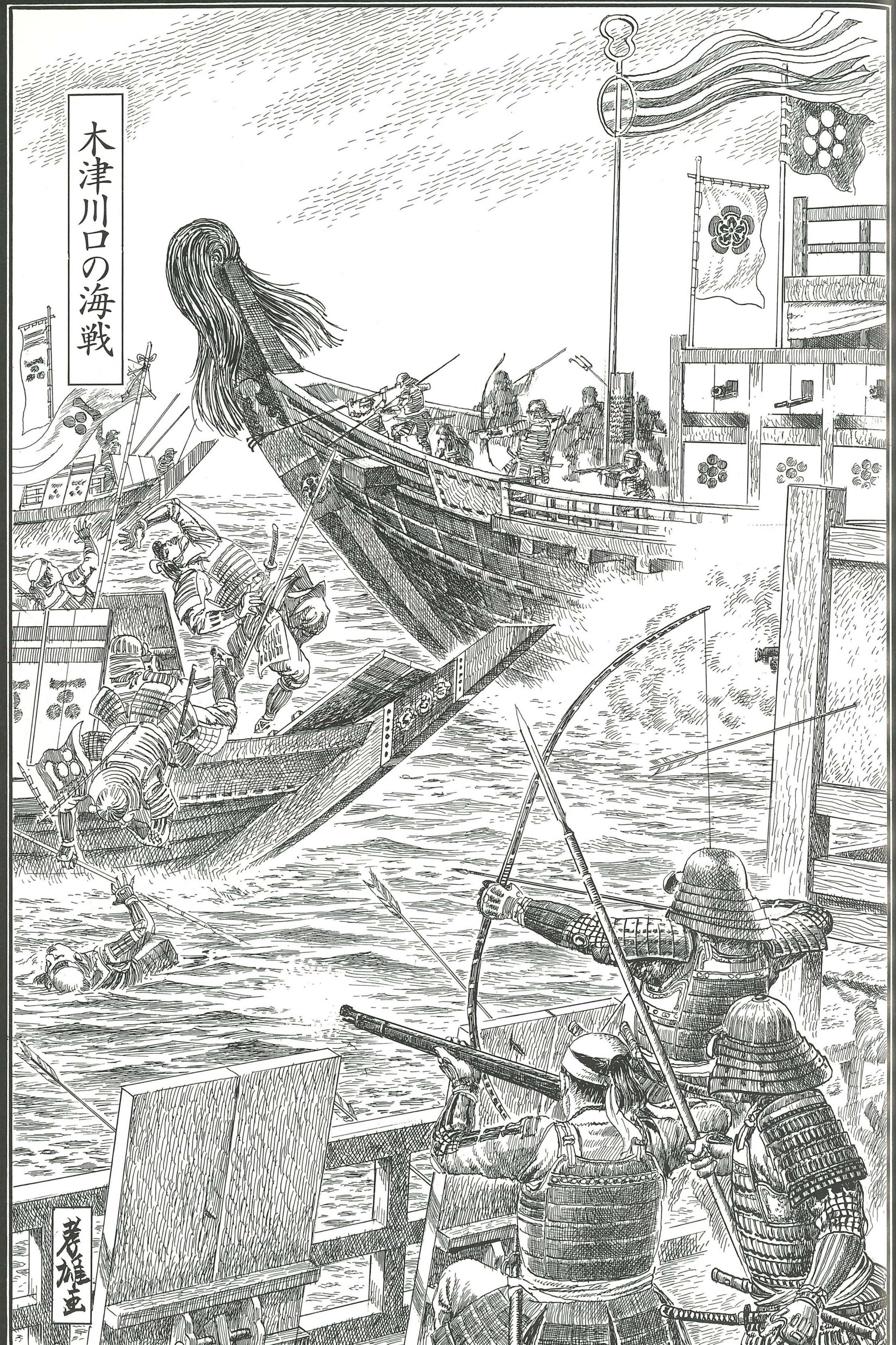
信長が最も恐れた相手としてはなんともあっけない最後といえるが、いかに先進技術（鉄砲）のエキスパート集団でも、そのテクニックのすべてを信長軍団のような大組織が吸入してしまえば、当然かなうわけがなかった。その意味においても、信長が硝石をおさえ、鉄砲のノーハウを身につければ天下が取れるとした着想は、まさに正鵠を射ていた。

天正十年の正月も、信長は安土築城以来の年始行事となってる左義長（どんど）を盛大に行っていた。子の信雄、信孝らの一族をはじめ近臣たちを城下の馬場に集め、各人が思い思いの頭巾や衣裳をつけて馬に乗り、華々しく爆竹をならして町中を駆け廻るお祭さわぎであった。人間は五十年というその一歳前だった信長は、黒い南蛮笠をいただき、まっ赤な袴に虎皮のむかばきを腰につけ、唐織りの羽織姿で葦毛の馬をまっ先に立って飛ばしていた。『信長公記』には、爆竹に〝さぎっちよう〟とふり仮名をしてあるが、庶民が一月十五日に、一年の厄払いに門松や注連縄などを焼く左義長も、信長風にすれば火薬（爆竹）で悪病を吹っ飛ばす形となり、こんなに賑やかで国際色豊かな風景と化するのだった。それにしても爆竹をおしげもなくならすあたり、いかにも信長の火薬の豊富さを物語っているようでもあり、装いもまた大うつけといわれたころの異装に変りはなかった。

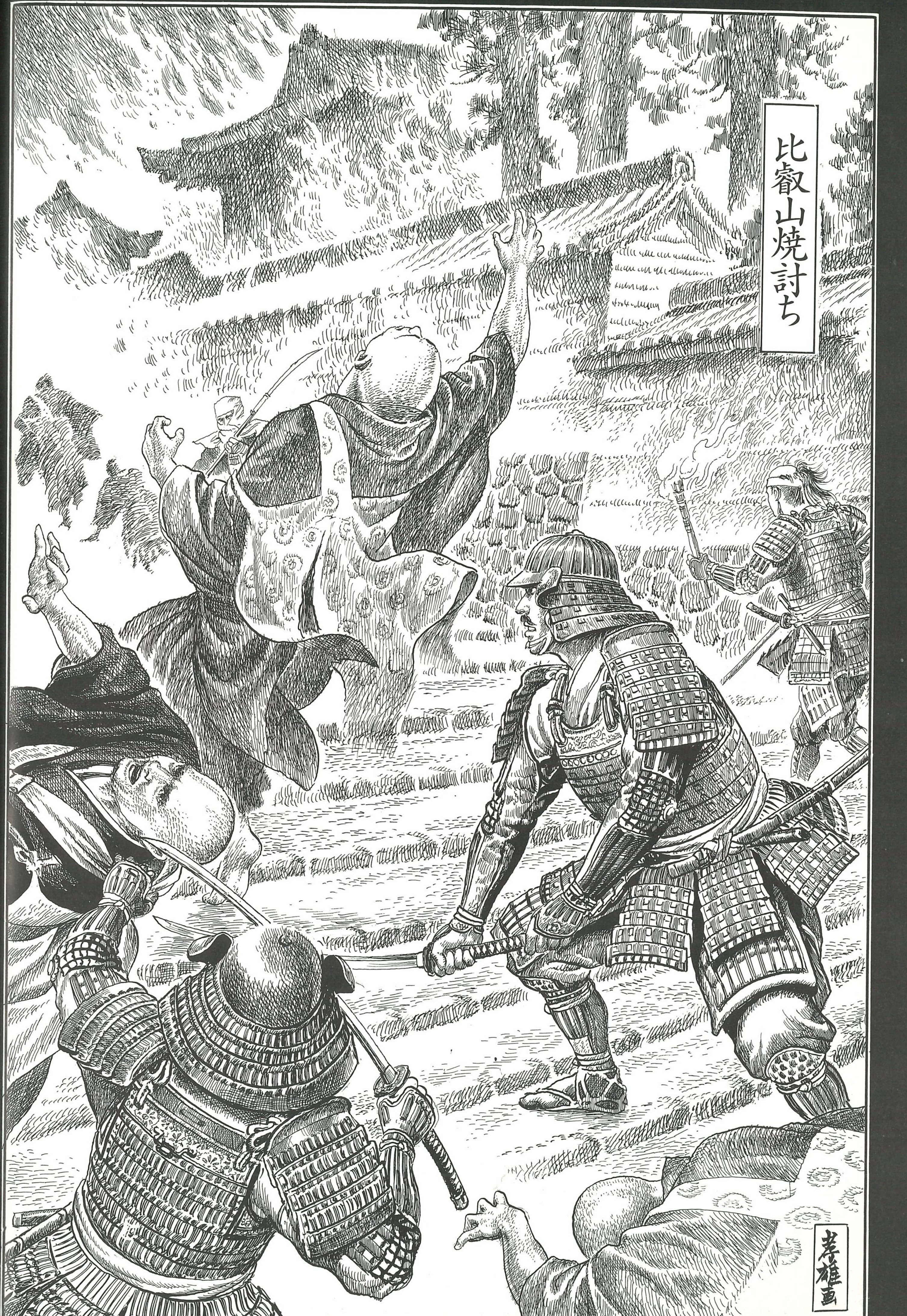

若き日の信長
ペン画で再現「名場面」
加藤孝雄
孝雄画


桶狭間の合戦
孝雄画


姉川の合戦
孝雄画



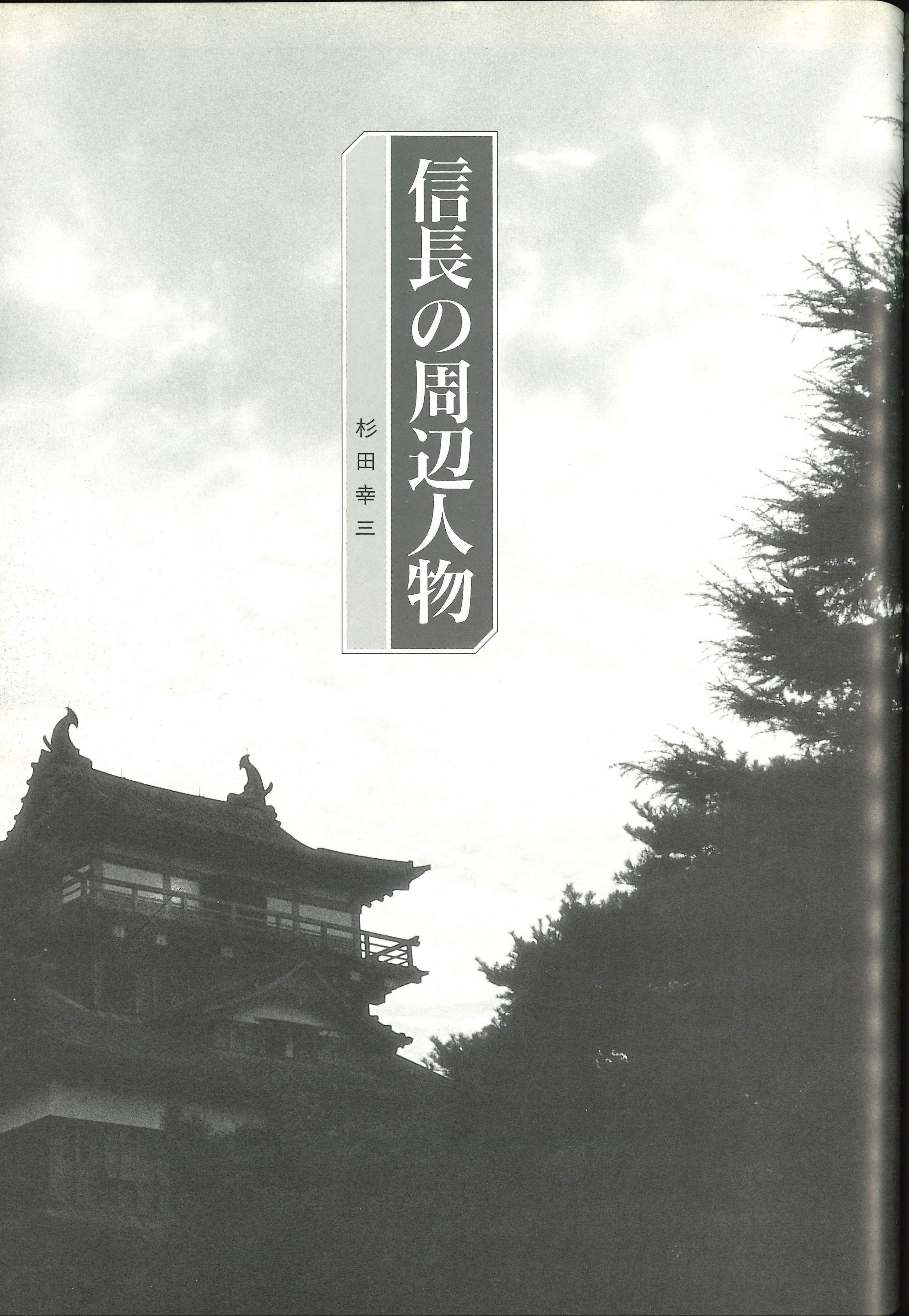
木津川口の海戦



比叡山焼討ち



本能寺の変



信長の周辺人物

杉田幸三

信長の武将たち

平手政秀　ひらてまさひで

明應元年～天文二十二年（一四九二～一五五三）

尾張の人。信長が十歳のとき、信長の父信秀の代理として京都に赴き、御所築地修理費四千貫寄進の使命を果たした。

また、信長が那古野城を与えられたときには、信長の守役として従った。信長初陣でも当然、側にいた。

斎藤道三の娘帰蝶を信長に迎えるときも使者に立った。文芸にも造園などにも造詣が深い人だったようである。だが、所詮、奔馬のような主君信長にはついていけない。訓育に誤りがあったのではないか、として自決してしまう。

のち、成長した信長が政秀の菩提を弔うため建てたのが政秀寺である。はじめ春日井郡、次いで清洲、さらに名古屋に移築している。

＊



政秀寺　平手政秀は織田家安泰のため、信長と斎藤道三の娘・濃姫の結婚を成立させたが、その後の濃姫の記録はいっさい見当たらない

稲葉一鉄　いなばいってつ

永正十二年～天正十六年（一五一五～八八）

美濃の人。本姓は越智氏。伊予河野の一族という。祖父の代、美濃入りしたらしい。改姓は稲葉山城がヒント。土岐氏・斎藤氏と仕えた。龍興の代、その凡庸さに愛想を尽かし、氏家経国・伊賀範俊と並んで美濃三人衆といわれたが、信長に通じた。だから臣従しても外様である。

信長も警戒し、一日、茶室に招いた。つまらん男なら構わん、ずぶりやれと、相伴の侍に命じておいた。亭主が掛け軸の画賛を質問した。一鉄は、

「雲ハ秦嶺ニ横タワリ、家イズクニカアル、雲ハ藍関ヲ擁シテ馬ススマズ」

すらすら読み、意味も述べた。信長は次の部屋で聴いていたが姿を現し、武張っただけの男ではない。文事にも嗜みがあるなと合格点を与えた。このとき一鉄は懐中に短剣をかくしていた。

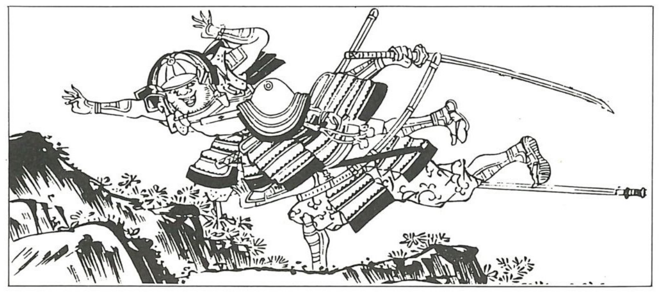
「ひょっとして、殺されるのではないか。その時は私めも一人だけは相打ちでなり刺さんと用意していました」。その場へ短剣を出した。信長は「武士とはそういう心掛けが大事よ」といった。

まだ信長に信じられていない、と、姉川戦では三人衆とも団結、猛然と戦っている。

紀州の雑賀一揆平定時はもう六十三歳だ。信長は戦わないで勝つことを考え、軍使を派遣した。一番手は失敗し、二番手に立ったのが一鉄だ。今度は成功した。彼は平服で礼儀正しく敵陣に赴いたのである。これは兵法に通じていたと見た方が良さそうだ。信長の死後は秀吉に仕えた。七十四と七十三歳歿年説がある。



雑賀崎（和歌山）



柴田勝家の墓　信長の妹・お市の方を妻に迎えた勝家は北庄城で北陸道を管轄していたが、本能寺の変には秀吉におくれをとった。



林佐渡守通勝　はやしさどのかみみちかつ

?～天正八年(一五八〇)

美濃の人。織田の革命政権では保守的に過ぎ、やがて粛正の対象となる。もう一人は佐久間信盛だ。初め通勝は平手同様信長の守役だ。本来保守的だから、おとなしくまっとうな信長の弟信行支持に回り、信長廃嫡に動いた。柴田勝家もそうだ。結局失敗、林も柴田勝家も謝って許される。

だが、駄目なものはいつまでたっても駄目という例か、二十数年後には追放されてしまう。旧い世の中の生活態度をいつまでも引きずっていたためであろう。もう通勝ぐらいは追放しても、織田軍はびくともしないということだったのであろう。この時、六十くらいだったのではあるまいか。

＊

柴田勝家　しばたかついえ

大永元年～天正十一年(一五二一～八三)

織田軍団の勇将・トップクラスである。信長横死前後、信長は五方面に国持ち大名を派遣していた。そのうち北陸道方面軍司令官が勝家だった。加賀は平定したが、この方面には西を窺う上杉という大物がいたのである。この加賀平定戦には佐々成政・前田利家・不破河内といったいわゆる府中三人衆がいた。勇猛だけではなく軍略も治世も優れたものが無ければならなかったであろう。この人には有名な話がある。いわゆる〃瓶割り柴田〃だ。

近江の長光寺城で六角承禎勢に囲まれた。水攻めにあった。城内への水路を断たれたのである。城内に井戸はあったがたかが知れていた。六角勢から軍使が向かった。開城勧告だ。手持ちの水がどれくらいあるかの偵察でもあった。勝家は手水用にたっぷり使わせ、残りは大地に撤かせた。軍使は頭をひねりつつ帰った。

一方、勝家は、三つの瓶に残っていた水を将兵に見せ、坐して渇死するか、打って出て敵を殲滅するか二つに一つである、と決意させ、十分飲ませてから槍の石突で三つの瓶を割った。

ただしこの話は、城が湿地帯に位置しており(近江蒲生郡志)飲料水は豊かだった、というから後世が作り上げた勇将伝説かもしれない。

治世の面では越前八郡十九万石を支配する守護職的な地位に昇ったこと。

腰を落ち着けた勝家の第一着手は、現在の福井市の原形となる城下町・町割り実施だった。とくに治水の面では際立った手際を見せた。もっとも、その背後には信長の施政方針が厳としてあった。

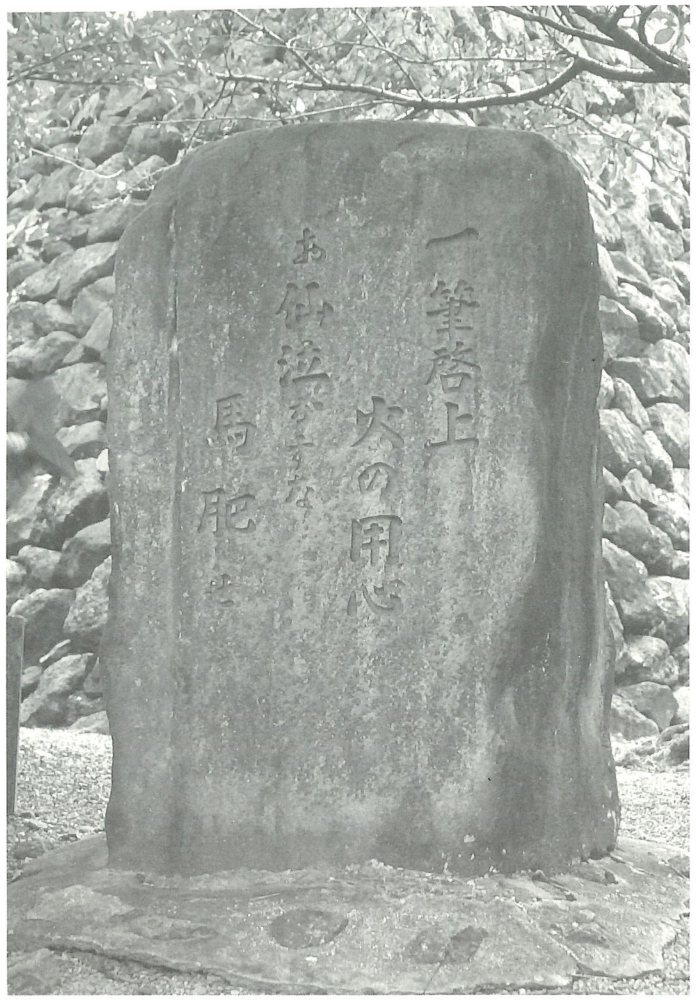
一揆参加の門徒たちから武器を没収し、それを農具に直して配布、残りは鋳直し、川舟をつなぐ鎖とした。これを使ったのが九頭龍川の舟橋である、と伝わる。

こういう治世上の話より、勝家らしいのは、やはり武人としての彼であろう。一日、佐々成政、不破河内、前田利家と会した折り、勝家は上機嫌で、腹ばいとなり京の都や主君信長のことなどを語り、

「又左殿(前田利家)よ、心の底に裏表のある明智などが出しゃばりおるが、この柴田はこれまで二十六度の合戦に勝ちを得て、信長公のお褒めにあずかっている。だから、何が出てきても些かも憚かるところはないわ。又左殿も勝ち戦を数えてござれ」

といわれた前田利家は、日頃から尊敬している、〃おやじ殿〃というのいつもの呼びかけ方で、

「たびたび先手をなされてお勝ちであった。まるで、端武者のようにたびたび槍を従横無尽にお使い召された。まずは今日二人とはな







柴田勝家の花押

本多重次の碑　「一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ」家康の家臣本多重次が戦陣から家族へ送った有名な手紙。文中のお仙(成重)はのち丸岡藩主となった。



森三兄弟の墓　左から蘭丸、力丸、坊丸と並ぶ森三兄弟は、本能寺の変で信長に殉死した。

いお方と存ずる。仰せの通り、私めも指折り数えてみまするとu十八度ばかりはございましょうか」
　これは利家夜話や武家事紀にある話だ。
　この後に来るのが天正十年の本能寺の凶変である。勝家は出遅れた。信長の後継ぎ問題でも秀吉にやられてしまう。秀吉に勝った点は、出戻りながら、絶世の美人といわれた信長の妹お市と再婚、北の庄で最期を遂げたことであろう。勝家最後の華であった。辞世の和歌がある。この一首だけでなく意外に、こういう面の素養もあったものと見える。歿年六十二歳。

森可成　もりよしなり

大永三年～元亀元年（一五二三～七〇）

もと美濃金山城主。斎藤氏の臣だったが、早い時期、信長に従った。直臣といってもいい。長男が長可（長久手で戦死）。次男が長定の蘭丸（本能寺で戦死・その弟坊丸、力丸も同じ）。
　浮野の戦、桶狭間戦、近江箕作城攻めののち、元龜元年浅井長政攻めのとき、志賀・宇佐山両城を守った。浅井・朝倉連合軍は京都に攻め込む門出の血祭りと攻めかかった。可成は五百騎を率いて城をでて戦い、やがて敗走。これは見せかけだ。敵は追う。これを可成の伏兵が左右から襲った。主客が転倒、今度は可成の手勢が追う。まずいことにこれが深追いしてしまった。それを浅井長政の鉄砲隊が乱射したから可成勢は浮き足だった。それに浅井・朝倉勢は大軍だ。可成も手傷を受けた。乱戦の中で腹十文字に切り絶息。享年四十八。

金森長近　かなもりながちか

大永四年～慶長十二年（一五二四～一六〇八）

　美濃土岐氏の支流。はじめ五郎八。戦功によって信長の〝長〟一字を貰った。赤母衣衆の一人。越前の一向一揆鎮庄後大野郡三分の二を領し柴田勝家の与力となる。甲斐の武田攻めでは飛驒口の将。本能寺の変では秀吉に従って山崎に戦う。兵部卿法印と号するのはこの頃らしい。勝家・秀吉の争いには初め勝家に属し、のち秀吉に従って丹羽長秀の与力となった。長秀歿後、秀吉に直仕、飛驒高山城主。秀吉歿後は家康に属し、関ケ原でも東軍に属した。利休門下の茶人としても知られる。歿年八十五。

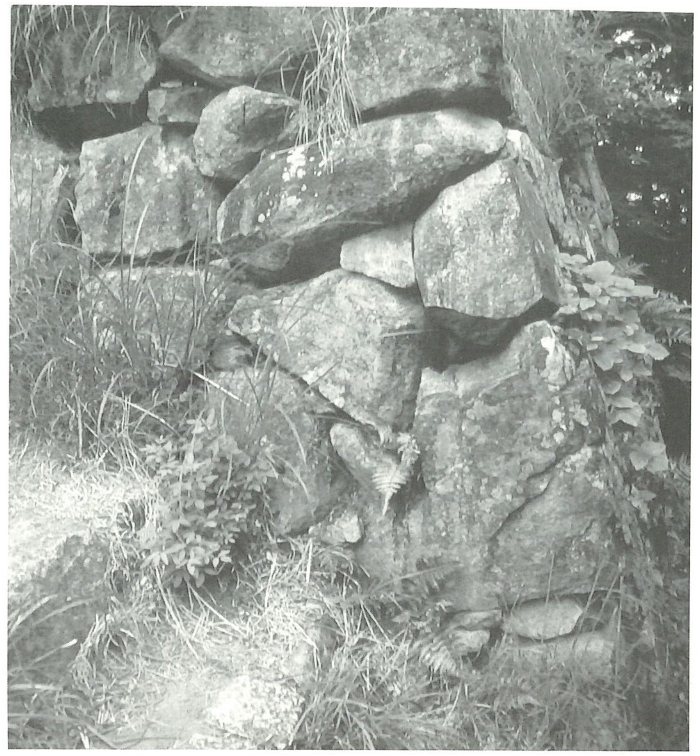


千利休一門の碑（大阪府堺市・南宗寺）　信長の茶頭でもあった千利休一門の墓碑。

滝川一益　たきかわいちます

大永五年～天正十四年（一五二五～八五）

　近江・滋賀郡甲賀の人。鉄砲の達人だったという。永禄四年、信長の命を受けて家康幕下の石川数正を訪ね、講和の基礎がためをやっているし、十年、四十三歳のころには、伊勢の員弁、桑名二郡を攻略している。三十代後半ころ信長に臣従したのではないか。現愛知県海部郡の蟹江町にあった蟹江城を預かったのが永禄十一年。六年後の天正二年には長島城主である。
　翌年の長篠の役では左翼に陣し、七年の伊丹城攻めでは多くの内応者を出させる功績をあげていた。やがて天正十年三月、甲斐の武田氏を田野に敗死させた。
　その褒賞が上野国、信濃の小諸・佐久両郡の領有。関東方面軍の司令官といってよい。この方面における当時の敵は小田原の北条氏である。それへの抑えでもある。
　一益は兵八千を率いて箕輪城に入った。次いで厩橋城へ。周辺の地侍が早速一益を訪ねた。彼は裸だった。一枚しかない小袖を洗ったばかりだったのである。事情を言って少し



安土城跡



滝川一益



明智光秀

待ってもらえといった。地侍たちは待たされたが事情がわかると質素さに感心した。三月後に本能寺の凶変。隠すことなく地方の侍を集め、「士は義を重んずる。これよりただ一筋、主君の弔い合戦に参る」と打ち明けた。取っていた人質もすぐ解放した。問題は北条方だった。一益を討ち、上野国の奪取にかかるのは目に見えていた。それならばと、逆に一戦をと総勢一万をもって神流川に背水の陣をしく。だが北条は六万。敗れた。やむを得ず厩橋に退き、戦死者の供養をし、別れの酒宴をやって立ち退いた。

「一益、厩橋を引き払いたる振る舞い、感ぜぬ人はなかりけり」とは名将言行録の結び。

だが、一益のあとは「関八州の者は滝川の名を聞いただけで恐れたほどだが末に至りてさんざんのていなり」とは老人雑記の記。歿年六十二というが実のところがわからない。八十ぐらいで死んだという説すらある。忍び出身というからそれでいいのかもしれない。

河尻秀隆 かわじりひでたか

大永七年～天正十年(一五二七～八二)

尾張の人。譜代の重鎮。黒母衣衆トップ。信長の父信秀の代から仕えていた。長篠戦では信長から兜を貰ったほどの殊勲者。

甲州攻めでは先鋒・軍監的な立場で信忠麾下の兵を巧く動かす。戦後その功績で甲州一国と信濃諏訪郡を恩賞に貰う。だが本能寺の変に武田の旧臣が蜂起、二千の兵を率いて戦うが戦死。享年五十六。

佐久間信盛 さくまのぶもり

享禄元年～天正十年(一五二八～八二)

譜代。尾張時代から柴田勝家とともに重用された。三方ヶ原合戦では平手政秀の子汎秀(戦死)らと家康の援軍として赴いたが戦線を離脱。のち、石山本願寺包囲の主将。が、空しく五か年を送ったことから十九条の折檻状を信長から突きつけられ、高野山から熊野山中を放浪して十津川で歿したという。林通勝同様、古い世の中(室町期)の生活態度を捨て切れなかった男の末路であるらしい。享年五十五。

飯尾尚清 いいおなおきよ

享禄元年～天正十九年(一五二八～九一)

直臣。黒母衣衆。名は茂助でもいい。桶狭間戦では鷲津砦の守将。天正二年の長島攻めでは先鋒。本能寺変後は信雄に仕えた。

明智光秀 あけちみつひで

享禄元年～天正十年(一五二八～八二)

対丹波・丹後国衆の抑えとして、山陰方面



佐久間信盛の墓(奈良県吉野郡十津川村) 織田信秀に仕え、信長の家督相続を支持して信任を得、数々の合戦に戦功をあげたが、石山本願寺攻めの不手際を責められて追放された。



大高城城内　松平元康（徳川家康）は大高城にいたが、今川義元の戦死の報がどうしても信じられず何度も桶狭間に使者を送って確かめ、ようやく納得したという。

軍の司令官だった。しかし、本能寺に主人信長を急襲して自刃せしめ、三日天下の名を残した。

逆順二門ナク大道心源ニ徹ス
五十五年ノ夢覚メ来タッテ一元ニ帰ス

反逆だとか忠順だとかはもともとはないといった言い訳がましい、ある意味では最後まで良心の呵責に苦しんだような心の挟さ小ささが見える。

鉄砲は名人級。兵法にも達していた。歌道茶の湯なども群を抜いていた。

信長に仕えたのは三十九歳ころか。六年目には坂本城主。八年目には三十二万石。只者でないことは確かだ。実力もそうだが何か信長と通ずるものがあったはずだ。おそらくこれは光秀が長年の流浪生活から汲み取った合理主義であったろう。それはいいのだが、旧社会である室町期の教養・生活態度を振り回す光秀の態度が信長との乖離(かいり)をもたらす。

信長が革命家であり、光秀はしだいに反革命家としての姿を露にし、結局本能寺の変に繋がっていく。享年五十五。

細川藤孝　ほそかわふじたか
天文三年～慶長十五年（一五三四～一六一〇）

「学問は広く学べ。乞食の袋のように何もかにも蓄えているようにせよ。これが博学多識のもとだ。その中から取捨選択せよ」

歌道では時の天皇も重視されていたほどだが武将だ。牛車と正面衝突しそうになった時、角を両手に取り押し戻したことがある。

はじめ、足利義輝・義昭に仕え、天正元年義昭の将軍就任に奔走、信長に頼ったことから信長との縁ができた。義昭、信長の断交で信長に仕えた。子の忠興が光秀の娘を娶ってから明智軍の与力となった。本能寺の変では光秀の誘いを断り、髻を切って信長への弔意を示した。享年七十七。

蒲生賢秀　がもうかたひで
天文三年～天正十二年（一五三四～八四）

近江の守護職佐々木（六角氏）父子に仕えていた日野の城主。やがて信長の上洛。佐々木は逃げた。が、蒲生は佐々木に義理堅く籠城した。蒲生は伊勢の神戸友盛と姻戚関係にあった。で、信長は神戸に頼んだ。これでやっと開城。織田に仕えるようになる。その時人質に出したのが後の氏郷だ。これがえらく優れていたため信長は娘の冬姫をめあわせたくらいだ。本能寺の変後、この親子が信長夫人他を保護する手際は際立つ。とくに賢秀の義理堅さは見事なものがあった。氏郷はのち会津若松四十二万石。遠くにいたのでは天下が望めないとぼやいたので有名。享年は賢秀五十一、氏郷が四十。

＊



丹羽長秀　　細川藤孝

蜂屋頼隆　はちやよりたか
天文三年～天正十七年（一五三四～八九）

美濃の人。土岐氏・斎藤氏を経て信長に属した。黒母衣衆。戦歴は古く、近江・愛知郡肥田城主となり、滝川一益、丹羽長秀らと荒木攻めに加わり、戦後処理までやっている。佐久間追放後は岸和田城も預かっていた。本能寺の変時には信孝に従っていた。後、秀吉に属し、侍従。羽柴姓も称し得た。享年五十六。

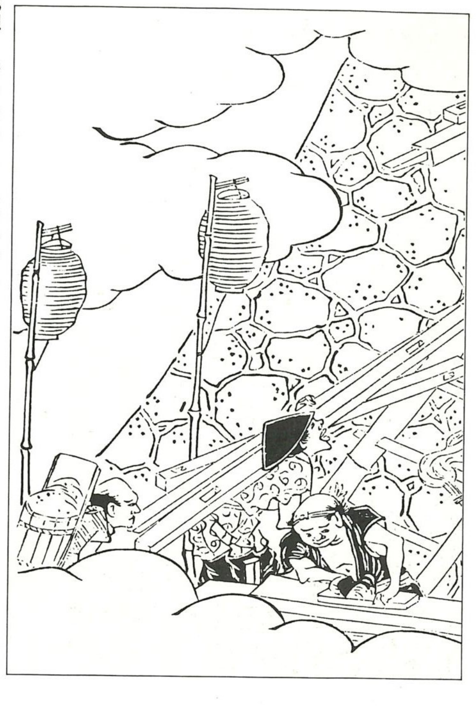
丹羽長秀　にわながひで
天文四年～天正十三年（一五三五～八五）

「木綿藤吉、米五郎左、掛れ柴田に退き佐久間」。藤吉は秀吉。五郎左は長秀。木綿や米は日常の必需品だ。

十五歳で信長に近侍した誠実・温厚肌の武将。諸戦に参加。天正元年、佐和山で大船建造の奉行も勤めた。安土築城でも総奉行。本能寺の変では大坂にいた。信孝の側役だった。本京都へはひとまたぎである。みすみす主君の仇を目の前にしていながら、機を逸したところに武将としての弱さ、政治家としての無力さも感じられる。これが秀吉べったりというその後の彼の進路を決定づける。勝家歿落後、北の庄城主。鬱屈が昂じ病死を嫌ったのか、腹中の癌種を自己肉体の敵とみたのか、短刀でえぐり出し、二日後に死ぬ。享年五十一。

荒木村重　あらきむらしげ
天文四年～天正十四年（一五三五～八六）

摂津の豪族池田氏の被官だったが上洛した信長に池田氏共々仕えた。剛強な人物だったらしい。器量を認められ、摂津一国を任される。伊丹城を改造有岡城と改称する。それはどうでも、内容が規模雄大の一語に尽きた。





墨俣城碑　秀吉の考えた速成築城法とは、予め建築資材を寸法にあわせて用意しておき、短時間で組上げるといったもので、今日でいうブロック建築法であった。

これは惣構えといい、のちの大坂城がこれだ。つまり武士の居城と庶民の住む城下町を一緒にしたもの。ぐるりに城壁を廻らした中国式の城・都市と同じだった。宣教師ルイス・フロイスが見学し、驚嘆した記録が残っている。のち、逆心ありと疑われて攻められたが、一年近く持ちこたえた理由である。

秀吉や、黒田孝高の説得にも応じなかったが、〝窮鳥懐に入ればこれを殺さず〟といって二人とも、殺せば殺せたがそれをしなかった。秀吉は帰し孝高は監禁するにとどめた。ただし、一人城を出た後の者達がひどい目にあった。残酷悲惨の地獄図絵が現出した。これは戦国武将の宿命というものなのだろうか。利休七哲の一人。享年五十二。

羽柴秀吉　はしばひでよし

天文五年〜慶長三年（一五三六〜九八）

スケールの大きい人物の評価は、それ相当の人物にやって貰うのが一番適している。

「戦国の英雄秀吉のやったあとを見ると、人を欺いたようにもみえ、色を好んだようにも見える。しかし、それだけのことなら、一国一城も支えることはできなかっただろう」

明治・大正・昭和の巨人頭山満の言葉である。一説では、スペインやポルトガルが隣の大陸明を征服しようとしていたのを、秀吉が察知、彼らの野望を挫くため明の都である北京を手にいれ、これを日本の帝都とし、インドにいたるまで制覇しようと計画した。本当なら気宇壮大というべきであろう。

少年時代、今川家の松下某に仕え、のち信長麾下に入り、機略縦横、戦功を重ねて累進、羽柴を称した。丹羽長秀の羽、柴田勝家の柴を合わせたもの。二人の大物にあやかろうとしたのだが、やがて二人を乗越えた。

柴田勝家が北陸方面軍司令官だった時、秀吉は対毛利戦の中国方面司令官だ。この段階では同格だったが、本能寺の変が起きると、



豊臣秀吉像（滋賀県長浜市・長浜城公園）「武功夜話」によれば、信長がたびたび出入りした生駒屋敷には蜂須賀小六はじめ諸国の浪人がたむろしていて、そこで藤吉郎時代の秀吉と出会ったという。

高松城の水攻めを中止し、毛利氏と講和、電撃的な〝中国大返し〟を敢行、山崎に光秀軍を破って主君の仇を討ち、天下人としての一歩を踏み出した。やがて勝家を滅ぼし、丹羽長秀までその麾下に組入れてしまう。

天下人への歩みは早くなり、織田の一族はあってなきが如くとなる。そこで信長の次男信雄が、徳川家康に救援を乞うことから起きるのが小牧・長久手の戦い。

秀吉が新手の軍勢二万を率いて向かう先には家康がいた。これを対岸で察知した家康側の本多忠勝は、千にも満たない軍勢を以て牽制作戦を挑んだ。秀吉は本多を知らない。敵ながら天晴れな男は誰だ、と側の者に聞く。

「本多平八に候」と答えたのが稲葉一鉄だ。

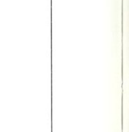
秀吉は涙を浮かべ、

「見よ、千にも満たぬ軍勢で、わが旗本の邪魔をし、主人家康に陣を立て直させ、十分な戦をさせるつもりだ。見事な男だ。あの男、絶対に殺してはならぬ。一筋の矢も一発の弾も撃ってはならぬ」

自分に運があるなら平八のような男が百人いたところでびくともしない。平八を撃つな撃つなと声を嗄らしたのだった。

秀吉の偉いのはここである。

戦局は秀吉に不利と見えたが和睦。しかしこれは表面ではなかったか。政略面では家康の上をいっていた。次いで、四国・九州攻め。それも、戦わないで勝つという行き方が原則


佐々成政

豊臣秀吉

だった。小田原の北条攻めもこの手だったし、独眼竜政宗をくだしたのも同じであろう。この時家康さえ、長年の根拠地駿河・三河・遠江から江戸に移らされている。

小田原戦のあと、鎌倉の八幡宮に遊んだ秀吉は、頼朝の像に向かい、

「腕一本で天下を取ったのは汝と私のみだが汝には源氏という名族の伝統があった。しかし私は一介の小者から今日の地位を得た」

自力で来たんだよ、というわけである。

確かに、日本の中央集権は豊臣氏にいたって行なわれた。だが、文禄慶長の役となると、天は彼から顔を背け始める。虫の息になった時には横綱でも人足にはかなわない。最後はいかにも哀れだった。

近世日本国民史を書いた徳富蘇峰が面白いことをいっている。秀吉は大きな情の固まりだ、と。

一切の過失や欠点、罪悪の暴露にかかわらず、なお彼は我々をして愛着せしめるだけの魔力を有している。こういうところから考えると、いくら割り引いても蓋世の英雄だった。ところが、その彼も、運命の前にはまことに小さい存在でしかなかった。

そんなところに深い妙味があるではないかというのである。歿年六十三。

*

佐々成政 さっさなりまさ

天文五年～天正十六年（一五三六～八八）

美濃の蝮といわれた斎藤道三が死に、道三殺しの倅義龍も病死、その子龍興の代、信長は美濃の軽海で戦う。

成政が斎藤側の豪傑稲葉又右衛門に槍をつけた。そこへ前田利家が来合わせ、稲葉を突き倒した。力を合わせて打ち取った。「この手柄貴公だ。首を取られよ」と佐々。だが利家は「いや貴公こそ最初に槍をつけたではないか」といった。言い争いだ。来合わせたのが柴田勝家である。「よし貰った」と首を取り、三人で信長の前に出た時、逐一説明した。信長は三人とも褒めたという。

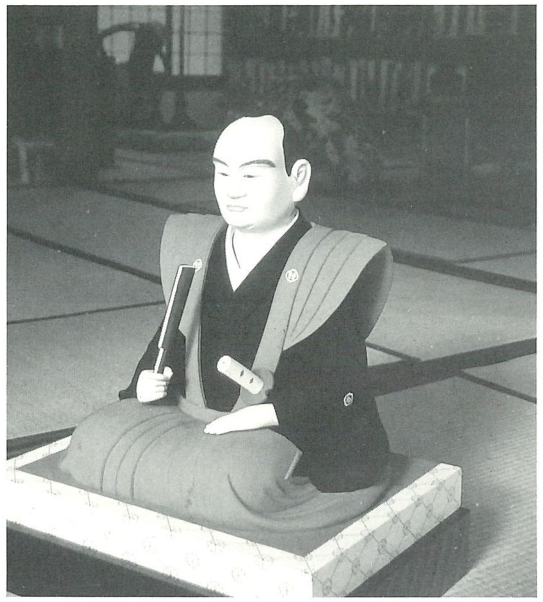
この様子を見ると、どうも感じは、利家と成政との年頃が同年代なのである。

勝家この時四十一歳。利家は二十四歳。さて成政は?。歿年が五十三・七十三と二説ある。佐々成政軍記の五十三で行くとこの時二十七である。武家事紀や武徳編年集成の七十三歳説で行くとこの時四十七歳になってしまう。勝家よりも年長になってしまうのである。どうもここは二十代である方が自然だ。

父の名は余語（本姓菅原）盛政。信長の父信秀に仕えた。信長公記によると兄二人は小豆坂七本槍のなかに入っていた。その頃成政は十三歳。はじめの名は内蔵介である。

佐々成政と改めるのは信長の命による。天




戸部新左衛門像

戸部新左衛門政直の墓（名古屋市南区戸部町）　笠寺城の戸部新左衛門は今川方に属していたが、信長の謀略にかかり、弘治三年五月、義元にその去就を疑われて殺害された。

戸部新左衛門の怨霊

笠寺城址は名古屋市南区戸部町にある。天文・弘治のころ、ここの城主は戸部新左衛門政直（豊政）という小豪であった。

西には織田氏がひかえ、東には大国・今川氏の進出があった。強者の間にはさまれながら、かの竹千代（家康）と織田信広との人質交換の仲介をする（『甲陽軍鑑』による）など、独立した一勢力であった。

やがてかれは〝尾張の大うつけ〟の信長よりも、すでに鳴海、大高まで進出していた今川方についた。両者の勢力関係からすれば、やむない選択であろう。

信長は、智勇兼備と誉れ高い戸部新左衛門の存在を危険視し、これを排除しようと謀略をもちいた。まず、新左衛門の筆跡を盗みだし、それを真似て偽手紙を書かせた。

内容は『真書太閤記』や『絵本太閤記』など、さまざまに潤色されているが、「鳴海城の山口左馬介を笠寺におびき寄せて殺害しますから、これを機会に織田殿は鳴海城を取られよ。そうすれば近辺の諸豪はみなお味方になり、今川方が攻めて来ても恐れることはありません」というもので、宿老の柴田勝家を宛名にした。

この手紙を手に入れた義元は筆跡をみると、確かに新左衛門のものに間違いはない。直ちにその誅殺を命じた。

新左衛門の首が駿府へ届けられると、今川家の諸将は「なんと早まったことを。新左衛門は当家にとって大事な味方、真偽の評定を一度もおこなわずに成敗なされるとは」と慨嘆したという。ときに弘治三年五月のことであった。

それから三年後の永禄三年五月、今川義元は桶狭間に信長の襲撃をうけて戦死した。この義元の不慮の死を、笠寺城の近辺の人々は「非業に殺された戸部新左衛門のたたりであろう」と噂した。

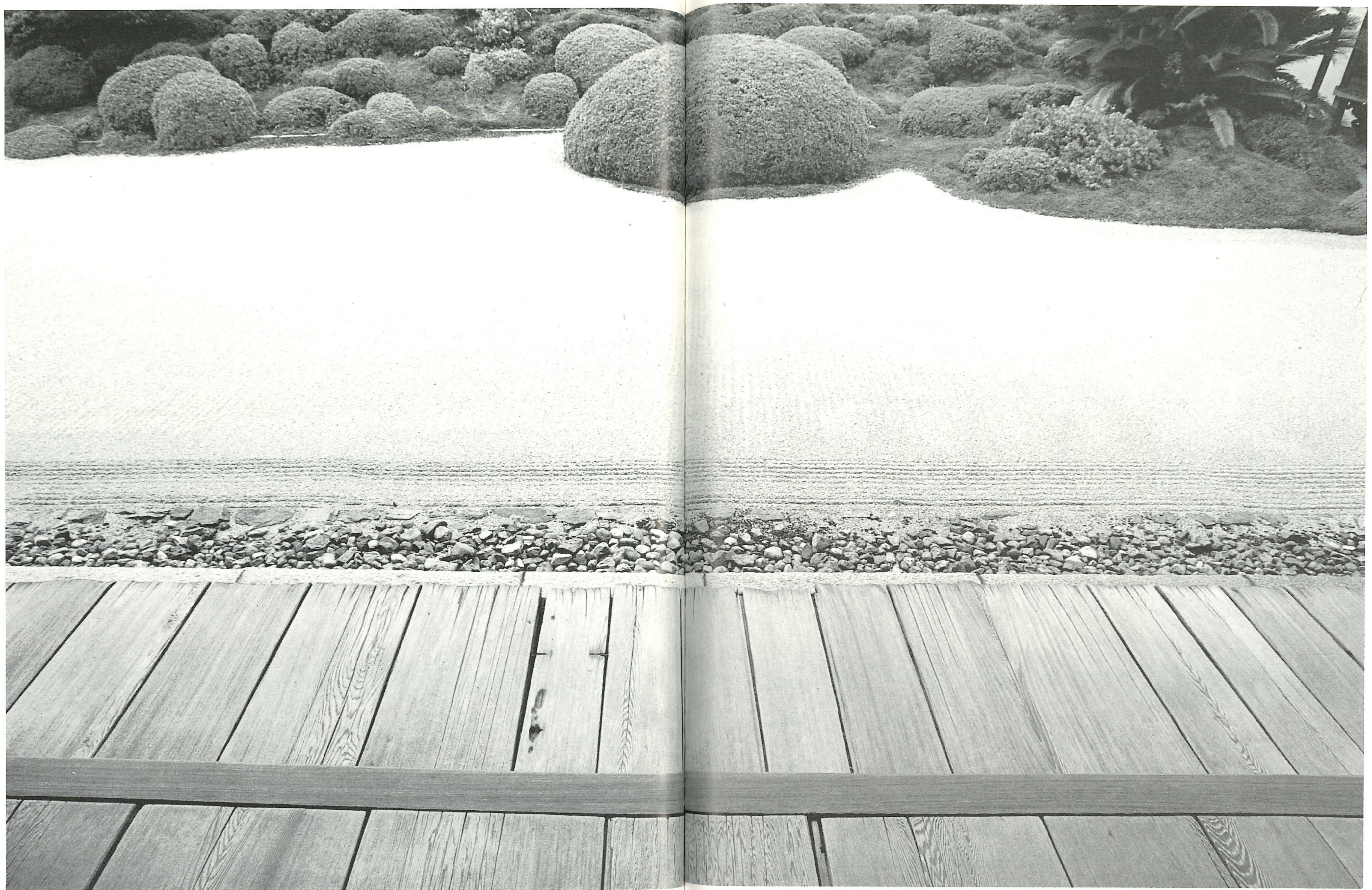
が、新左衛門の怨霊はこれだけではすまなかった。以後、笠寺周辺にはさまざまな不吉な出来事がおこった。たたりを恐れた地元の人々は、毎年五月の一日を戸部新左衛門の供養日と定め、その怨霊を慰めてきた。今日でも、その供養は「戸部祭り」として続いており、近くの菩提寺長楽寺には新左衛門の像も祭祀されている。

ところで、本誌に執筆いただいている作家の戸部新十郎氏は、まさしくこの戸部新左衛門の子孫にあたる。

新左衛門を誅殺したことを家臣に諌められた義元は、新左衛門の子新十郎の行方を追及しなかった。新十郎はその後どういう経緯をたどったのか明らかではないが、前田利家が能登七尾城に入った頃、能登に居住。代々、郷士として続き、昭和初期に民政党の代議士戸部良祐氏がでた。この良祐氏が長男に由緒ある「新十郎」の名を付けたのである。

だから、戸部新十郎氏は毎年五月に行われる「戸部祭り」には欠かさず出席し、非業の最期をとげた先祖・戸部新左衛門の霊を慰めている。

（今井敏夫）



一休寺庭園

正二年正月、信長は岐阜城に功臣をあつめ、宴を開いた。譜代、馬廻り、側近ばかりである。進み出た成政が、現状に満足することなく、今後とも国内平定に努力され、窮民をお救いありたい。古書にいわく、四海をもって家となし、億兆をもってわが子となすといいます、と言った。すると信長は、

「成政よく言ったぞ」

このとき成政は三十九歳だ。翌年に来るのが成政のハイライト。

長篠の戦いで、銃卒を率いての奮戦だ。野戦における織田勢が、これで当時一流の精強軍団にのしあがるのである。佐々鉄砲隊の活躍は金ヶ崎の退き陣でもあった。もっともこれは、退き陣前の天筒山攻略のとき。佐々成政の鉄砲隊は四百有余の鉄砲をもって「討ち取る首一千有余」という記録が武功夜話に残っている。

このときの殿りは秀吉。これを援護したのがやはり佐々の鉄砲隊だった。待ち伏せて、追撃する越前勢・朝倉勢を脅かした功績はまことに大きい。

そういうことから長篠ではより規模が拡大されただろう。このあと、越中の半分である十万石の城主となり、府中城に入る。やがて越中守護として富山（砥山）城主。十年、国境の魚津城を抜いたあと、本能寺の変。

ときに成政は、上杉の押さえだから弔い合戦が出来ない。賤ヶ岳戦でも同様だ。勝家は敗れた。秀吉勢が富山城に迫った。心ならずも彼は降る。そのため本領は安堵された。

やがて、小牧・長久手の戦。

成政は考え、すぐ実行に移した。家康と信雄の説得だった。根拠がある。武田信玄と上杉謙信が団結したら信長は倒せたろう。同様に、今日の上杉はこの佐々成政であり、今日の信玄は家康に該当する。この二者が秀吉に当たれば打倒することは不可能ではない、というのだ。

そのため彼が決行したのが日本アルプスの峻険、冬の立山越え。有名な〝さらさら越え〟だ。時は真冬である。信長の旧恩を忘れない一途さが燦然と光っていた。新暦だと十二月二十四日出発。浜松着が一月四日。

筋を通して信雄を救われたのが有難いと彼は信長から貰った脇差しを家康に贈り、起請文を取りかわした。さらに成政は尾張に向かい、信雄に会い、再び〝さらさら越え〟をやって富山に戻った。驚いた男である。この時点で家康も信雄も約束を果たさない。彼は人心の変わり易さを見通していたかもしれない。それが次の一首だ。

かくばかり変はり果てたる世の中に知らで
や雪の白く降るらん

戻ると秀吉軍の先鋒である前田利家との戦いである。年が明けて天正十三年、成政は秀吉の大軍に囲まれる。衆寡敵せず頭を丸めて降った。浅野長政が、「謀反人佐々成政ごときに会われる要はない」と秀吉に進言した。秀吉陣で、浅野長政を見た成政は叱りつけた。

「良く聴け。秀吉は只今までは肩を並べてきた同輩である。この成政とても信長公なきあとは天下を心掛けた。わしが誰に謀反をしたというのか。武道のことなどお主ごときにわかってたまるか」

降っても意気軒昂だった。織田軍団黒母衣衆筆頭の気概は衰えていない。

二年後、肥後一国を領する。当時肥後は五十二のお国侍がおり、国柄もあってそれぞれの独立心が強い。そこへ成政の田畑調査だ。大騒ぎになった。あらぬ噂も飛んだ。結局佐々は武力で解決せざるを得なくなった。これが秀吉の方針に反したとし、死につながる。最期は尼崎の法華寺。腹十文字に掻き切り、臓腑を掴み出して絶息した。剛勇を謳われた成政の死に方はまさに壮烈を極めた。

「成政驍勇ニシテ厚ク義ヲ守ル故世ニコレヲ憐惜ス。男子ナク女子アリ九条太閤幸家公ニ嫁スコレ大猷公ノ御台所（ノチ中丸殿ト号ス）ノ母堂トイフ」のは武徳編年集成。大猷公とは徳川家光だ。享年五十三。

池田恒興　いけだつねおき

天文五年〜天正十二年（一五三六〜八四）

尾張の人。先祖は摂津池田。母の養徳院は信長の乳母だった人。童名勝三郎。信輝ともいう説があるが不確かのようである。こんな縁から十歳のとき信長の遊び相手として出仕

した。二十歳のとき、信長が清洲の城主織田彦五郎と海津で戦った。第一番に首を取ったのが恒興。二年後、信長の弟信行が謀反した。ところが三人とも仕損じた。これを廊下で刺殺したのが恒興である。

現代人に不思議なのは、このあとで信行の妻を、恒興が夫人としていることだ。信長が仲立ちをしたことになっている。

浮野・桶狭間・姉川と戦い、天正年間に入って長篠戦に参加、大坂天王寺合戦、摂津鴻の池合戦、六年には荒木村重を攻め、八年にはその一族志摩守の籠った花隅城を攻めた。

この攻略には長男之助、二男輝政三人が戦った。このときの奮戦ぶりで信長は感状を出し、長く摂津諸国を治めよといっている。それだけでなく、信長は嫡男信忠・次男信雄・三男信孝は池田親子を鏡にすべきであるとさえ激賞していた。

やがて起きるのが本能寺の変。秀吉は〝中国大返し〟で尼崎に達する。恒興はここで秀吉と会った。二人は頭を丸めた。恒興が勝入と称するのはこれからである。

さらに秀吉は自分の養子として輝政を恒興から貰った。また秀吉は自分の甥である秀次を恒興の婿ともしている。縁固めである。なにしろ恒興は信長と乳兄弟だ。これで秀吉は信長ともぐんと近くなる理屈ではないか。秀吉の政治性の豊かさである。



安土城石垣

明智は山崎の一戦で敗れ、やがて、信長の後継ぎを決める清洲会議となる。勝入は、柴田勝家、秀吉、丹羽長秀らとともに、織田四宿老の一人として制法決定の列に加わる。

賤ヶ岳戦では秀吉との縁が強いから秀吉方だ。このときの功績で美濃大垣十三万石。次の試練が小牧・長久手の戦い。池田陣営へは両方から誘いがかかった。信雄・家康は自分の方へつくと計算していた。秀吉も粘り強く工作した。

勝入は実際のところ困惑した。一方は先君の遺児だ。一方は先君の愛臣で親戚筋でもある。ハムレットの心境（右せんか左せんか）に近い。だが、信長と信雄を比べたらまるで月とすっぽんだと思ってはいた。それに秀吉の提示していた美濃・尾張の領有もという甘い手の誘惑もあった。遂に秀吉方についた。森長可も娘婿であるから当然つき従った。と、きまると俄然、動きを開始、犬山城をあっという間に攻略してしまう。かつて、城主だったことがあったため、地形や事情を良く知っていたためでもあった。

これで焦ったのが娘婿の森である。金山から羽黒に出、前進しようとするところを家康勢に察知された。要地の小牧山を先取りしようとしたのである。兵力を集中しているうちに徳川方の奇襲にあった。森の勇み足は失敗した。

望見した勝入は森の名誉挽回を策した。家

康の本拠三河ががら空きとみ、本拠攪乱を考えたのである。秀吉ははじめ危ぶんだが、秀次までも従軍を切望したため遂に許した。一万六千の軍勢が南下を開始した。家康はまたもこれを察知し、途中に榊原康政勢とこれを挟撃した。勝入、之助、森長可は乱戦中に戦死した。勝入はこのとき四十九。輝政も死戦を希望したが伴大膳の強引な手段によって危ないところを命だけは落とさずに済んだ。

このとき弔い合戦で輝政が死んでいたら、関ヶ原で東軍につき、戦後、播磨姫路五十二万石の大大名は誕生しなかったわけである。

前田利家 まえだとしいえ

天文七年～慶長四年（一五三八～九九）

加賀百万石の藩祖だ。尾張海東郡荒子城に生まれた。干支が戌年だったことから犬千代と名づけられた。十四歳で信長に仕えた。譜代・直臣である。元服のとき孫四郎。次いで又左衛門利家。初陣は十七歳で、信長は「お犬の肝には毛が生えている」といったくらいだ。

弘治二年。信長の庶兄信広が信長の異腹の弟信行と通じ、信長の清洲城を攻めたことがある。渦中、信行の家来が放った矢が利家の右眼の下に立った。これをそのまま、槍を奮って矢を放った敵を突き伏せた。この功績で禄百貫（約二百五十石）の加増を受けた。出



安土城参道

仕時は五十貫。ここまでは良かったがこの後信長の給仕役であった十阿弥を斬ったのを信長に咎められて浪人した

桶狭間戦は浪人中のとき。駆けつけて奮戦した。だが赦してもらえなかった。翌年、信長は斎藤義龍を森部に攻めた。この時も駆けつけて奮戦した。首二級を取った一つが斎藤方の豪傑首取足立だったせいか、やっと赦された。四百五十貫の地を貰うことが出来た。しかもこの年、赤母衣を用いることも許された。これは武功をあげた者に限られるというのが織田家のしきたりだった。利家は「まだ若年でありますから」と辞退した。が、信長は「年は若いが武功の方は十分である。遠慮するな」と言って授けた。

三十歳になった永禄十二年、信長の命令で荒子城主だった兄利久の後を継いだ。利久はこの時期、武将としては、温和に過ぎたのかもしれない。姉川の戦いは三年後。朝倉・石山本願寺攻めと続く。石山攻めでは殿りを承り勇戦した。総崩れになるのを食い止める。

「日本無双の槍、天下一の勇者」

と信長から激賞されたのはこのときだ。こういう武功の者だし若い。気負いや大言壮語もあったらしい。だが、その大言にそむかぬぞという内省的なところが、彼を追々篤実・誠実な人間に成長させていった。かぶき者・異風ばりの面も持っていたようだ。どんな遠くからでも一見彼とわかったというから、い



桶狭間、今川義元公本陣跡



前田利家

わゆる派手でもあったのであろう。

三十八歳のとき、越前府中（武生）でおよそ三万三千石。天正三年である。同九年には能登一国を領した七尾城主。信長歿後は、柴田勝家の与力だったこともあり、形の上では秀吉と対立的な立場に立った。が、積極的には動いてない。

以後、功績を重ねて加賀百万石へ。秀吉政権下では五大老の一人。ここまで来る人物である。いや、ずっと後代の明治維新まで連綿三百年も続く礎を築いたのだ。それなりの苦心努力があったことは当然であろう。それが生活面の色々な処に現れてくる。

福島正則から、見事な鯉が二尾送られてきた。家来の某に礼状を書かせた。これがえらく簡単だった。利家は首を振り、

「故実にも正式な礼状の書き方があるはず。このようなときには、先様を敬い、誠に心尽くしのものを忝し、と書くものである。とくに、目下の者には丁重に書かなければいけない。もし簡単だと、自分はあの方と比べてまだこれほどの差があるのかとがっかりするものだ。心しなければいけない」

というのである。また、戦場に出る時も携帯用の小型のそろばんを持っていたという伝説的な話がある。これなどは彼が理財を無視してなかったという象徴的なことなのであろう。この点は夫人のお松、のち芳春院の内助が大いにあったに違いない。

佐々成政が、利家方の末森城を大軍で囲んだ時、ふだん「決断は我一人」と言っていたように、すぐに、七百の手兵を率いて出発した。先君信長の桶狭間戦がそうであった。

ときにお松夫人。金銀入りの袋を持ち出し

「良きご家来衆を召し抱えるようお勧めしたるはこの日のため。この金銀たちにも……」

「うむ、手柄を立てさせよとか……」

という話が残るのもうなずける。

持つべきものは良き女房殿である。そのお松さんが最期の時が迫った利家に言った。

「お若いときから沢山の人を殺されました。何と罪作りの多いこと。念仏を……」

どうぞと言ったらしい。お松の手には経帷子までである。横眼で睨み利家は、

「人殺しは乱世に生まれた者の定めだ。合戦では致し方はない。わしは不義非道で殺したことは一度もない。地獄になんぞ落ちるものか。間違って地獄が目の前の三途の川までいったなら、先にいっていた家来どもを引き連れ、閻魔大王を征伐してくれるわ。つまらん心配をするな」

秀吉に頼まれた遺児秀頼のことを案じながら死んだ。信義を守ること人一倍強く、篤実だった人のこれが最期だ。享年六十二歳。

九鬼嘉隆 くきよしたか

天文十一年〜慶長五年（一五四二〜一六〇〇）

熊野灘の潮煙の中から奔騰した海賊大将である。先祖は九鬼党。伊勢の国司北畠具教と土豪の連合軍に攻められ、伊勢・安濃津方面に追われ、さらに尾張へ。滝川一益を知り、その縁で信長につながった。永禄十二年、信長が北畠氏を攻めた。九鬼海賊を率い、先鋒となって奮戦したのが認められた。やがて九鬼氏を追った土豪軍に対し復讐戦を展開、志摩一国を与えられる。

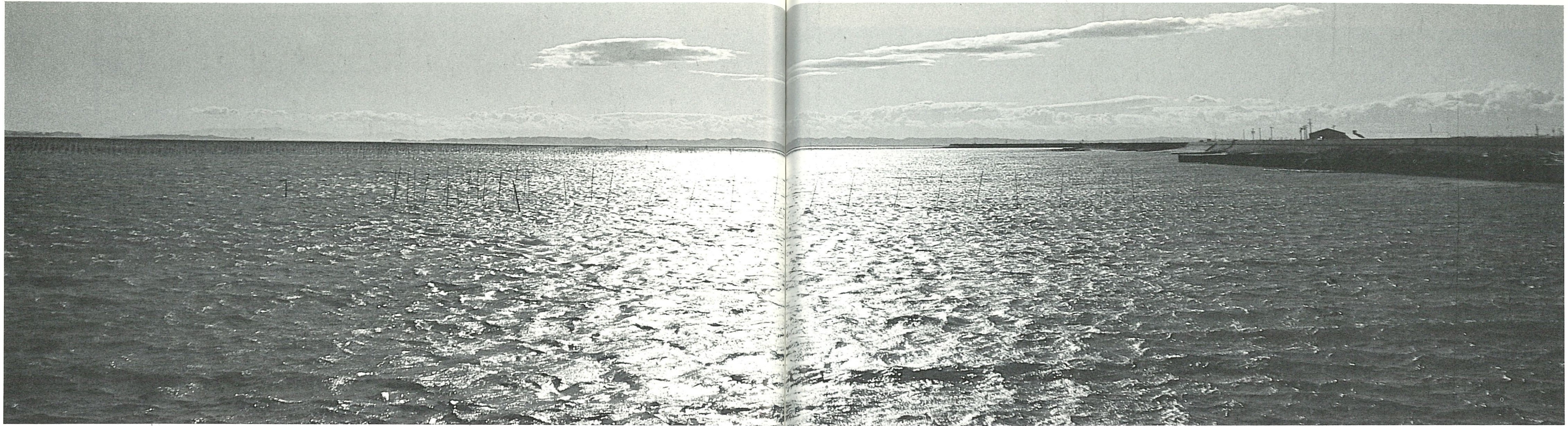
信長の長島一揆掃討戦に九鬼水軍は十余安宅船を率い、難攻不落といわれた篠橋や大島砦の塀や櫓を大鉄砲で撃破、一揆軍壊滅のきっかけをつくった。が、長島合戦は泥沼戦となり、大坂の石山本願寺戦につながってゆく。当時、石山本願寺に立て籠っていた宗徒勢は中国地方の雄、毛利氏と固く結ばれていた。毛利には強力な水軍があった。さらに、石山を支えて強力な働きをしたのが雑賀の一向海賊衆。

毛利は、山陽から瀬戸内の制海権を握り、雑賀は紀州水道から大坂湾を守って強力だった。両勢の兵站線を叩くことが石山本願寺の本拠を滅ぼすことに繋がる。織田水軍イコール九鬼水軍の使命はこれ。

信長が本願寺攻撃を発令するのは天正六年正月。嘉隆は伊勢の大湊で志摩・熊野の船大工を総動員し、堺で学んだ異国船の利点を取り入れた鉄貼り軍船の建造に余念がない。建造したのは六隻、滝川一益も一隻建造していた。ともに六月下旬の完成。

やがて約五十隻の安宅船や関船に護衛されて伊勢の大湊を出港した。目的地は堺。日本最初の観艦式だ。公家・大名・豪商・宣教師が招待された大イベントである。「我に強力な九鬼水軍あり」

と猛宣伝だ。信長の合理主義は遺憾なく発



吉良大浜

揮された。七隻の軍船が物凄い。ヨーロッパに鋼鉄張りの軍船が出現するのは一八五二年それより約三百年も早い。招待者の一人イエズス会の宣教師オルガンチノは、

「日本で最も大きく華麗なもの。わがポルトガル王国の軍艦に良く似ている。日本でこのようなものが出来たことは大きな驚き」

と、故国の僧院に送った。南都興福寺の多聞院英俊も、多聞院日記の中に「横七間（一二・六メートル）、縦一二・三間（一三間は二三・四メートル）モコレアリ、鉄ノ船ナリ。鉄砲通ラヌ用意……」

驚きの余り人数五千ほどと書いたのはご愛敬だ。鉄砲通らぬ用意とは、二・五ミリの鉄板でびっしり張りつめられていたから。装甲船なのである。大砲も三門、多くの鉄砲も外に突き出ていてはり鼠だ。

天正四年、本願寺に物質を運び込む毛利水軍を撃滅しようと、織田の水軍約三百が木津川の河口で待ち受けた。この海戦は、遥かに毛利の方が上手だった。毛利方は銅製丸に火薬を込め、火をつけて織田の軍船に放り込んだ。投げ炮烙だ。水鉄砲で油を注ぐ疾舟（はや）まで漕ぎ縫っていった。そこへ火矢を射込んだ。織田の軍船は火の海となり、散々な目に遭った。

織田方にも投げ炮烙や火矢はあった。ところが、毛利船団は竹や板で上部が楕円形に囲われていた。織田の放った火矢や炮烙は滑って海に呑まれてしまった。これで当時の織田方の淡輪水軍の兵船約三百が損害を被っていたのだった。完全な負けであった。

「前車の轍を踏むな」これを合言葉に出来たのが九鬼水軍の鉄張りの軍船だ。七隻の巨船が熊の浦にさしかかったのは天正六年九月二十九日。待ち構えていたのが雑賀水軍。

「図体ばかり大きいがなんじゃい」とばかり雑賀一党は群がって火矢を飛ばした。七隻の駆け引きはのろまだ。雑賀水軍のため袋の鼠のようになった。だが、やがて巨船が火を吹いた。巨獣の咆哮だ。

百万編のお念仏も織田の砲丸にはかなわない。殷々たる砲声。濛々と湧く煙。閃光と砲丸が熊の灘を覆った。雑賀船は四散した。

七隻の鉄張り軍船が、木津川沖で第二回戦を戦うのは十一月六日。毛利水軍は、熊の浦での雑賀水軍の敗戦を知っていた。だが、六百余艘の精鋭を選りすぐって、九鬼水軍の固める大坂湾頭を突破しようとした。

毛利水軍は老舗の面目にかけて火矢と炮烙を巨船に放った。だが、勝手が違った。すべて、はじき飛ばされてしまう。

機を見て、全船突入せよ、と嘉隆は御幣の船采配を振った。海が動き出した。毛利水軍は波の山上から谷底へと落下し始めた。火矢や炮烙を投げるどころではなくなった。

思い出したようにドーン、ドーンと大砲をぶっ放したからさらに海は荒れる。毛利水軍は、渦と波濤と火砲に翻弄され散々な目に遭った。石山本願寺はこれで完全に孤立した。

九鬼嘉隆のハイライトである。嘉隆はこれで志摩に摂津他を合わせて三万五千石の大名となる。信長が歿してのち、嘉隆は秀吉に従い、文禄の役では朝鮮水軍にやぶれ、関ケ原では西軍についたため潜伏、のち自刃に追い込まれた。ただ、子の守隆は東軍についたため、この方は五万五千石を確保していた。嘉隆の享年は五十九。

竹中重治　たけなかしげはる

天文十三年～天正七年（一五四四～七九）

軍師諸葛孔明が五丈原頭に病歿したとき、劉備玄徳は天を仰いで嘆いた。わが秀吉は半兵衛重治の死を限りなく悲しんだ。昔楠木、今竹中といわれたほどであったのだから当然だ。美濃菩提寺城の生まれ。斎藤龍興に仕えていたが、重治を優れた人物と見ていない。だんだんと、――深沈・重厚の偉丈夫。

として成長し、この人が一人いれば万人が安心する、というほどになってゆく。よく「大賢ハ愚ノ如シ」という。

〈弱年の時は人みな鼻たらしといへり〉（武家事紀）である。もともと、智謀もすぐれ、遠くを見通す眼力も持っていた。だが、武道、兵法以外のことは関心がない。だから若い時は「なんと大様（おおよう）な、きっと大国



黒田孝高

の主人公のあとつぎにでも生まれればよかったに」と噂された。

「あいつ愚か者じゃな」ぐらいに龍興はみていた。侮る。家来どもも似る。ある日重治が下城のとき、矢倉下で、上から時ならぬ雨……いや小便の飛沫。下を通りかかる重治に侍どもがいたずらをしたのである。

まもなく舅の安藤伊賀守邸へ現れ、

「お屋形さま（龍興）にお恨みの筋がありますのでひと攻め仕りたい。ご加勢を」

安藤は止めた。重治は黙って帰った。稲葉山城には、当時弟の久作が人質に取られていた。そこで弟が病気になったので看病したいと侍六人を送り込んだ。夕刻になった。看護の人々に酒食を振る舞いたい、と重治自身九人の家来を連れ、長持に武具を入れて持ち込んだ。一室で支度し、夜番の斎藤飛騨守を血祭りにあげた。城中では何が起きたのか慌てふためく。その中を荒れ回った。龍興は命からがら脱出。小人数で城を乗っ取ってしまった。「美濃に竹中半兵衛重治あり」

諸国に聞こえていく。「その城をわしに寄越さんか」。信長だ。寄越せば美濃半国は汝に与えようともいったが重治は、言下に断った。これだけでも只者ではない。まもなく、舅の安藤が仲に入ったため龍興に返す。が、半年たつかたたないうちに信長に奪われてしまう。これが岐阜城である。永禄十年のことだというから重治二十四歳の時だ。十九歳の時、という説もある。

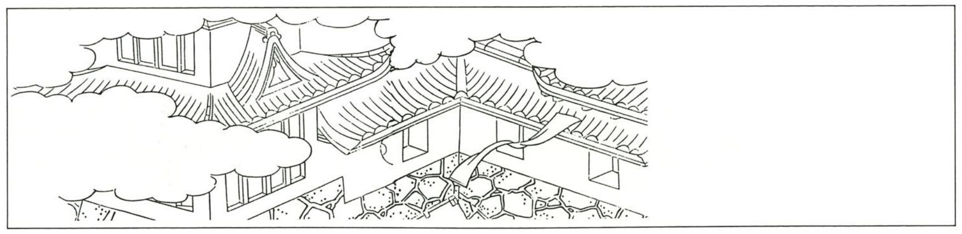
「元亀元年夏、信長の浅井朝倉攻め頃から織田氏に仕え、秀吉に従い」（日本英雄伝）

戦場での出立ちに風格がある。着物は青黄の綿服、筒袖。上に浅黄絲威しの鎧。具足はすべて馬革の裏が現れたもの。兜は一の谷の立物を打ってある。腰に佩いた太刀は名刀〃虎御前〃（元重）だ。これで、どのようなことがあろうとも、慌てず騒がず静々と馬を打たせてゆく。

〈ゆらり、ゆらりと打ち見えしなり〉とは甫庵太閤記である。「謀略ある人なれど一見婦人のようだ。先陣にのぞんでも、猛烈果敢には見えない。静まりかえっている。だが、重治が戦地に向かうごとに、兵はすでに勝った、と勇み立った」というのは常山紀談や名将言行録。



小谷城本丸跡



初期・後期と分ければ初期は重治が秀吉の右腕。後期は黒田孝高が受け持った。

重治が死ぬ三年前。秀吉が柴田勝家と衝突、北陸から戻り、小谷城に蟄居していた。信長の不興をかったためである。だが、秀吉は少しも謹慎せず、盛んに酒宴を開いて遊んでいた。幕僚が心配した。しかし重治は、「心配無用である。筑前殿もはや二十万石の大名だ。ここ小谷城は要害である。もし城門を厳と閉ざし、シン、と静まり返って謹慎などすれば、かえって、謀反の兆、とみられよう。この飲んで歌っているのが一番良い」

静かに笑った。

わが家の軒先を出た途端敵中に入ったと思えとも教えた。子の左京が幼い時、たまたま戦場の物語を重治がしていた。左京が中座、間もなく戻る。小便に立ったのである。

「戦陣話は教訓談だ。その最中に立つとは何事だ。聞きながらやれ。それで座敷が汚れてもわが家の誇りになるくらいのものだ」

叱声を放ったという。戦陣話につながるが、身分不相応な馬を買うなともいった。十両の馬が買えたら五両のにしておけ。戦場では馬を捨てて働く時もある。その時あとの五両があればまた買える。十両の馬に気を取られていては功名は立てられまい。馬に限らない。財宝などは塵・芥の心掛けが大事だ、と。惜しい人物が早死にしたものだ。が、その後は足萎えになった黒田孝高がバトンを受け継いだ。足萎えは土牢に閉じ込められていたためだ。信長は、帰還しない黒田が荒木に組したと思い、孝高の子長政を斬れと命じた。斬ったことにして保護したのが重治である。荒木の城が開城し、孝高が荒木に通じたのでなく閉じ込められていたとわかった時、信長は天を仰いで長政を斬ったことを悔いた。だが、長政は生きていた。信長は、重治の配慮に心の中で手を合わせた。竹中半兵衛とはそんな男であった。享年三十六。

万見重元　まんみしげもと

天文十八年～天正六年（一五四九～七八）

小姓。直臣。荒木村重を攻めた時、堀秀政



小谷城下の家老屋敷跡

らと鉄砲隊を率いて有岡城を攻めたが戦死。享年三十歳。

筒井順慶　つついじゅんけい

天文十八年～天正十二年（一五四九～八四）

奈良の人。成人後、興福寺で得度。多聞山城の松永久秀に逐われ、堺ほかに寓居。のち大和に戻り久秀に対抗した。久秀が信長に背いたとき信長に属し、久秀討ちの名分を得た。のち原田尚政のあとを受け、大和の守護。筒井城も回復した。織田信忠に従って久秀を滅ぼした。郡山城を預かり、本能寺の変では光秀の誘いに乗らず、出兵を控えた。信長の妹か娘を娶った形跡がある。小牧・長久手戦でも出陣。享年三十六。

堀秀政　ほりひでまさ

天文二十二年～天正十八年（一五五三～九〇）

はじめ菊千代、やがて久太郎。八歳の時に桶狭間の合戦があった。信長は二十七歳である。だがそれから三十年。のち徳川将軍家の剣術指南役となる柳生但馬守宗矩は、

〈秀政の卒せし時、高き人も賤き者も、惜しき人といひき。世の人、名人左衛門と名づく。天下の指南しても、越度（落ち度・失敗）あるまじき人なりといひき〉（藩翰譜）

本当の意味の総理大臣級だ。当時、秀政の主人秀吉は、小田原の北条氏を征服し、関東、奥羽の平定後は、秀政をこの方面のおさえに擬していた。

小田原城包囲の前哨戦は、三島の山中城攻め。秀政が攻めている。落城した時、脱出した落人が二、三十人づつ、幾群れも秀政の陣前を通る。兵は追い討ちをと色めき立った。秀政は止めた。一人も討たせず、自陣を固めて見物するだけだった。

孫子の兵法に「帰心は食い止められず、敵を包囲したら逃げ道を開けておけ」という。

死に物狂いになられたらこちらにも損害が出る。戦闘に勝たなくても戦いの目的さえ達すればいいわけであろう。ましてや落ちて行く兵などは逃がしてやった方がいい。

（それを秀政は見物していたとな）

秀吉は満足そうだったという。

信長公記に彼が登場するのは元亀三年八月だから二十歳である。朝倉義景に決戦を申し入れる使者としてであった。だが、この時は仲々返答が得られず、羽柴藤吉郎（秀吉）が虎御前山の定番として入っていた。以来、秀政は信長に従って各地に転戦する。

天正元年（二十一歳）、越前で一向一揆が起きた時、鎮撫に出陣するが京都に寄り、本願寺で一書を貰い、その足で赴いていた。この書面のため戦うことなく鎮撫に成功している。戦わずに勝つのが兵法の要諦だとすれば、彼はコツを知っていたことになる。

天正五年（二十五歳）、紀伊雑賀の徒が一揆を起こしたときも出陣、二年後、荒木村重討ちにも織田信忠に従い出陣。近江・長浜城主となるのは同九年である。翌十年三月、信長に従って甲州攻めに参加した。三か月後に信長は本能寺で自決に追い込まれる。

ときに秀吉の中国大返しがある。秀政はこの時、山崎の戦に先陣を申し出、天王山で明智軍と戦い、すすんで大津の打出浜で明智左馬助の軍と戦って破った。以来、秀吉に属し、秀吉から羽柴の称号を貰う。第一号だ。

信長の時代、すでに近江の坂田郡のうちで二万五千石を貰っていたが、賤ヶ岳合戦でも功名をあげ、この年、近江の佐和山城を貰って九万石の領主となっていた。天正十二年の長久手合戦では首級二百八十を討ち取る。この時三十二歳。翌年、紀伊根来寺討ちでも先鋒となり武功をあげ、この年、従四位下侍従に叙任、左衛門督を称する。この年、越前北庄城主（二十九万八百五十石）となる。十八万八百五十石が自領で、与力の村上義明が六万六千石、同溝口秀勝が四万四千石である。累進の早さは比類がない。

秀吉の九州攻略があるのだが、この時など蒲生氏郷も秀政の下知（命令）を受けることになり、氏郷は自殺か、世を捨てて出家するかとまで悩んだという。

北庄城修築の際、弟多賀出雲守の処置が悪く叱った。が、これを根にもって多賀は翌朝辞任、城を去った。それを知った秀政は使いを出し、黄金十枚を餞けとして使いに持たせ、あとを追わせた。使いが出発した後、秀政は、その十枚が包まれていた紙を一枚づつ丁寧に皺をのばし、箱におさめながら呟いた。

「金は、使う時には思いきって使うもの。だが、紙一枚といえども無駄にしてはならぬ」

度量が大きく、これも名人級だ。城下の辻に、大きな立札が立った。なんと、

「堀左衛門殿の悪き政事三十余条以下の如し」と大書、ずらりと書いてある。執政批判である。重臣たちは仰天した。ただちに報告された。と秀政は袴をつけ、口をすすぎ、引っこ抜かれてきた大立札を三度おしいただき、

「このような諫言をしてくれる者がいたか。



筒井順慶



堀秀政



根来寺無縁仏

これこそ天のわれに与えたましいもの。これはわが家の宝なり」

大切に箱におさめておけと命じた。それだけではない。三十何か条は政治改革の建言でもある。ただちに断行された。かけ声だけで行政改革はさっぱり……というのとはわけが違うのである。

この大立札は秀政自身が立てたものであった。名人級でないと出来ない。ふだん、

——油断。

と書いた額をかかげていたという。武将の心がけ、政治家の心がけとして、成程……と思わせられる。だが、人の寿命だけはどうしようもない。三十八歳の急逝が惜しまれる。

蒲生氏郷 がもううじさと

弘治二年～文禄四年（一五五六～九五）

稲葉一鉄の武勇談はうまかった。十三歳から信長の手許におかれていた蒲生鶴千代（のち氏郷）は、一鉄の話を一語もききもらすまいと一鉄の口許を凝視していた。

またたきもせずに一鉄の話をきいている鶴千代に一鉄が気付いた。

（この子はただものではない）

一鉄は信長に報告した。氏郷の初陣は十四の時。武勇談に学んでその通りに実行した。初陣には二名の介添役がついたが、介添役にさきだって突入、名ある者の首をとった。この年、元服して忠三郎。信長の娘冬姫と結婚した。これが永禄十二年。以来。朝倉攻め、近江鯰江合戦、小谷城攻め、伊勢長島合戦、長篠戦、伊丹城攻め、伊賀攻めを経て、十三年後の本能寺の変。二十七歳になっていた。日野城にいた氏郷は、信長の家族や女房たちを、父賢秀と保護した。

ついで織田信雄に従い上洛。このあと秀吉に属し、小牧、長久手戦他の功で伊勢国松ヶ島城で十二万石。天正十六年、松坂城を築いて移り、小田原戦後は奥羽征討軍の先鋒。やがて会津六郡に越後・山道の地計十二郡を貰い陸奥出羽の守護。百二十余万石だ。

会津拝領の時、退出し、部屋の柱に寄りかかって涙ぐんだ。気付いた山崎右近が、多くの所領を受けて感激しているのかと推しはかり、「もっとものことにござる」と言った。が、氏郷には首をふり、小声で、

「そうではないのだ。たとえ小身でも、都の近くにいれば天下を狙うことも出来よう。だが、どんなに大身でも雲をへだて、海山越えた遠国にあってはその望みもかなうまい。もはや、天はわれを見棄てたりと思えば不覚ながら涙も湧いたわい」（名将言行録）

いつのことか、太閤がおなくなりになったら関白殿（秀次）が天下の主人でございましょうか、というのに対し、あの愚か者に誰が従うか、といった。だけでなく、それでは誰が、というと加賀の又左衛門（利家）といった。もし、そのお方がなくなればというと、

——そのときは俺さ。

こういい、家康の名の出ないのを不審に思い、それを口に出す。と、あんな吝嗇漢は話にならないと答えている。これは老人雑話というのにのっている。その気概が、もうこのとき、つまり会津転封でなくなっていたのだろうか。

大物の器量をもちながら、四十歳で病歿したことへの同情か、逸話も多く残る。

彼の戦いぶりはいつも指揮官先頭だった。どんな戦いでも先陣にかならず銀の鯰尾の冑があった。氏郷のものである。ということから秀吉が、氏郷、家康、利家、秀家（宇喜多）、輝元（毛利）と雑談の時、かりに今織田上総介（信長）に兵五千、蒲生氏郷に兵一万を率いさせて合戦をさせたとする。諸君はどちらに付くかね、とやった。ウーム、皆考えこんだ。この時秀吉は、私なら上総介につく、といった。理由は、蒲生方から冑つきの首を五つ取ればそのうちには必ず氏郷のものがある。しかし、上総介方は四千九百人まで討ちとられても上総介は討死していないはずだ。こう比べると、大将が早く討ち取られた方こそが負けである、といった。

——氏郷はやり過ぎであるぞ。

という教えであったかもしれない。とにかく氏郷の銀の鯰尾冑の先陣は有名だった。

松田金七秀宣という男がいた。生来、剛強な性格で、奈良にあったころ人と争論し、殴られ、恥をかいた、と思って死のうとした。だが人にとめられて思いとどまった。以来、鎧の背に金箔で、「天下一の卑怯者」と書きつけた。この男を蒲生家の河合某が氏郷に紹介した。麾下に加わることが出来る。

というのも氏郷が、

「その男正直ではないか」

といって鉄砲隊頭に任用したからである。眼識狂うことなく、戦ごとに功績があり、のち、長束正家につかえて関ヶ原戦で戦歿して



百地一族の墓

いる。
氏郷の享年は四十。少し早過ぎる。

生歿年不詳その他

荒川新八郎 あらかわしんぱちろう

?～天正二年(?～一五七四)

馬廻り。冑の前立に「運は天にあり、死は定」と文字をつけた。長島攻めで奮戦、何度も堤より下り、水を飲んだ。冑の前立を水鏡に見、その度に奮戦、ついに戦死。

原田直政 はらだなおまさ

?～天正四年(?～一五七六)

初名塙重友。武功を重ね、天正三年から大和の守護。信長の推挙で朝廷から鎮西の名族原田氏を名乗ることを許され、備中守直政となる。天正四年、筒井順慶らを率い、天王寺砦を攻め、三井寺攻めの折は本願寺勢の鉄砲隊に遭い戦死。

村井貞勝 むらいさだかつ

?～天正十年(?～一五八二)

尾張時代から奉行の一人。天正元年専任の京都所司代。洛中・洛外の政治、朝廷対策にあたる。外交・民政面の事務に長じていた。

毛利新介 もうりしんすけ

?～天正十年(?～一五八二)

尾張の人。桶狭間戦では小姓として従軍。敵将義元の首をあげた。伊勢北畠攻めにも従軍。側近として信長の朱印状発給にも携わった。本能寺の変時、二条御所で討死にした。

赤座永兼 あかざながかね

?～天正十年(?～一五八二)

越前の人。もと斎藤氏の臣。龍興没落後、信長に仕えた。本能寺の変では信忠づき。安土に戻り一戦をと諫言したが容れられず二条御所で戦死。

長谷川秀一 はせがわひでかず

?～文禄三年(?～一五九四)

尾張の人。信長側近。安土宗論やバテレン屋敷築造、安土城下の馬場造営の奉行。本能寺の変時、家康の接待・案内役で三河に逃れた。のち秀吉に属した。

生駒家長 いこまいえなが

?～慶長十二年(?～一六〇七)

継室生駒氏の兄。豪族。朝倉の金ヶ崎疋壇城攻めでは信長の側近にあり、矢を受けつつ



井口弾正菩提寺碑 〝いのくち〟と読む。近江の浅井氏の有力な家臣で、井口城主。娘は浅井久政に嫁している。





松永久秀

防戦。姉川戦では佐々勢のうちにあって戦功をあげた。本能寺の変後は信雄に仕え、のち秀吉に属した。

高山右近　たかやまうこん

?～元和元年(?～一六一五)

重友、長房ともいう。摂津高山の人。外様。安土桃山・江戸前期のキリシタン大名。洗礼名ドンジュスト。荒木村重と通じ高槻城を乗っ取った。村重に属したが、村重が信長にそむくと信長に従い、明智麾下となる。山崎戦では秀吉について播磨明石城主。九州に出兵。大友吉統、小西行長、黒田孝高らを洗礼させた。キリシタン禁制で城を没収され、小西、前田利家に頼り、関ヶ原では前田に従った。のち、家康の命でマニラに追放された。茶人としても有名。

太田牛一　おおたぎゅういち

大永七年～?(一五二七～?)

尾張の人。直臣。信長公記や信長記の作者。当初は僧侶だ、のち還俗して信長に仕えた。はじめ弓衆。機会をみては日記をつけていたのが著述のもとになった。

松永久秀　まつながひさひで

永正七年～天正七年(一五〇一～七七)

大和信貴山城主。下剋上の代表的人物とされる。三好長慶に仕え、娘をめとり、やがて主家をしのぐ。眉間寺山に多聞城を築く。長慶の嫡子を毒殺。長慶の弟を擁立、専権をふるった。長慶歿後、足利義輝を襲い自殺させ、筒井順慶と戦い、東大寺に放火、大仏殿を焼いた。信長が上洛すると従うが、天正五年そむいて信貴山城に戻る。同年信忠を将とする織田勢に攻められて自刃。六十八歳。



猪子兵助の墓　高就ともいう。信長の家臣で石山本願寺攻めや遠江攻略に参戦。本能寺の変に二条御所で討死した。年齢不詳。



セミナリヨ跡　天正八年、オルガンチーノの願いを入れて、三階建ての神学校が造られた。ここではオルガンやビオラが演奏され、少年少女たちによって讃美歌がうたわれた。

織田一族衆と女たち



織田信雄



織田信忠

織田信忠　おだのぶただ

弘治三年〜十年（一五五七〜八二）

幼名奇妙。母は生駒家宗の娘。清洲城に生まれた。夫人は武田信玄の娘というが実際は許婚者だった。一生独身を通した松姫がその人である。成長するに従い、政治軍事を委ねられるようになる。長篠戦のあと、武田の要地である岩村城を奪った。この功績によって岐阜城を貰い、尾張と美濃の支配をまかされた。二十一歳の天正五年、松永久秀を滅ぼした。甲州遠征では先鋒で出陣。信長の来着以前に攻略を完了していた。

本能寺で父信長と盃を交わしたのち、少し離れた妙覚寺に引き取った。本能寺の変が起きた。村井貞勝が急変を告げた。一緒に駆けつけたがもう入れない。やむを得ず二条城に入った。そこで城を枕に一戦か後図を策して脱出するかとなったが信忠は光秀を良く見ていた。「すでに退路には手を打っているであろう。土民も落ち武者狩りに出没しているに違いない」。英雄の子にふさわしい最期を遂げようと一戦し、自刃した。享年二十六歳。二子が秀信、秀則である。



織田家家臣供養塔（阿弥陀寺）本能寺の変では森三兄弟をはじめ、小姓、番衆、中間衆など百余名が信長とともに殉死した。



織田信忠像と花押

織田信雄　おだのぶかつ・のぶお

永禄元年〜寛永七年（一五五八〜一六〇三）

太平記で有名な北畠氏は、親房とその子顕家。顕家の弟が顕能。この顕能が伊勢の国司北畠具教の初代。具教は剣聖として有名な塚原卜伝から、秘剣〝一の太刀〟を伝授されたほどの人物だった。だが、天下麻のごとく乱れた以降の永禄年間に入ると、具教の家人柘植某は、信長の臣滝川一益の紹介で信長に仕えた。具教が信長勢の侵攻を受けるのはそれからである。

だが、北畠氏は多気・大河内両城によって良く防いだ。ということもあって、やがて講和が結ばれた。条件＝具教は三瀬山居に隠居、信長の次男茶筅丸（信雄）を人質として北畠



朝倉館全景

氏へ、というものだった。信雄はまだ少年だった。
　信雄が十三歳になった元亀元年、具教は出家、信雄は具教の娘と結婚して北畠氏を継いだ。具教には長男がいたのだが病弱のためそういう手を取らざるを得なくされたようである。具教は大御所、その長男は中御所、この時改名した信雄は御本所（城）と呼ばれた。
　長男の信意は恨みに思った。当然、意思の疎通を欠いた。信長の方は天下統一のため伊勢も併呑しようとしていたから、こういう間隙に乗じて再び侵攻を開始した。具教は殺された。信雄は具教の娘と琴瑟相和していたらしい。ということもあってか、信雄の人生観が大きく変わったという説がある。そうかもしれない。
　やがて本能寺の変だ。信雄は日和見を決めこむ。父の仇を報じて天下を狙うというほどの器量の持ち主ではなかった。だから、清洲で跡目相続の会議が聞かれても秀吉にイニシャチブを取られっ放しだった。その後の小牧・長久手の戦いでも家康の力を借りたのは良かったが、家康に無断で単独講和をやるような無能さだった。
　一方、秀吉はというと、関白に上る。もっとも信雄は秀吉の奏請によって内大臣だ。やがて小田原戦。北条氏は滅ぶ。信雄はこの秀吉の勢いを理解してない。家康さえ駿河から江戸へ領地替へになった。信雄はその後へといわれて、「わしは尾張でなければいやだ」と駄々をこねた。「馬鹿もん」とばかりに秀吉は怒った。下野の烏山に配流同様となってしまう。この時剃髪して常真。のち許されてお伽衆。秀吉歿後は家康べったりとなり、五万石を貰って京都で死んだ。子孫は天童と丹波でそれぞれ二万石を貰い、明治維新まで細々ながら続いた。

織田信孝の墓　信長の三男で伊勢の神戸氏を継いだ。本能寺の変後の待遇に不満で、賤ケ岳合戦には柴田方につき敗れて岐阜城を追われ、知多半島の内海で自決した。



永源寺（滋賀県神崎郡永源寺町）　信長が八風峠越えで京都を往還する際によく宿所として用いた。寺とはいえ、石塁で覆われた城砦の観がある。



織田信孝　おだのぶたか

永禄元年～天正十一年（一五五八～八三）

　信雄より二十日ほど誕生は早かったが、生母が違い、届けるのも遅れたため信雄の後塵を拝することになり、それが一生尾を引いたようだ。だから形の上では三男だ。戦いの経験は信雄よりは多い。
　本能寺の凶変時には、四国攻めで大坂に集結していたとき信孝も、すぐさま、父の仇を討つ器量にはかけていた。大坂城にいた信澄を討つにとどまった。信澄の夫人は光秀の娘であり、また、信澄は信長に殺された信行の子でもあった。光秀と信澄との間を疑われたのだが今日となってはこの間の通謀があったのかどうかはわからない。
　清洲会議では柴田勝家にかつがれたが秀吉が推戴した三法師に敗れた。居城は岐阜。勝家・秀吉戦では勝家に呼応したからここで運命が窮った。結局自刃させられた。享年二十



百済寺の石段　観音寺城の六角氏は百済寺の城砦化を図り、大量の石を積み上げて堅固なものにした。



織田信雄

六歳。

織田信広　おだのぶひろ

?〜天正二年（一五七四）

信長の異腹の兄に当たる。三河安祥城の守将だった。が、今川方から攻められ、落城。身柄を拘束された。のち、今川・織田の人質交換があった。その時、織田方に拘束されていた松平竹千代とこの信広が交換ということになり、帰ることを得た。

弘治三年、織田信行が兄に背いた頃、信広も美濃の斎藤氏と謀って背いた。清洲城を乗っ取ろうとしたが失敗した。だが、許され、信長に属し、伊勢長島一揆戦の指揮者として討死している。信長よりは若干の年上ではあるまいか。

織田信包　おだのぶかね

天文十二年〜慶長十九年（一五四三〜一六一四）

信秀の四男である。織田の代に、伊勢の長野氏の処に送り込まれた。伊勢・越前・紀州・石山などの合戦に参加。天正九年の京都での馬揃えには連枝衆として参加していた。秀吉時代に入ってからは、小田原北条の助命を言い出したため秀吉の機嫌をそんじ、伊勢安濃津城主を棒に振った。そのため剃髪して老犬斎と称した。のち、丹波柏原に三万六千石を与えられた。清洲でお市親子を預かっていたこともある。歿年七十二。

織田信澄　おだのぶずみ

弘治二年〜天正十年（一五五五〜八二）

信長の甥だ。本能寺の変後、神戸信孝や丹羽長秀に疑われて殺された。光秀の長女をめとっていたためである。

もっともらしく、光秀から「信孝を殺せ、成功の暁には摂津半国をやる」といわれていたというがさてどんなものであろうか。生い立ちは、三歳の時に父信行を殺され、以来柴田勝家に育てられた。後、津田氏を称し、尾張河西の地を領していた。歿年二十八。二十五という説もあるようだ。

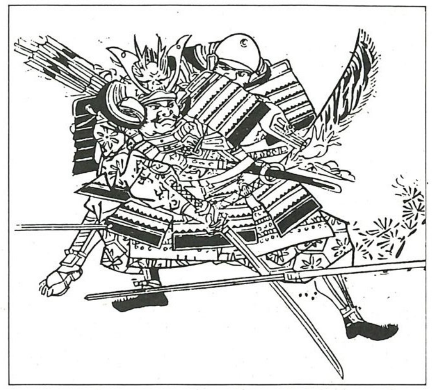
織田信治　おだのぶはる

?〜元亀元年（一五七〇）

信秀の五男、信長の弟。尾張の野夫城主。近江の坂本を守備中、浅井長政、朝倉連合軍の攻撃を受け森可成とともに討死にした。系図纂要の二十六歳説で行くと、天文十四年生まれになる。



朝倉義景の墓



織田信時　おだのぶとき

?～弘治二年（一五五六）

信秀の六男。信長の弟。安房守。叔父津田信次の家臣が信長の弟秀孝を誤殺。信次は信長の怒りを恐れて守山城から逃げた（のち信長に呼び返されて守山城主となるが長島攻撃で討死に）。その守山城の後釜に入ったのが信時。若衆寵愛が原因で家老に責められて自刃した。信長の命令で殺されたという説もある。

織田信興　おだのぶおき

?～元亀元年（一五七〇）

信秀の七男。信長の弟。小木江城主。屋張海部郡だから、最前線の砦であろう。のち、長島一向一揆の攻撃を受けて落城自刃。

織田秀孝　おだひでたか

?～弘治二年（一五五六）

信秀の八男。信長の弟。信時の項の事件で死んだ。信長はかえって「我が弟ともあろうものが供も連れず一人で飛び回るとは何事か……」と怒ったという。

織田秀成　おだひでしげ

?～天正二年（一五七四）

信秀の九男。信長の弟。長島一向一揆のとき討死に。

織田信照　おだのぶてる

生没年不詳

信秀の十男。信長の弟。愛知中根村の土豪の養子となる。愚鈍だったようだ。そのため、甥の信雄から食禄を供されて暮したと伝わる。



浅井長政



朝倉義景

斎藤道三の墓



浅井氏及家臣供養塔　小谷城の落城にはまた多くの家臣が戦死。長政の自刃後、追い腹を切った者も多かったという。



織田長益　おだながます

天文十六年～元和七年（一五四七～一六二一）

信秀の十一男。信長の弟。大草城主（現知多市）。参戦は天正十年の甲州攻撃。本能寺の変時、二条城にいた。大味噌を付けたのがこのとき。

「織田ノ源五（長益）ハ人デハナイヨ。オ腹召セ召セ召サセテオイテ」

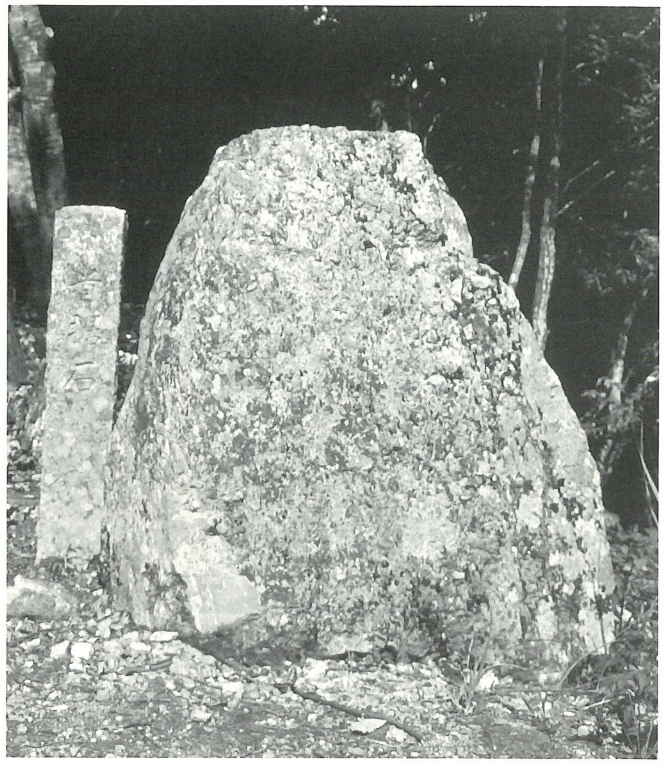
自分は安土へ逃げ帰った、と京童から誇られた。信長の嫡男信忠に自決を勧めた。自分も自決するのかと近臣は思った。ところがいつのまにか消えてしまったのであった。

小田原陣のあと、秀吉から、「楽しみのないというのを改めて楽しみ有りとしたらどうか」といわれて〝有楽〟と号したという。天正十三年ころ剃髪、〝無楽〟と号していたらしいのである。

関ケ原戦では家康につき、大和で三万石。大坂冬夏の陣では、城内の淀君には叔父にあたったことから、城内への出入り自由だ。何かと家康の役に立ったらしい。夏の陣では城陥落直前に脱出していた。晩年、京都に隠棲茶人としてのんびり朝夕を送った。

子孫は大和に二か所。それぞれ一万石ずつ明治維新まで続いた。東京の有楽町と数寄屋橋の名は、長益が、家康から貰った邸跡だと

伝わっている。



小谷城の首切り石

帰蝶（濃御前） きちょう（のうごぜん）

生歿年不詳

信長の正夫人。典型的な政略結婚である。帰蝶は美濃の斎藤道三の娘。その結婚は何時だったのか。それがはっきりしない。帰蝶は十四ぐらい、という説を取れば信長は十五歳か。尾張に嫁ぐと、帰蝶は、名古屋城近くに美濃御殿というのを造って貰ったらしい。美濃からついてきた帰蝶付きの侍女がなかなかの女人だったようだ。いろいろな意味で警戒厳重なのである。そういうことかどうか帰蝶が子を生んだという記録は全くない。

信長が生駒氏との間に嫡子信忠をもうけるのは帰蝶が嫁いだといわれる天文十七年から九年後の弘治三年である。

この九年間に、斎藤道三も死んだ。信長の父信秀も歿した。情勢は変わっている。政略結婚で嫁いできた帰蝶の役割も終っていただろう。だから、この九年の間に美濃へ戻ったか、あるいは病歿したかそのどちらかではないか。本能寺の変で信長とともに戦った婦人がいたという説が有る。これを帰蝶というのは創作であろう。

生駒氏 いこまし

?～永禄九年（一五六六）

信長の継室。信忠、信雄の生母。武功夜話によると、帰蝶との縁組以前からこの生駒蔵人家宗の娘との間が噂されている。だったとしてもずっとあとのことではないのか。また、生駒氏は、家康の嫡男岡崎三郎信康に嫁いだ五徳姫も生んでいた。歿年は信忠を生んでから九年目に当たる。歿時信長は三十三歳。非常に嘆き悲しんだという記録がある。彼女への愛情の深さが計られる。

坂氏 さかし

?～天正十一年（一五八三）

生駒氏を事実上の正室としてみると坂氏は第一番目の側室ということになる。三男信孝を生んだ。これが悲惨な最後のもとだった。信長歿後、信孝は柴田勝家と結んで秀吉と戦う。やがて降る。このとき生母の坂氏を秀吉の所へ人質に出した。再び信孝は柴田勝家と挙兵した。秀吉は怒った。その結果が坂氏の磔殺である。

お鍋の方 おなべのかた

?～慶長十七年（一六一二）

子連れだったが側室となった。高畑氏の四女。小倉実澄に嫁いで二人の子に恵まれた。が、信長に内通した疑いで実澄は自刃に追い込まれた。未亡人お鍋は二人の子を連れて信長に事情を訴えた。信長は三人を保護した。

何時側室となったのか分からないが、七男信高、八男信吉、振姫を生んだ。

本能寺の変が起きた時、京の宿に宿泊していた小倉松寿（竹千代）は本能寺に駆け込んで奮戦、討死にした。お鍋の連子のうちの一人だった。子連れで信長の所へ来た時十八とすれば歿年は六十二になる。そのあたりであろう。

お市の方 おいちのかた

天文十六年～天正十一年（一五四七～八三）

画像が残っている。戦国一番の美女という名に背かない。信秀の五女。信長の妹。はじめ、浅井長政に嫁いだ。政略結婚である。浅井氏は織田氏と犬猿の仲である越前の朝倉氏と切っても切れない間柄だった。それだけに初めは渋った。

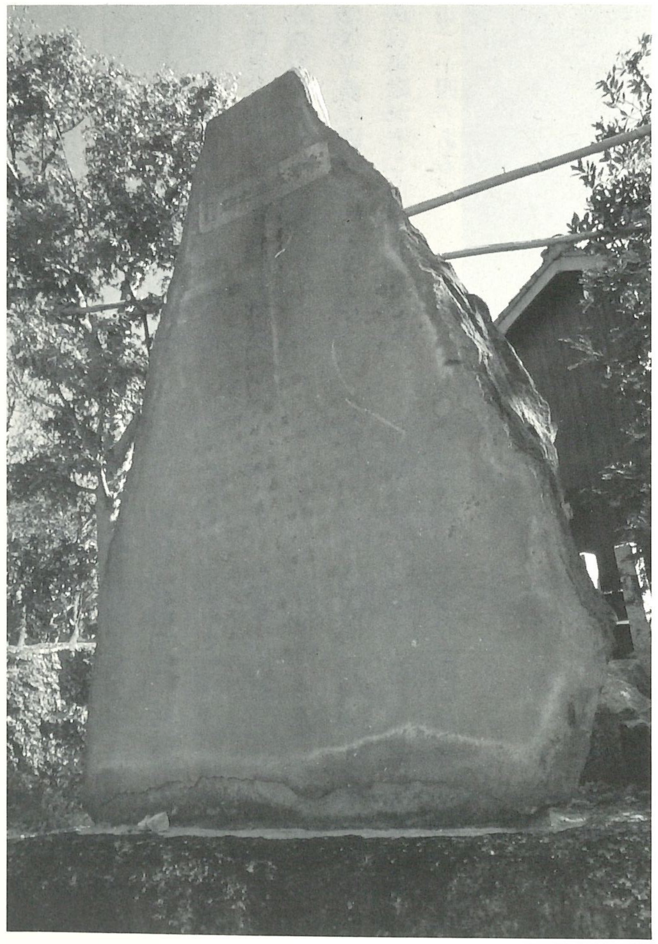
織田も粘るが浅井も頑張る。

浅井では「お市を貰ったからといって朝倉氏とは縁は切らない」という。それも永久にであると念を押した。織田朝倉の永世和睦という言質も取った。信長はのんだ。永禄七年。浅井長政二十、お市十八。

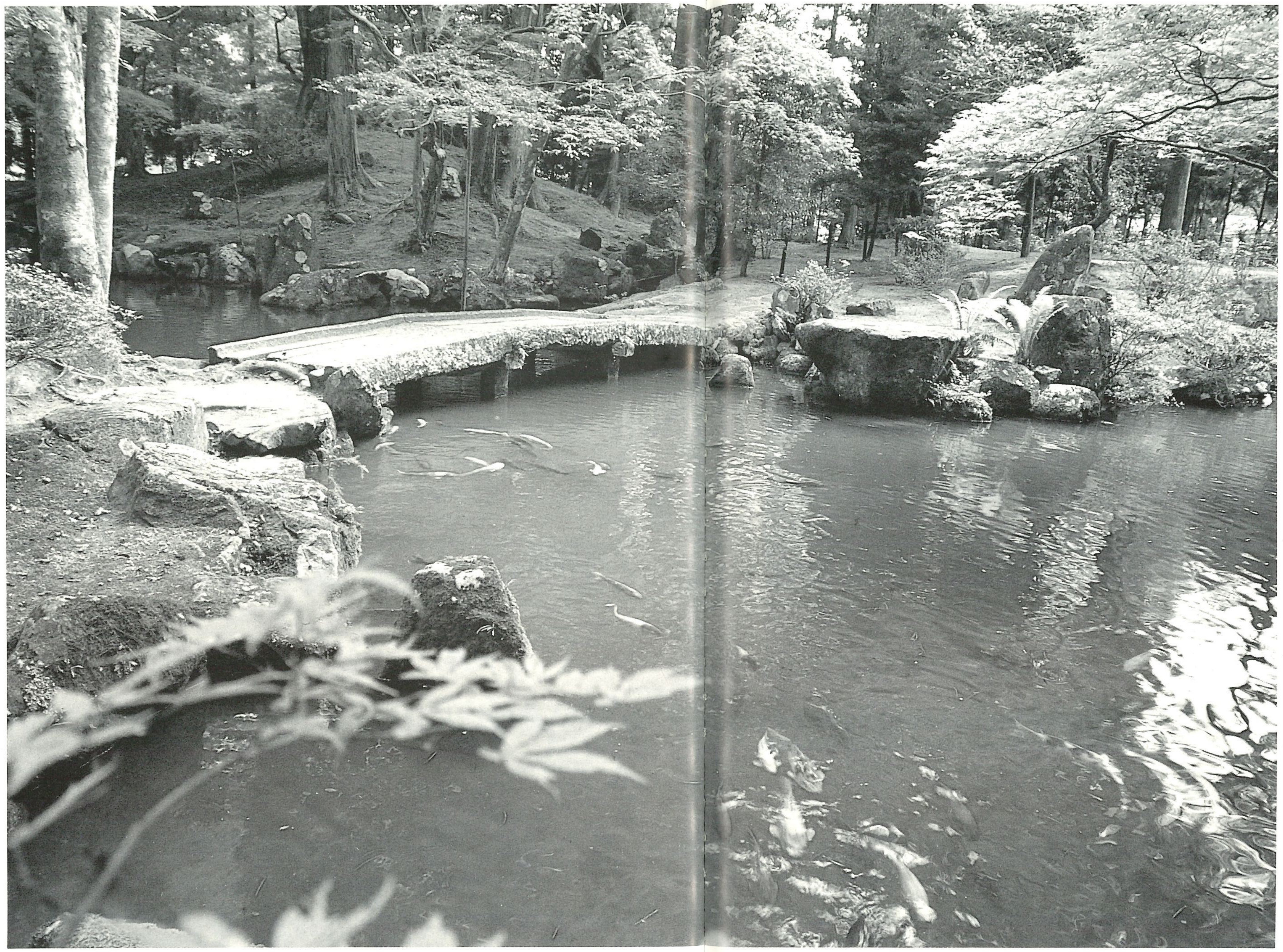
信長は三年後に美濃の斎藤龍興を追放、稲葉山城を占領した。浅井氏は美濃の西隣に位置する。お市を送り込んだのは、まさに孫子



お市の方像（福井市左内町・西光寺）　信長の妹。政略の道具にされて浅井長政に嫁ぎ、信長歿後は柴田勝家に嫁したが、天正十一年北庄城落城の際、勝家と共に自刃した。三十七歳。



鳴海城址之碑　桶狭間合戦で武名をあげた岡部元信は、のち武田家に仕え、天正九年三月遠江高天神城の戦で戦死。あくまでも織田・徳川軍に抵抗をつらぬいた。



北畠氏居館庭園

の兵法である〃遠交近攻策〃にほかならない。これで織田信長の西上は確保された。

ところが、初め、朝倉を頼っていた足利義昭が信長に鞍替えした。朝倉は快くない。そこへ、信長から、「朝倉殿もご上洛を」という使者が何度も往復した。朝倉はしらん振りだ。信長も不愉快である。そんな信長を怒らせるようなことがさらに起こった。

信長は美濃を領有した。その美濃と越前の境に朝倉の領地があった。それを朝倉は本願寺に寄進したのである。朝倉にすれば自分の物をどうしようと勝手だ。ところが、信長と本願寺は犬猿の仲、殺し合いが続いている。

あてこすりである、と信長は取った。さらに義昭が、信長に体よく利用されているのではないか、と再び朝倉に秋波を送り始めたのである。頼られた朝倉は信長に反抗的な態度を露骨にし始める。

ついに信長は朝倉討伐を決心する。浅井長政が困った。父の久政は朝倉べったりだ。愛妻お市との間には可愛い姫が三人も生まれていた。平穏な良い家庭がそこにはあった。長政二十六、お市二十四である。

それなのに、いきおいというのか、人物を見る目がないというのか、浅井は朝倉に加勢というほら貝を天に向かって吹き上げた。お市の不幸がここに始まる。

時に、信長と徳川家康の連合軍は越前敦賀にいた。朝倉攻撃に懸命だったのだ。そこへ浅井の使者だ。使者は、長政の信長に対する縁切り状を持参していた。信長は信じられなかった。だが本当だった。もう一人の使者は、「お市さまからです」と一包みの物を差し出した。口上があった。「兄上の大好物の小豆を」である。だが、信長は小豆など好物ではない。信長は袋を手に取った。

袋の上下が固く結ばれていた。

「前も後ろも結ばれています。どうぞお気を付けを」

というお市の謎が信長にはすぐ解けた。

決断した。迅速な退却だ。信長生涯中もっとも危ない場面だった。

それから三年。天正元年の小谷城攻めとなる。この間、姉川戦、三方ヶ原戦があった。この年、お市は二十七。長政は二十七。女子三名。男子二名の子持ちだった。長男万福丸が九歳、次男幾丸が一歳。浅井父子は戦歿した。万福丸は逃したが捕まり、殺された。生後三か月の幾丸は生を全うした。お市と三人の娘も城を出て助かった。

そして落城から九年。だが、再び、この名花に無残な戦国の猛火は襲いかかる。その手始めが兄信長の横死だった。お市に取って運命の神は、なおも非情の豪雨を注いでやまない。柴田勝家と再婚させられたのはいいのだ



前田利長

が、勝家と秀吉の対戦になったのである。三人の娘は城を出た。だが、お市は城に留まり、勝家と運命をともにする道を選んだ。生きることに疲れたのだろうか。

さらぬだに打ちぬるほども夏の夜の
別れをさそふほととぎすかな

これが辞世。北の庄の天守閣の下に枯れ草が山と積まれ、やがて火が付けられた。

お市、このとき三十七歳。だが、未だ二十二、三歳にしか見えなかった、と。炎は天守を包み、高く真直ぐ天に昇った。時に、天正十一年四月二十四日。

蒲生氏郷夫人 がもううじさとふじん

?〜寛永十八年（一六四一）

信長の娘。生母は不明。十二の時嫁いだという。永禄十二年だったというからこれがあっているなら永禄元年（一五五八）の生まれとなり、歿年は八十四歳の計算になる。九歳だったともいう。男女二子をもうけ、男子は秀行。会津藩主。女子は前田利家の次男利政に嫁いだという。

松平信康夫人 まつだいらのぶやすふじん

永禄二年〜寛永十三年（一五五九〜一六三六）

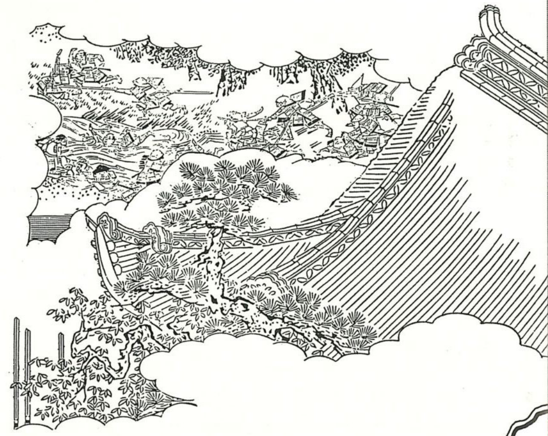
信長の娘。生母は生駒氏。信忠・信雄の妹に当たる。三人が同腹だ。五徳（火鉢の中の三本足の鉄瓶受け）のようにということか、五徳と名付けられた。永禄十年九歳で岡崎に嫁した。女子二人を生んだが、信長の命で信康が切腹させられると実家に戻り、信長歿後は兄の信雄のもとで過ごした。長女は小笠原秀政に、次女は本多忠政に嫁した。歿年七十八。

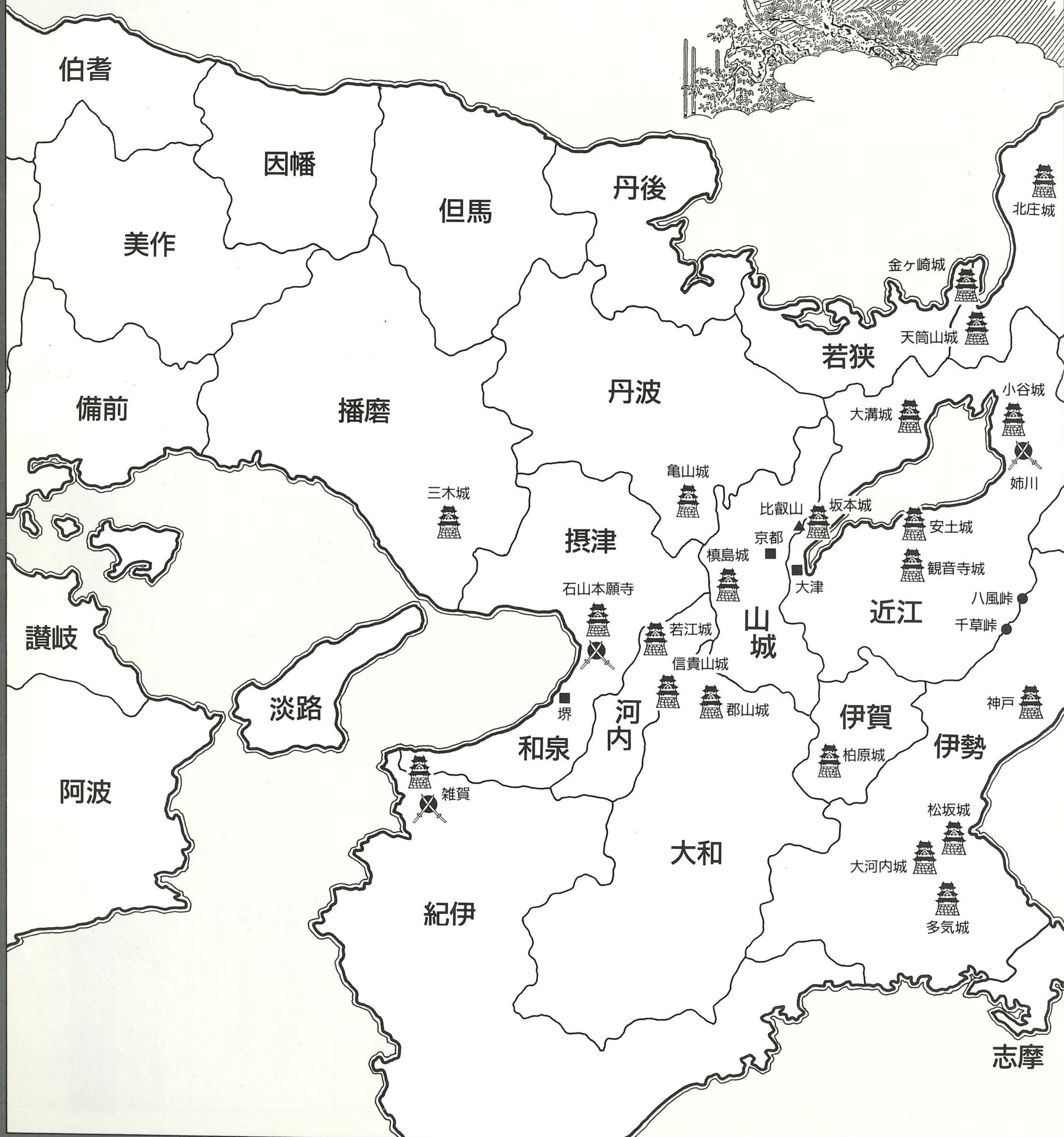
前田利長夫人 まえだとしながふじん

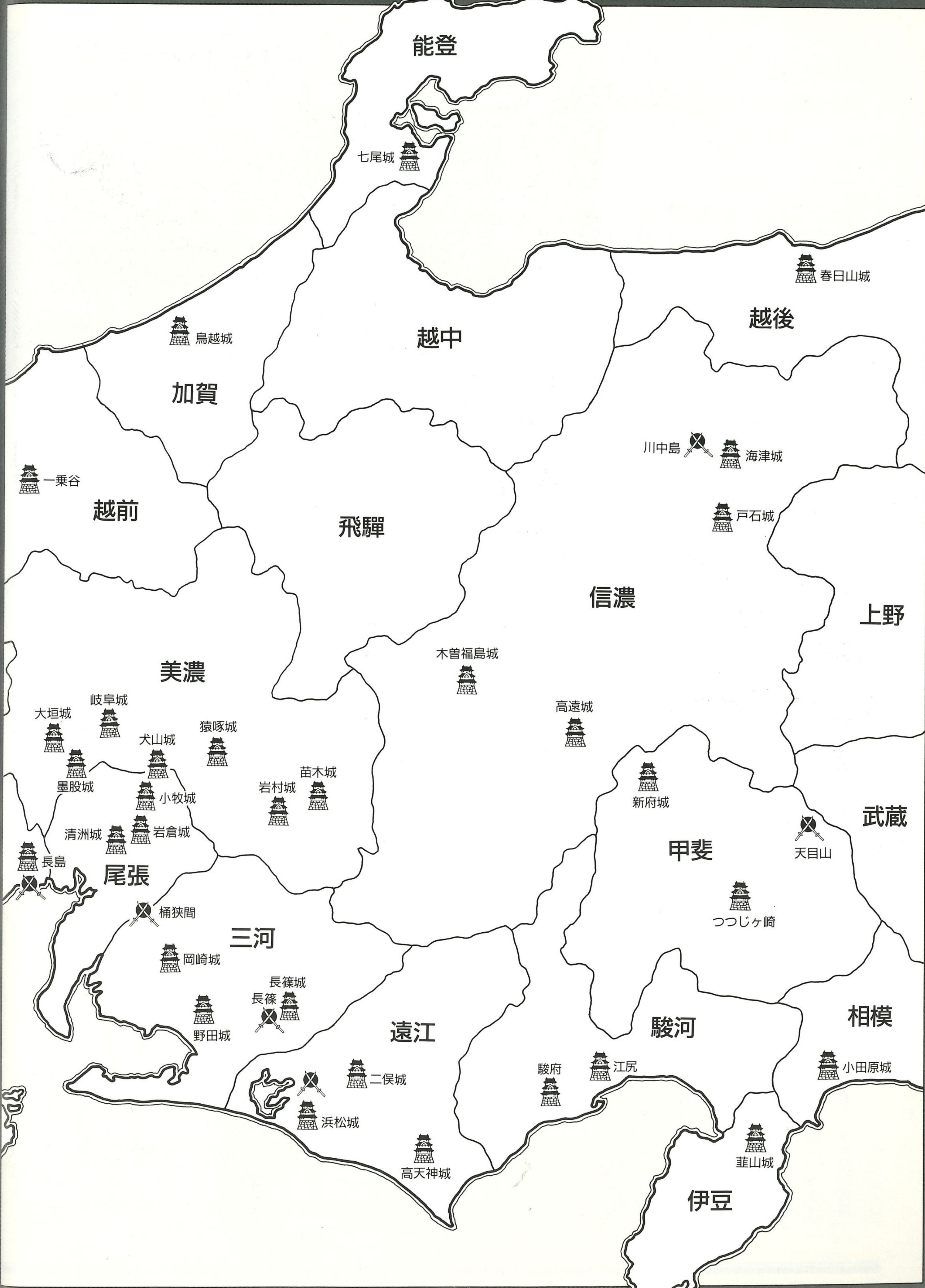
天正二年〜元和九年（一五六四〜一六二三）

信長の娘。天正九年八歳の時、利家の長男に嫁した。本能寺の変では、夫妻で京都に向かっている時だった。そのため夫人は前田氏ゆかりの荒子村に避難。利長は安土城守備に。子はなく利長歿後出家して玉泉院。歿年五十。

織田信長関係地図

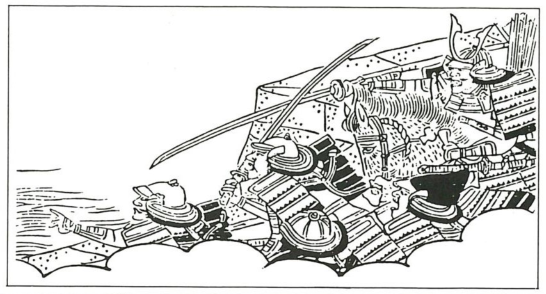



伯耆
因幡
但馬
丹後
美作
備前
播磨
丹波
若狭
北庄城
金ヶ崎城
天筒山城
小谷城
姉川
大溝城
亀山城
三木城
摂津
比叡山
坂本城
京都
安土城
槙島城
大津
観音寺城
近江
八風峠
千草峠
石山本願寺
若江城
山城
信貴山城
讃岐
淡路
堺
郡山城
河内
伊賀
神戸
和泉
伊勢
柏原城
阿波
雑賀
松坂城
大和
大河内城
紀伊
多気城
志摩


能登
七尾城
春日山城
越中
越後
鳥越城
加賀
川中島
海津城
一乗谷
越前
飛騨
戸石城
信濃
上野
木曽福島城
美濃
大垣城
岐阜城
猿啄城
高遠城
犬山城
苗木城
墨股城
小牧城
岩村城
新府城
武蔵
清洲城
岩倉城
長島
尾張
甲斐
天目山
桶狭間
つつじヶ崎
三河
岡崎城
長篠城
長篠
野田城
遠江
駿河
相模
二俣城
駿府
江尻
小田原城
浜松城
高天神城
韮山城
伊豆

◉織田信長略年譜

杉田幸三







西暦	天皇	年号	年齢	織田信長をめぐる事項	参考事項
1534 1535 1536 1537 1538	後奈良	天文 3 4 5 6 7	1 2 3 4 5	・信長出生（父信秀・母土田氏）、幼名吉法師。 ・父信秀、松平清康の計に乗じ三河侵入。	・豊臣秀吉、尾張中村に出生、幼名日吉丸。 ・毛利元就、尼子氏の生田城を陥れる。北條氏綱駿河を略す。 ・前田利家出生。美濃守護土岐頼藝の臣長井利隆歿し、長井利政継ぎ斎藤氏を称す（道三）。
1539 1540 1541 1542 1543		8 9 10 11 12	6 7 8 9 10	・信秀、伊勢神宮の遷宮費を寄進。 ・信秀の神宮造替費寄進はこの年か。 ・信秀、小豆坂で今川義元に敗れる。 ・信秀、京都御所修理費を献ず。	・家康の父広忠尾張に侵入。武田信虎信濃佐久郡を攻略。 ・武田信玄、父信虎を駿河に逐う。信虎、今川義元を頼る。 ・斎藤道三美濃を奪う。松平竹千代（徳川家康）出生。 ・ポルトガル船、種子島に鉄砲を伝える。
1544 1545 1546 1547 1548		13 14 15 16 17	11 12 13 14 15	・信秀、斎藤道三を攻めて敗る。 ・信長元服。 ・信長、三河大濱侵入。信秀、道三を破る。松平竹千代織田家に奪わる。 ・道三、和を求め娘を織田家に嫁すると約束。	・浅井長政出生。信玄信濃の箕輪城を攻む。今川義元北條氏康を駿河吉原に攻む。 ・黒田如水出生。
1549 1550 1551 1552 1553		18 19 20 21 22	16 17 18 19 20	・信秀歿（二十年説あり）。信長相続。庶兄信広と竹千代と交換なる。 ・信秀葬儀（一八年説がある） ・信長、道三と会見。平手政秀自殺。	・大友義鑑歿。ザビエル鹿児島から平戸に移る。信玄村上義清を戸石城に攻め敗る。 ・ザビエル印度に帰る。大内義隆長門大寧寺で自殺。 ・上杉憲政北條氏康に逐われ越後の長尾景虎を頼る。村上義清も景虎を頼る。川中島戦。
1554 1555 1556 1557 1558	正親町	23 弘治 1 2 3 永禄 1	21 22 23 24 25	・信長に秀吉仕える。 ・信長、叔父信光と同族の広光を斬り清州城を奪う。守山城・那古屋城も奪取。 ・林佐度守背く。信長、八月、清州に帰陣、林・柴田を赦す。 ・信長、弟信行を清州城に誘殺。 ・信長、今川の将松平家次を破る。	・武田・北条・今川姻戚関係なる。
1559 1560 1561 1562 1563		2 3 4 5 6	26 27 28 29 30	・信長、ほぼ同族を制し（尾張平定）、将軍義輝に謁す。 ・信長、桶狭間に今川義元を倒す。美濃に侵入斎藤義龍と戦う。 ・信長、徳川家康と同盟。斎藤龍興と戦う。 ・信長、小牧に要害を構える。信長の娘五徳、松平元康の嫡子竹千代と婚約。居城を小牧山に移す。	・上杉謙信、小田原城を囲む。同、信玄と川中島に戦う。
1564 1565 1566 1567 1568		7 8 9 10 11	31 32 33 34 35	・信長、皇室領回復の勅命を受ける。浅井長政と盟約。 ・信長、養女を信玄の子勝頼に嫁す。覚慶（のち将軍義昭）より出兵の依頼を受ける。 ・信長、義昭より幕府回復の命を受く。美濃の墨股に砦を築く。 ・信長、北伊勢に出兵。斎藤龍興を逐い岐阜に移る。皇室領回復の勅命を受く。 ・信忠松姫婚約。天下布武の朱印状を発給。奈良興福寺に同盟を要請。五徳、家康の嫡子信康に嫁ぐ。 ・信長、義昭を迎う。近江を平定上洛。義昭を将軍職につける。関撤廃に努力。	
1569 1570 1571 1572 1573		12 元亀 1 2 3 天正 1	36 37 38 39 40	・信長、堺を討つ。二條御所を造営。フロイスに布教許可。皇居を修理。 ・信長、義昭の実権を奪う。浅井・朝倉挙兵。近江一向一揆しきり。姉川戦。浅井・朝倉と和。 ・信長、一向一揆に敗れる。延暦寺を焼き打ちする。 ・信長、近江の浅井長政を攻める。信玄と絶ち謙信と結ぶ。三方ヶ原の戦い。 ・義昭挙兵。浅井・朝倉滅ぶ。長島一揆に敗られる。松永久秀降伏。	・武田信玄死す。
1574 1575 1576 1577 1578		2 3 4 5 6	41 42 43 44 45	・信長、公卿に列す。石山本願寺挙兵。長島平定。 ・信長、家康とともに、長條で武田勝頼と戦い破る。越前一向一揆平定。本願寺を降し和す。毛利と対決目立つ。 ・信長、安土築城。本願寺再挙兵。毛利氏と絶縁。 ・信長、雑賀一揆を討つ。松永久秀背く。秀吉に中国経略を命ず。 ・信長、九鬼嘉隆に鉄船造り命令。右大臣を辞す。荒木村重叛く。毛利水軍撃破。	・上杉謙信柴田勝家をやぶる。 ・上杉謙信死す。
1579 1580 1581 1582		7 8 9 10	46 47 48 49	・信長、安土天守閣竣功。安土宗論。家康の長子信康を自決せしむ。荒木村重有岡城を脱出。荒木の同族等磔殺。宇喜多直家信長に降る。 ・別所長治降伏自決。勅命あり本願寺と和す。石清水八幡宮造替。佐久間信盛、林佐度、安藤ら追放。春日社の鹿を撲殺するものを死刑とす。佐久間信盛を高野山に逐う。 ・信長、京都馬揃。高野山包囲。伊賀平定。 ・信長、伊勢神宮遷宮費寄進。四国出兵用意。甲州攻略・武田氏滅ぶ。明智光秀の謀反により、本能寺に自決。	・羽柴秀吉、吉川経家を降す。武田勝頼、韮崎新府城に移る。 ・秀吉、高松城を囲む。 ・秀吉、山崎に光秀を破る。

協力社寺・諸機関一覧

〈愛知県〉
萬松寺
熱田神宮
津島神社（津島市）
柘植修氏（清洲町）
高徳院
長楽寺
長篠城趾史蹟保存館
長福寺
清洲城歴史資料館

〈岐阜県〉
岐阜歴史博物館
円徳寺（岐阜市神田町６丁目）

〈京都府〉
阿弥陀寺
一休寺
建勲神社

〈滋賀県〉
浄厳院（安土町）
永源寺町役場
羽生道英氏（永源寺町）
安達勲氏（伊香郡木之本町）

〈三重県〉
願証寺（長島町）
飯高町役場産業課
北畠神社（美杉村）
名張市役所観光課
敢国神社（伊賀上野市）

〈和歌山県〉
和歌山市役所観光課
蓮乗寺（岩出町）

〈福井県〉
西光寺（福井市左内町）
敦賀市歴史民俗資料館
朝倉氏遺跡資料館
丸岡城歴史民俗資料館

〈石川県〉
裏本友之氏（穴水町）

〈兵庫県〉
神戸市立博物館

〈大阪府〉
南宗寺（堺市）

★編集後記

今井敏夫

中世から近世へ、日本史を大きく回転させた織田信長の四十九年の生涯は、ただ〝凄まじい〟の一言に尽きる。

その凄まじさに、ある者は「史上稀に見る天才」といい、ある者は「悪鬼外道の魔王」だという。信長があまりにも壮大な理想のもとに、苛烈極まる軍事行動をもって、天下統一に邁進したからであろう。

しかし、信長は鬼でも魔王でもなかった。『信長公記』をみると、天正四年以降、信長は数回にわたって三州吉良へ鷹狩りに出掛けている。阿修羅のごとき多忙な毎日を送る信長にしては珍しいことである。この鷹狩りは武田勝頼に対する示威行動であったと言われるが、それにしては小人数で軽装である。たんに鷹狩りを愉しんだと見てよい。とった獲物を気前よく家臣に分け与えている。

三州吉良は信長が十四歳で初陣を飾った思い出深い土地である。なだらかな丘陵と波静かな三河湾に鷹を放ちながら、信長は初陣のころを思い出していたのかも知れない。

そして〝尾張の大うつけ〟と呼ばれ、町中で人目もはばからず、栗、柿、瓜をかぶり喰いし、人の肩にぶらさがりながら暴れまわった、あの青春時代を懐かしんでいたのではなかったのか。

そう考えると、この信長という、十六世紀の日本が生んだ偉大な男が何となく身近に思えてくる。

●**撮影使用カメラ機材と取材車**　表紙撮影カメラ／ペンタックス67。SMC ペンタックス M200ミリレンズ。ペンタックス LX35ミリカメラ３台。SMC ペンタックス M20ミリ。M ズーム24ミリ～50ミリ。35ミリ～105ミリ。75ミリ～210ミリ。M 望遠レンズ300ミリ。ペンタックスオートストロボ AF400T。使用カラーフィルム RFP50。RDP100。取材カー／スズキカルタス1300。

＊訂正　51ページ下段の写真説明が左右入れかわっています。